
すらしゅ! 【桜高うんたんRock'n GIRLS】

暮灘雪夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

すらすしゅ！

【桜高うんたんRock'n GIRLS】

【コード】

N7950W

【作者名】

暮灘雪夜

【あらすじ】

「つえるかむ・とう・じゃんぐるー!!」

この物語は、爪先から頭の天辺までロック・スピリッツを宿らせた【ガルギモ】、”The Girl of Guitar Monster”と呼ばれた少女と…

彼女の愛したギターが、まるで生き急ぐように駆け抜けたハードでスラッシュでロックな半生を綴る…

必ず主要キャラに魔改造を施すこと(笑)

そして、趣味に走りまくること(笑)

原作と使う楽器も違ったりします(^^);

作者の趣味が丸出しなので、原作より音楽ネタがわんさか増えた、
一応ガールズ・バンド物です

こんな風変わりな”けいおん!”二次創作ですが、それでも構わな
いという皆様、どうかお付き合いくださいませm()m

第01話 “"がるぎもっ!"” (前書き)

皆様、お久しぶりですの暮灘ですm(____)m

今回は、私の新作”すらっしゅ!”をお読みくださりありがとうございます。
ざいます。

作品の性質上、今までと違いあまり肩肘を張らず、ほのぼのとした
作品を書いて行こうと思います。

かなり拙く辿々しく、オマケに作者の趣味丸出しの、音楽ネタ多数
織り込みな話になるかと思いますが、お付き合い下されば幸いです

(____)

では、暮灘の手で再構成された”けいおん!世界”の開幕です

第01話 "がるぎもっ!" ;

とある年の夏…

ライブハウス”PASSION”にて

「盛り上がってかぁーっ!!」

『『『うおおおーっ!!』』』

その夏の夜のライブハウスは満員御礼!

トリを務めるバンドのステージに、オーディエンスも大いに弾けていた。

勿論、そのバンドがこの近辺のインディーズとしては、かなり名前の知られたバンドのせいもあるのだが…
どうやら、理由はそれだけじゃないようだ。

「今日の客はラッキーだぜっ! なんとってとんでもねーレア・キヤラのご登場だあっ!!」

やたらとパワフルなバンド・リーダー兼女性ヴォーカルがMCを響かせる。

「Yui the Slash”だぁーっ!!」

その言葉と同時に、

”ギューーン　ギヤギユギチユイーオン”

と、スポットが当てられたギタリストの少女(?)は、ダウン・ポジションに構えていたギターをアップ・ポジションに持ち直し、足元のエフェクター群でたつぷりとディストーションを乗せ、アウトサイド・ピッキング中心のタツピングとチョーキングを効かせたヘヴィ・リフを披露する。

『きゃあああーっ！　Y u iさまあ~~~~っ！！』

『Y u i姐エーっ！！』

あちこちから飛ぶ黄色い声と野太い声援(笑)

どうやら彼女は、ローカルレベルでは相応に名の知られた人気者らしい。

とはいえ、そのリアクションもわからなくもない。

なんというか…

そう、ステージに立つ彼女：“Y u i”は、言うなれば一般社会にサルベージできるか心配なぐらい、“キャラが際立って”いた。

先ずは足元。ミリタリー・ブーツ風の黒のコンバース・オールスターで固め、生足の上はブルーデニムのショート・パンツに、細い腰に巻かれるブラックレザーのベルトに輝くのは、ゴシック・クロス

が透かし彫りにされたゴツい銀のバックル。

上半身に目を移せば、”シルクハットをかぶったクロスボーン・スカル”がプリントされた黒のタンクトップに、男物のチェック柄ウールシャツの袖を引き千切ったような長い丈のベストを、陣羽織風に合わせている。

コードを押さえる左手の手首に巻かれるのは、某クロム・ハツ風に言うなら、”ガンスリンガー with CHライジクロス・レザーブレス”。

つまり、革のベルトに派手なデザインのシルバー・クロスが組み合わせられたブレスレットだ。

そして、ピックを握る右手の薬指には、全面にキュービック・ジルコニアが散りばめられ、目の部分にはオニキスがはめこまれたスカル・モチーフのいかついシルバー・リングが輝いている。

また、小ぶりと表現するにはやや膨らみ過ぎてるような気のする胸元を揺れながら飾るのは、リボルバー・タイプの拳銃と薔薇のチャームと、そしてそれより大きなガーネットを埋め込んだギター・ピックを象った銀のペンダント・ヘッド。

この3つを一本のボールチェーンに通し、トリンケッツ風につけるのが、彼女の定番スタイルのようだ。

ここまででも十分過ぎるくらいロックな自己主張してるが、首からは更に輪をかけて激しい。

なにせ、オークリー社の”Monster Dog”という名前か

らして激しそうなハードそうなデザインのスポーツ・サングラスで
目元を覆い、頭に被るのは、巻かれた煤けた銀のコンチョと黒いリ
ボンがアクセントになってるEdo社の真っ赤な”シルクハット”
ときてる。

極めつけは、口のくわえ”電子タバコ”！

そうそう、電子タバコというのは、簡単に言えば煙の代わりに水蒸
気が出たり、吸うと先端に仕込まれたLEDがまるで火が灯ったよ
うに光ったりする”無駄にハイテクな禁煙パイポ（笑）”みたいな
物で、（道義的・道德的な見解はさておき）別に未成年が吸ってはい
けないっていう代物ではないし、吸ってもニコチン中毒になったり、
歯がヤニで真っ黒になることはない。

ついでに言うなら、彼女の愛用はチョコレート・フレーバー（！？）
のフィルターで、気分によっては交換式の内蔵フィルターをバニラ
やミントに換える場合もあるらしい。

ちなみに、これらのフレーバーの交換用フィルターは、ガチに実在
する…

さて、ここまでキメキメの格好で腕がダメダメなら、それこそ笑い
話にもならないが、どうやらその心配はないようだ。

” キュキュキュイーン ギョムキュキイーン ”

タッピングに1音、1音半、2音、クォーターとバリエーション豊
かな音程のチョーキングを、慣れた指捌きで織り混ぜながら弾く少
女。

しかもそのチョーキングも細かく見てけば、タッピングの派生スキルで半音を出す”ピッキング・ハーモニクス”や”タッチ・ハーモニクス”を混ぜたり、スライドを利用したビブラートを混ぜて”チョーキング・ビブラート”にしてみたりと実に多彩だ。

何しろ初めて聞いた時に”みよくん”と表現したチョーキングは、彼女の大的お気に入りプレイ・スキルの一つだ。

【一つの事に夢中になると、寝食を忘れる位にのめり込み、凄い所までいく】という驚異的な集中力を、生まれながらの属性として持つ彼女のこと、お気に入りの奏法を突き詰めない訳がない！

”相棒”と出会ってから二年と少し…

それまでにないほどの長く深い集中を見せた彼女は、今こうしてライヴ・ステージで赴くままのギター・プレイを魅せ、オーディエンス達を大いに沸かせていた。

だからこそ、きつとこう呼ばれるのだろう。

『スツゲー！ さつすがYuiさん！ あんたこそ、真の”ガルギモ”だあっ！！』

『がるぎも？ あん肝みたいなもんか？』

『バツキャロツ！ ”The Girl of Guitar Monster”！ 略して”ガルギモ”だっ！』

『キサマ！ Satsugaiするぞっ！』

『誰だ今のはっ！？ Y u iさんはメタルじゃねえっ！ ロックだっ！！』』

メタルとロックの境界線は人各々というツツコミはさておき、年齢…というか、ギター歴から逆算すれば破天荒としか言い様のないヘヴィ・リフを響かせた彼女… Y u iは、相棒のギターを再びローダウンに構える。

それにしても、Y u iの相棒も、持ち主と同じくらい”タダ者じゃない雰囲気”を醸し出していた。

基本は、G i b s o n の” L e s P a u l ” レスポール なのだろうが…

まず、レスポールの中で唯一の白色のパーツで、デザインのアクセントにもなるピック・ガードが丸々無い、というか最初から付けられてない。

そのせいで、見事な虎縞杢目がフィギアード・メイプル製のギターの表面全体に浮き出るのがよくわかる。

しかも、そのボディ自体もかなり特色のあるカラーで、明るいオレンジと茶色の中間色、日本語で言えばいわゆる”飴色”…”バタースコッチ・フィニッシュ”ときてる。

そして、そのバタースコッチ色のボディに組み合わせられるのは、レスポールのオリジナルならメタル・カバーに覆われてる筈の、剥き出しのハムバッキング・ピックアップだ。

オマケに色は白黒のシングル・ピックアップを張り合わせたようなゼブラカラーで、むしろこんな部分まで自己主張かと感心しそうだ。

細かく見てけば、例えばレスポールの特徴の一つである4連ダイアルにメタル・キャップが被せてあったりと色々他にも違いは有りそうだが、見るからにノーマルのレスポールじゃないのは明らかだろう。

このギター：Gibson社の特殊工房”CUSTOM SHOP”の職人集団によって組み上げられた特別なレスポールは、

【Inspired By Slash”Appetite For Destruction”Les Paul VOS】

通称【AFDレスポール】と呼ばれるモデルだった。

しかし、ヘッドに埋め込まれたペグとブリッジ、テイルピース辺りがスポットライトを浴びてニッケル色に鈍く輝き、ノーマルのAFDレスポールと比べても、過剰なまでに迫力を増してるようなのは気のせいかな？

「Yui! 一発かましてやりなよっ!」

ヘヴィ・リフのソロを弾き終え、オーディエンスの耳と目を釘付けにした少女にヴォーカルがそう声をかければ、Yuiはくわえ電子タバコを口からはなし、手に握る。

実際には熱くもない電子タバコを握り、手の平の中でスイッチを切っただけなのだが、観客には火のついたタバコをそのまま掌で握り潰したように見える、これまたロック魂溢れる演出に見える。

Y u iはポケットの中に電子タバコを戻すと同時に、新しいピック
…タンクトップと同じ”シルクハットをかぶったクロスボーン・ス
カル”が描かれた、とっておきの黒いピックを取り出した。
それを右手の人差し指と中指に挟んで、まるで天でも突くように高
々と掲げ…

「つえるかむ・とう・ぎ・じゃんぐうる!!」

と、どこことなく甘さを感じる声でシャウト!

そして、数種類のエフェクターとアンプの共同作業で生み出した特
製の”重音”を一気に奏でる!

「Welcome to the Jungle We got
fun·n· games!!」

目が覚めるような激しいリフから、

”ジャングルへよく来たな! さあ楽しいゲームの始まりだぜっ!
!”

と歌い出されるのは、かの伝説のスーパー・ロックバンド、”ガン
ズ”こと”GUNS N' ROSES”ガンズ・アンド・ローゼスの代表的なハード・ナン
バー【Welcome to the Jungle】だ!

甘さが有りながらも、それでも十分にパンチのある声で、Y u iは
ハードなロックナンバーを歌い上げる!

ジャングルへようこそ
お前さんが膝を折り
血溜まりに沈む姿を
俺は見たいのさ

どうやら宴は、まだ終わりそうもないようだ。

この物語は…

爪先から頭の天辺までロック・スピリッツを宿らせた少女と…

彼女の愛したギターが、まるで生き急ぐように駆け抜けたハードで
スラッシュでロックな半生を綴る…

ヒューマン・ドキュメンタリーであるっ！！

第01話 "がるぎもっ!" (後書き)

皆様、お読みくださりありがとうございますm()m

まずは一言…

ど・う・し・て・こ・う・なっ・た？

おかしいな…

ほのぼのとしたオープニングな筈なのに、何故かいきなりハードロツクな描写(笑)だよ。

しかも、”誰？”な展開だし…

いえ、謎の”がるぎもっ!”こと”Y u i”が何者(笑)なのかは、次回明らかになると思います(^^) ;

それでは、またお会いしましょう()

第02話 "えのつつっ!" (前書き)

皆様、おはようございますm(____)m

期せず早朝アップになってしまった暮灘です(^^);

ブランクの長さ故にわかっていた事ですが、一本書き上げるのに前の3倍以上の時間がかかるってのは、正直凹みますね(泣)

さて、今回は謎のギター少女(笑)である”Yui”の正体と、更に謎なサブタイトルの秘密が判明する回となります。

全体のテイストは…

シリアスCHOPPiLi

ツッコミ所TAPPLi

でお送りしたいと思います(;^_^A

あっ、そうそう!

あとがきに、今回出てくるライブ・シーンの参考動画のデータ等を入れておきますので、興味のある方はご参照ください(____)

では、音楽と悪ふざけに満ちたストーリーの再開です
イカれたダンスで答えをさがすだけさ

第02話 “えのつずつ!"”

わたしには、何も無かったんだよ

例えば、そう…憂や和ちゃんとの思い出はいっぱいあるけど

わたし一人の思い出らしい思い出なんて、なんにもないの

いつも、あやふやで曖昧…

もし、憂や和ちゃんが覚えていなければ

本当にわたしがそこにいたのか、自分でも分からない…

そんな、“からっぽ”の女の子…

それが、“わたし”だったんだよ

” Y u i ” s i d e

みんな、多分初めましてだよな？

えっと…初めましてm()m
わたし”平沢唯”っていいいます

(なんか”ゆいさん”とか”ゆいねえ”って呼ばれてるみたいだけ
ど)

実は、半年後に高校受験を控えた中三だよ

(の筈なんだけど…)

「うるかむ・とう・ざ・じゃんぐうる!」

何故か、お気に入りのウサちゃん抱いて… : じゃなかったシルク
ハットをかぶって、おやすみどころか”ギータ”とライブハウスで
演奏したりしてまゝ

あつ、”ギータ”っていうのは、わたしが弾いてるバタースコッチ
色のギターのことだよ

あれ?

なんか、アツチコッチで誰かがズッコけた気がするの、気のせい
かなあ…?

まあ、いいや。

え〜と、とりあえずどうしてわたしがステージに立ってるか話した
方がいいのかな?

あつ、うん。わかった。

”へーこーせかい”っていう意味はわからないけど、みんなは”わたしじゃないわたし”を知ってるんだあ〜。

へえ〜、スゴいね

何がスゴいか分からないけど。

あのね、話せば長くなるんだけど…

簡単に言っちゃえばクラスメイトで友達の”マキちゃん”…”岡崎^{おかざき}真輝^{まき}”ちゃんに誘われたからなんだ。

そうそう、マキちゃんは今、ステージでドラムを叩いてる女の子だよあ〜

本当は中学生が出歩いちゃいけない時間だけど、マキちゃんは年齢がバレないような格好…フードを目深にかぶってゴーグルかけたりして、去年ぐらいから歳上のお姉さん達のバンドでドラムを叩いてるんだ。

わたしはわたしで、今から2年ちよつと前…1年生の始めにぐらいにギー太と運命の出会い（はあと〜）を果たして、ギターを弾くようになったんだよ

それをどっからか聞き付けたマキちゃんがやってきて、去年からたま〜にステージに誘ってくれるってわけなんだ

まあ、いつもは飛び入りの助っ人っぽいポジション…”セカンド・ギター”でバッキング担当って言うんだっけ？なんだけど、今回は

ちよつと大変かな？

(中西さんが夏風邪こじらせるなんて、あんらっきー すたーだよ
ね)

中西さんは、バンドのギターさん。

マキちゃんのバンドって本職のギタリストは、中西さん一人しかいないから(だから、いっぱいギターの音が必要な時にわたしが呼ばれたりするみたいんだけど)、こういう時は一大事なんだよ。

幸い、わたしはマキちゃんのバンドのレパトリーは全部覚えてるから、こうしてリードギターでも演奏できるって訳なのだよ

でも…

(榎本さん優しいなあ)

マキちゃんのバンドは、基本的にオリジナル中心なんだけど、出演する代わりに1曲好きな歌を演奏させて欲しいって言ったら、リーダーでヴォーカルの榎本さん、二つ返事でおっけーしてくれたんだあ)

あつ、榎本さんも一応ギターを弾けるけど、本人曰く『歌いながらだと、コード押さえるのが精一杯。無いよりはマシ程度のリズムキープが精々』なんだって。

そんなわけで、わたしの大好きな”ガンズ”を思いつ切り弾けるのだよ)

えと…

ところでみんなは、”ガンズ”…”ガンロゼ”って略されることもあるけど、【ガンズ・アンド・ローゼズ（GUNS N' ROS ES）】ってロック・バンドを知ってる…かな？

あっ、ううん！

知らなくても気にしないでいいよ！

だってアメリカのバンドだし、活躍していたのも1980年代…わたしが生まれるずっと前だし、みんなが知らなくても当然だと思うもん。

それに大事なのは、”ガンズ・アンド・ローゼズ”が、今でもわたしが大好きなバンドだって事とね…

（ガンズのリード・ギターが、）

ギターの”オリジナル”…ピック・ガードを外した飴色のギター”AFD Les Paul”と、黒いシルクハットがトレード・マークのスゴ腕レスポール使い、”Slash”ってことなんだ

もうわかつちやっと思ったと思うけど、わたしがステージに立つ時に必ずかぶってるシルクハットは、この人が元ネタだよ

ついでに言うと、サングラスとくわえタバコも、”Slash”のトレードマークなのだよ。

（まあ、わたしの場合は別の理由もあるんだけど…）

サングラスは、マキちゃんのゴーグルやフードと同じで顔から年齢がバレない（わたし、童顔らしいんだよ…）ように、電子タバコは…

『唯は、喋ると途端に天然がバレるからね』

『そうですね』

榎本さんもマキちゃんも、何気に酷いよ。

それはともかくとしても、” S l a s h ” っぽくできるのは、実はかなり嬉しかったりして

（だって” S l a s h ” は…）

わたしがギターと一緒に、いつか追い付きたいと思う、

（【目標】だから…）

もし、わたしが” S l a s h の音 ” を聴いてなければ、もしかしたらわたしはギターと一緒に音に迷って…迷って疲れて諦めて、

（また、” からっぽ ” なわたしに戻っちゃったかもしれないから…）

「仔猫ちゃん&ヤロー共！ いよいよ、ラスト・ナンバーだぜっ！
！」

『『『えええ〜〜っ！！』』』

Yui…いや、唯の年齢に見合わない激しいアップ・ナンバーの口ツクで盛り上がった客席に投げ込まれたのは、夢の時間の終わりを告げるヴォーカル、榎本の一言だった。

「そう言うなって！ そのかわりにお待ちかねのとおきのナンバーさ…」

榎本は一度大きく息を吸うと…

「God Knows…！！ じっくりせえーっ！！」

『『『ウオオオオーっ！！』』』

「1, 2, 3, 4!!!」

一際大きな歓声の中、マキのステイックが高らかに打ち鳴らされ、唯のタッピングとビブラートを巧みに組み合わせた速弾きが口火を切る！

それは、榎本達が高校時代にやってた同曲と明らかに違う、激しい高速リフから始まる

”God Knows Metal ver”
とも呼ぶべきアレンジ・バージョンだった！

ハムバッキングとメイプル&マホガニーの甘い倍音を残しつつも、パワフルに狂おしいまでにハードに掻き鳴らされる唯の速弾きに、マキのドラムに財前のベース、そして…

「Yahhaaaaaa!!!」

シャウトから始まる榎本のヴォーカルが重なり、ライブハウスのポルテージが一気に跳ね上がるっ!!

唯 side .

ふえ？

榎本さん、どうしてさっきからわたしをチラ見してるの？

えっ？

まさか、ソロパートをもっと…限界まで激しくってこと？

”こくん”

(うなずかれたぁーっ!?)

んにゃ…

そりゃ、何度も弾いた曲だしできるけど…

(ど、どうなっても知らないんだからぁ~~~~っ!!)

あつ、もう間奏のソロパート!?

もう迷ってる時間なんてないっ!

(もう、やるっきゃないよ!)

わたしは、慌ててギターをハイポジションに構える。

ライブハウスよ…

(わたしとギターの音を聴けえ〜〜っ!)

ソロパートが始まった瞬間、唯の手首から先の動きが明確に変わった!

今までは、弾いた弦をミュートさせない”オルタネイティブ・ピッキング”を使い、一弦ごとに弾いて音を出す”アルペジオ(単弦)奏法”で、速弾きもアウトサイドからのストリング・スキッピングというテクニクを多用して弾いていた。

だが、唯のスピード・リミットはそこじゃない!

”キュキュキュギユムキュキュキュギユキュキュキュチュギユーン!!”

『出たあーっ！ Yui 姐さんのギター殺し！』 超音速弾き（
スパー・ソニック・ストローク） うーっ！』

『 “ギターモンスター” の完全覚醒じゃあーっ！』

唯の超音速弾き…

それは、弾いた弦音を次の音を出す前に切るようにミュートさせる
”エコノミー・ピッキング”を基本に、いくつもの弦をピックで同
時に鳴らす”ストローク（多弦）奏法”を組み合わされた奏法…

20世紀末期にイングウェイ・マルムスティーンを始めとする数々
のネオ・クラシカル・メタルの奏者によって編み出され、ピックを
弦の間を掃くように動かす速弾きに特化した奏法…

最近では、スピードを求めなくなった音楽シーンの需要や、リズム・
キープの難しさから使い手がめつきり減ってしまった”スウィープ
奏法”だった！！

唯のスウィープ・ビートは、ただ速いだけじゃない。

例えば、弦を叩いて音を上げるハンマリング・オンに、弦を引つ搔
いて音を下げるプリング・オフ、これを繰り返すと”トリル”とな
る。

実はこのトリルを両手で同時に行うのが、原作でもお馴染みのギタ
ー・スキル”タッピング”の正体だ。

そのトリルと唯の十八番のバリエーション豊かなチョーキングと、

スライド・ビブラートを複雑に組み合わせ、圧倒的な情報量を持つ
”ギターサウンドの奔流”となり、一気にオーディエンスを飲み込
んだ!!

未来の果て

弱さゆえに

魂壊されぬように

My Way

重なるよ今

二人にG o d b l e s s

(ぶつとんじゃええ〜っ!!)

そして、サウンドはクライマックスへ!!

”ゾクゾク…!”

ライブハウスの一番後ろで”その少女”は、隠そうともせず身を振るわせた。

少女…

多分、背丈や体格から見る限り少女だろう。

ただし、唯のようにサングラスで顔を隠している為、判然としないが。

いや、それ以前に異常にライブハウスから、その少女は浮いていた。

何しろ、高原で避暑を過ごすお嬢様が切るようなワンピースに身を包み、左右を固めるのはこれまた場違いなかつい黒服+サングラスの男達ときてる。

彼女の正体は、いずれわかるとして…

その浮いてる少女の背中を駆け抜けた感覚は、寒気を感じる程の紛れもない歓喜…

そして、少女は上気し恍惚とした表情で、誰に聞かせる訳でもなくステージでスポットライトを浴びる唯を見ながらこう呟いた。

「やっぱり唯ちゃんには、”音楽”っていう名前の翼があるのね…どこまでも自由に飛ぶ為に」

第02話 "えのつずつ!" (後書き)

皆様、ご愛読ありがとうございましたm(____)m

実は、唯が高校入学前のエピソードだったというオチでした

しかも、マキが所属していたのは、高校を卒業したと思われる平行世界の”ENNOZ”というオチ(笑)
読めてた方はいらしたでしょうか？

実は、唯がギー太と出会ったのは原作より3年以上早く、また作中に出てきた”記憶の欠片”のような娘だったせいか、原作TVシリーズ最終話以上の腕前をもっていそうです(^^);

いや、彼女の腕前はギターをかじった事のある読者の皆様には、文章から想像してくだされば嬉しいなあ〜と(^^)(;)

とはいえ、多分イメージし辛いと思うので、劇中の”God Knows…”の参考にした動画を紹介したいと思います。

動画名:

”くるすばいん - God Knows…”(Haruhisong) - Heavy Metal Band Version”

落ちてる場所:

You Tube

検索方法：

” You Tube ”で【くろすばいん】、【God Knows
…】の2ワードを入れて検索すると簡単に出てきます

ヴォーカルの方以外は全員男性なので、あくまで音的な参照って事
で(^^)；

間違ってもビジュアル参照にはしないで下さいね(笑)

ちなみに、ギターはリードとリズムの二人ですが、作中では二人の
パートの70%くらいを唯が弾いてるイメージです。

謎の少女その2(笑)の正体は次回へと持ち越しとしつつ、また次
回会える事を祈りながら、今回はこの辺でm(――)m

第03話 "えふえくた!" (前書き)

皆様、こんにちは

すっかり小説の書き方を忘れてて、執筆ペースが上がらない暮灘です (^ ^ ; ;

さて、今回は”サブタイに偽り無し”の内容です (笑)

要するに、唯の足元の装備品が明らかになる話なんです、誰得か
と言えば…作者と、今まさにエフェクター選びに迷ってる人得？
^ | ^ ; ;)

唯とマキしか出てこないうえに、”唯のエモノ”がメインの話ですが、どうぞお楽しみください (| |)

第03話 "えふえくた!";

さてさて、ライブも終わり兵どもつわものの夢の後始末…

要するに今宵のライブに参加していたバンドが、撤収作業にかかっていた。

かくゆう我らが”ガルギモ”もしくは”Yui the Slassh”こと平沢唯も例外ではない。

サングラス外していきわえ電子タバコもないのだが、何故かシルクハットはまだ頭に鎮座している。

よほど気に入ってるのだろうか？

いや…相手が唯だけに、ぶってる事を単に忘れてる可能性も否定できないが(笑)

そんなステージの上とはまるで別人の暢気な雰囲気…平常運転モードの唯は、さつきまで主の思うままに様々な音色を構築していたエフェクター・ボードの前に座り、

「ままゝ　　ままゝず・かみんぐふおゝおゝおゝむ　　」

などと適当な鼻歌を歌いながら、パッチ・ケーブル(エフェクター同士を繋ぐ短いケーブル)を外しつつ、帰り支度を始めていた。

ライブ会場を沸かせるだけの多彩で迫力のある数々の音色は、ギターをアンプに繋ぐ（直付け）だけじゃ出るものじゃない。

楽器や機材の中で、一番スポットライトを浴びるギターが主役だとするのなら、足元のエフェクター・ボードに整然と並び、ギターとアンプの間で音色に様々なエフェクトを加えるコンパクト・エフェクターは、ポジシヨンの意味まで含め文字通りの”縁の下の力持ち”だ。

ギターを始めたばかりの初心者でもなければ、ギタリストがもつとも”音の個性”を出す為に気を使う場所で、同時にトップ・プロになるのが最後の最後まで悩む場所でもある。

それはさておき…

何故に鼻歌が”オジー・オズボーン”？（汗）

いくらなんでも、女子中学生にしては渋すぎだった。

いや、それともキース・ムーンに憧れる女子中学生やビリー・シーンを神と言いつける女子中学生がいる世界だけに、彼女はまだマシな方なのだろうか…？

とまあ、そんな調子でてれてれと後片付けしていると、

「やつほ」

「あつ、マキちゃん」

自分の撤収準備は終わったのか、ひよこりと顔を出したのは岡崎真輝だ。

「ゆいヘルプ、Thank You」

「いえいえ こつちこそおかげで”9ベえ”の新しいセツティン
グのステージ・テストもできたし、感謝感謝だよ」

「きゅ…”キューベエ”？ なにその人を詐欺的手法で魔法少女つ
て名前のゾンビに仕立てた挙げ句、実は裏でマッチポンプ組みまく
つてた、諸悪の根源の外道宇宙マスコットみたいな名前は…？」

「ほえ？」

マキの何やら妙に具体的なツツコミに、唯は不思議そうな顔をして
から、足元のエフェクター・ボードの中から唯一液晶画面のついた
一際大きなエフェクターを両手で大事そうに持ち上げ、

「この子のことだよ。LINE6の”M9” LINE6は
アメリカ（米国）の会社で、そこで生まれた9ちゃんだから…」

マキは妙に納得したような顔で、

「ああ、それで”9米”って訳ね？」

「うん」

笑顔の唯だったが、マキはやけに神妙な顔で、

「…その名前はやめた方がいいんじゃないん？　なんか縁起悪そうだし」

「え〜っ！　どうしてどうして？　だって可愛いよ〜」

「肝心な時とか致命的な時に限って裏切りそうな気がするのよね〜」

「むう…そんなことないもんねえ〜だ！」

「それにしても、相変わらず中坊らしからぬエフェボー（エフェクター・ボードの略）の品揃えよね〜」

エフェクター・ボードを覗き込みながら、マキが感心と呆れが半々に混じったような調子でそう言えば、

「えっ？　そうかな？　わたしとしては、結構手抜きというか、持ち運ぶ事を考えた末の妥協の産物と申しましようか…空間系のエフェクトは9べえに丸投げしてるし」

では、せっかくなのでここで少し唯とギター太の音作りマスト・アイテム、”エフェクター群”に軽く触れておこう。

あっ！　ギターとかベースとかをかじった事ないと全くチンプンカ

ンブンになりかねないので、興味無ければ読み飛ばしちゃってくだ
さいな。

まず、ギターから伸びるシールド（楽器用ケーブル）を伝った音（
電気信号）は、まずは信号を増強する”クリーン・ブースター”に
入り、次に踏めばギター・サウンドにみゃうみゃうエフェクト（笑）
をかける”ワウペダル”、音を整える”コンプレッサー”へと続く。
ここまででは、完全にエフェクターは直列の数珠繋ぎだ。

その後、コンプレッサーから出たケーブルは、”スイッチャー（分
配機）”へと繋がられる。

スイッチャーとは、簡単に言えばエフェクターをループ（回線）で
繋いで、ループごとにON/OFFできる装置だ。
言い方を変えれば、エフェクターを直列じゃなくて、使うエフェク
ターを選択できる並列に繋ぐ装置と考えてもいい。

なんでこんな面倒なことをするかと言えば、電気信号は一般に電線
の中を流れた距離に比例して減衰して劣化するからだ。
平たく言えば、ノイズが乗ってしまうのだ。

そしてエフェクターの中身は、電気回路や電子回路…つまり電線の
塊だ。

繋ぐエフェクターの種類や順序、个体差や相性なんかもあるけど、
直列に数珠繋ぎにした場合、3つとか4つぐらいまでなら一般にあ
まり目立つノイズは発生しない場合が多いけど、それ以上になると
…場合によってはギターの音なんだか、ただの電気ノイズ音なんだ
かわからなくなる（作者の経験談）

まあ、それを回避する為に最近のエフェクターには使わない時（エフェクターの電源OFF時）には、回路にギターからの電気信号を流さないで最低限の経路でエフェクター内部をバイパスさせる”トウル・バイパス”という作り方をしているエフェクターも多い。けど、ならば使わないエフェクターには、そもそも最初から電気信号を流さなければ、より流れる距離を短くできる訳で。

つまり、スイッチャーのON/OFFは、ギターからの電気信号をエフェクターの繋いだループへ流れる／流れないを選択するスイッチなのだ。

4ループが接続できる唯のスイッチャーに繋がられるのは、最初のループ1が音を図太くあるいは野太くする”オーバードライブ”、ループ2が音を歪ませたり歪ませたりしてメリハリを付ける”ディストーション”、ループ3にDSより更に歪曲率が高くてワイルドな音に変える”ファズ”、最後のループ4に繋がってるのがそれ以前のアナログ・エフェクターと違いデジタル式で、その強みと利点を生かして1台で3つのエフェクトを同時にかけられる”マルチ・エフェクター”の【9べえ】こと正式名称【M9 Stompbox Modeler】だ。

このギターからの直接のラインと、ループとして4つのエフェクターが接続されたスイッチャーをアンプへ繋げるというのが、”今のところ”の唯のシステムらしい。

毒を喰らわば皿までってノリで、一応機材の具体名（）内は色）を書いておけば…

クリーンブースター

MXR社製”M-133 Micro Amp”(白)

ワウペダル

Jim Dunlop社製”Cry Baby SW-95”(赤)

コンプレッサー

Digitech社製”Main Squeeze”(茶)

スイッチャー

Noah's ark社製”TBSW”(黒)

オーバードライブ

Hi Watt社製”Custom Tube Overdrive”(黒)

ディストーション

Proco社製”SOLO”(オレンジ)

ファズ

Erectro-Harmonix社製”Metal Muff”(黒)

マルチ・エフェクター

LINE6社製”M9 Stompbox Modeler”(黒)

ついでに言えばエフェクターの電源は、Custom Audio

Japan(CAJ)社製の”AC/DC STATION V
er2”というパワーサプライ(直流/交流変換機&電源

供給装置)で行なっている。

実は、エフェクターに混じるノイズというのは、電源部からも侵入してくるので、パワーサプライ等を使って電気を整流してやるとかなりノイズが低減する…場合もある。

一見すると大雑把に見える唯だが、こと音楽…いや、ギターに関わる事なら、かなり気を使うのは確かなようだ。

ワウペダルが微妙にギターと同じく”Slash”のシグネイチャー・モデルなのは置いとくにしても、カラフル…というか黒を除けば、妙に食べ物を連想させる色のエフェクターが多いような気がするのは、偶然か？

クリーンブラスターは白というよりクリーム色だし、コンプレッサーは茶色というよりチョコレート色って表現したくなる色してるし
(笑)

あつ、そうそう話題にちらりと出てきたシールドは、今年の頭までパワーサプライと同じCAJ社のシールドを唯は使っていたようだが、今はオヤイデという会社の”Force 77G”という名のシールドを愛用してるようだ。

2種類のシールドを見る限り、どうやら唯はノイズが乗らない事は当然にしても、”キャラのあるシールド”より”ギターの音を色付けしないシールド”を、今のところ好む傾向があるらしい。

まあ、見た目は同じありきたりな黒のシールドだから見分けはつかないけどね。

とりあえず、ギター関連の機材に詳しくない人なら意味不明の単語の羅列だが、詳しい人がみると…

「これだけ揃えて妥協だとお…おのれブルジョワめ〜！」

ごもつとも。

ぶつちやけてしまえば、原作第1期TVシリーズ番外編(2)で、どこぞのちっこい黒仔猫(笑)が、「すごい…エフェクターいっぱい…」と驚いてたエフェクター群より、下手しなくても充実してそっけな装備だ。

「んにゃ？ 一つ一つは、そんなに高くないよ？ 多分、この子達全部合わせてもマキちゃんのドラム・セットより安いんじゃないかなあ〜」

実は、これも正解だったりして(笑)

「うそつけえ〜っ!」

「まひひゃん、ほつめにゃひつひやららいれえ〜!(意識:『マキちゃん、ほつぺた引つ張らないでえ〜!』)」

念のため言っておくと、別に眉が漬物の一種を連想させるお嬢様が一枚噛んで(笑)る訳ではありません。

楽器、特にエフェクターは日本にある正規代理店を通した商品だけでなく、シヨップごとの直輸入品つてのが多数存在している。

そういう代物は、今みたいな円高の場合はダイレクトに販売価格的に影響を受け、ショップもここぞとばかり目玉商品として『無茶しやがって…』的な…それこそそこいらのネットオークションなんぞより遥かに安い値段で投げ売りしたりするのだ。

勿論、期間限定や個数限定がお約束なんだけど、そこはそれ！

パソコンを得意スキルに数え、こういう検索や情報収集にはとことん頼りになるガネっ娘の幼馴染みとポニテの妹がバツクについてる以上、唯に抜かりや死角はない

そりゃあ、定価（あるいは標準小売価格）で買うなら、唯のエフェクターを全部合わせれば、お嬢が権力介入（？）する前のTV版ギ―太の値段を楽勝で凌駕するが、実際の唯の買値は間違いなく半額以下だ。

特に凄いのをあげると…

ワウペダル”SW-95”

¥35,700 ¥13,300

ディストーション”SOLO”

¥29,400 ¥8,800

ファズ”Metal Muff”

¥26,040 ¥7,980

まあ、ここまで極端なの例はこの3つぐらいだが、9べえとスイツチャー、パワーサプライを除けば出てきたエフェクターとかは全て半値以下で唯は購入していた。

蛇足ながらパワーサプライは1年生の時の誕生日に、スイツチャーは去年の誕生日に、妹の薦めで両親にねだった物だったりする。

：

：

：

書いておいてなんだが、誕生日プレゼントにパワーサプライとスイツチャーをねだる女子中学生って一体：（汗）

「ねえ…唯」

つねってた頬を離れたマキは、やおら真剣な顔をする。

「あに？」

一方の唯は、解放されたばかりのほつぺたを揉みほぐしながら、いつもと同じ緊張感が欠乏した表情だった。

「アンタ、やっぱり高校なんかに行くのやめなよ…！ 唯にとつちゃあ退屈なだけだよ、きつと！」

「ほえ？」

「アンタは間違いないく、”コツチ側”の人間じゃない！ 音楽無しじゃ生きてけない筈の…！」

つい感情を昂らせるマキ…

しかし、唯はただ静かに微笑んで、首を小さく左右に振り、

「約束”したから。一種の高校に行こうって…ね？」

第03話 "えふえくた!"; (後書き)

皆様、ご愛読をありがとうございますm(____)m

実は、しっかりエフェクター・システムを作ってた唯の巻でした(笑)

ちなみに、出てきたエフェクターは大体作者がいじった事のある代物で、You Tubeとかで【会社名+半角スペース+固有名】で検索かけると動画で音を確認できますよ

もし、興味を持たれたら試してみてくださいね(o^-^b)

実は、最初は唯はコンパクト・エフェクターだけで、アナログ・オプリーのエフェクター・システムを組む予定でしたが、機材がGo! Go! MANIACになりすぎてしまったのと、どうしてもQBネタ(笑)をやりたいかったのでアナログ&デジタルのハイブリッド・システムとなりました(^|^;)

なんか、最後がちびっつとシリアスな空気が出ましたが、次回は”唯の約束”が明らかになる…かな?

それでは、また次回お会いできる事を祈りつつ(____)

第04話 "ひみつきち!" (前書き)

本州のほぼ全体が台風のダメージの受けそうな今日この頃、皆さん
ご無事でしょうか? (汗)

台風が目の前にキテるので気が気じゃない暮灘です (^ ^ ;

昔よりペースダウンしてるとはいえ、何とかコンスタントに投稿で
きているので一安心しておりますが、果たして内容は?と言われたら、
ちとキツイかも (苦笑)

さて、今回は…

サブタイを英語に訳してみると、おぼろ気ながら全体のアウトライ
ンを表しています (^ | ^ ;)

今回は前半と後半では、ヒロインが違うような…?

シリアスなようなそうでもないような、そんな感じの話です (^ ^ ;

ただし、味付けは少し甘めのチョコレート風味 (特に後半)

第04話 "ひみつきち!"

10年後の8月に、また出会える事を信じて…

えっ？

私と唯ちゃんの出会いを話して欲しい…ですか？

ウフフ

改めて話せと言われると、ちょっと照れ臭いですね？

でも、長い割にはそれほど面白味のある話じゃないですよ？

うん？

そうですか…そういう事なら、わかりました

ええとですね、唯ちゃんとの出会いは、そう…幼稚園の頃まで遡るんですよ？

あの頃の唯ちゃんって、とっても可愛くて…ああ、勿論今だって可愛いですけど

そして、何にも囚われなくて自由奔放で…

ほら、今と同じでしょ？

その頃の私はまだ日本に来たばかりで、自分で言つと嫌味ですけど富豪の娘で、それに容姿も普通の日本人と少し違つてて…

イジメられてた訳じゃないですけど、私は何となく周囲と上手く打ち解けられなかつたんです。

そんな私に、唯ちゃんは気まぐれなのかいつの間にか隣に来てくれて、こつ声をかけてくれたんですよ

『かみ、きんいろでおひめさまみたいできれ〜　　ねえ、いつしよにあそぼ？』

きつと、それが最初のきつかけ…

その時から私は、唯ちゃんにひどく惹かれてつたんです。
強く強く…ね？

【とある沢庵お嬢の回顧録】より抜粋

「アンタ、やっぱり高校なんかに行くのやめなよ…！ 唯にとつちやあ退屈なだけだよ、きつと！」

「ほえ？」

「唯は間違いなく、”コツチ側”の人間じゃない！ 音楽無しじゃ生きてけない筈の…！」

そんな…ある意味、真実をついたマキの言葉に、唯はただ首を小さく左右に振り、

「”約束”したから。一種の高校に行こうって…ね？」

「約束…？ 和と？ それとも、律や漣？ 確かに和は上手いよ。財前さんだつて、あんなに速くは弾けないさ。でも、律や漣はまだベースやドラムを始めたばかりじゃない！ まだ、唯と同じ場所には…」

「違うよ…もつともつと、ずっと”古い約束”だよ」

そして、どこか懐かしそうに柔らかく微笑むと、

「守れない約束は確かにあるよ？ でも、守れる約束を守らないのは、やっぱり良くないって思うんだ…」

その笑顔に、マキは何も言えなくなってしまふ。

それは、子供のように無垢な唯の笑顔に見惚れただけ…ではない。そこに、自分が入り込めない”深い何か”を感じてしまったから…

「来年の春さ…岡島さん、日本に帰ってくるんだ」

「岡島さん…って、誰だっけ？」

「あつ、そついや唯は知らないんだっけ？ ”ENNOZ”の前のドラム…というか、正規ドラムの人で、高校卒業して直ぐにアメリカに武者修行に行ってたんだ」

マキの口から語られたのは、簡単な”ENNOZ”の歴史だった。

例えば、ENNOZはリーダーの榎本が高校時代に同級生だった中西、岡島、財前らと結成したバンドだったということ。

”ENNOZ”の名の由来は、その四人の名字の頭文字を合わせた物で、唯が勘違いしてたように間違っても”ZONE”をひっくり返した訳じゃないということ…

「そうしたら、私はさ…自分のバンドを立ち上げたいって思ってるんだ」

「えっ!？」

確かな決意と覚悟を秘めたマキの瞳に、唯は思わず息を飲む。

「ENNOZは確かにいいバンドだけど…でも、だからこそ越えてみたいって思うんだ」

「マキちゃん…」

複雑な表情をする唯に、今度はマキが微笑み、

「あゝ、唯にそんな顔をさせたい訳じゃなくてさ…そりゃ、唯が入ってくれたらって思ったよ。でも、唯も訳有りみたいだし、無理には誘わないよ。その代わり…」

マキは微笑みの性質をニヤリツと表現したくなるそれに変わると、

「高校に飽きたら、何時でも”私のバンド”においで！ ギターは、別に何人いたって困りゃしないからさ！」

「マキちゃん…！」

思わずギュツと抱きつく唯の頭を、マキはまるで姉のような表情で撫でたのだった…

榎本達に例を述べた唯がライブハウスを出ようとすると…

『Y U i さ ま あゝ つ ！』

『Y U i さ あゝ ん ！』

『Y U i 姐 えー つ ！』

と、まだライブの興奮冷めやらぬオーディエンスに囲まれそうになっ
てしまう。

まあ、こういうシチュエーションに備え、正体（女子中学生）がバ
れないようにシルクハットとサングラスは装着してるのだが。

しかし、実際に囲まれて身動き取れなくなると困っちゃうなあ〜と
思っていると、まるで唯が出るタイミングを見計らったようにドイ
ツの超高級車メーカー”マイバッハ”社のカスタム・リムジンが、
ほとんどエンジン音を感じさせないままスウ〜ツと路地に入っ
て、

「お下がりを」

いつの間にか現れた、どう見ても場末のライブハウスの前には不似
合いな黒服＋サングラス達が、見事な手際で睨みを効かせ…もとい。
会場整理を行なっていた。

何処かで見覚えあると思えば、第2話”えのつずつ！”のラストで、
ワンピースの少女の左右に控えていた黒服達だった。

唯は少し安堵しながら、指示を飛ばす一際いかついリーダー格とお
ぼしき男性に、

「藤堂さん、いつもすみません」

唯がペコッと小さく頭を下げると、藤堂と呼ばれた男は、サングラ
スのレンズの向こう側で目元を緩め、思いの外に優しくな声で、

「これもお役目、お気になさらず。それよりお嬢様がお待ちです」

「荷物、持ちますよ」

と、エフエクターを満載したケースを、唯が引つ張っていたキャニスターごと軽々と持ち上げたのは、長身で細身の男だった。

「ト部さんも、いつもありがとうございます」

「いえいえ。この程度など造作もないですよ」

どんな鍛え方をしてるのか、10kgはありそうなキャニスターをひょいっとリムジンのトランクに運びこむト部である。

どうでもいいが、藤堂もト部も他の黒服も、どこか別の遠い世界では、5m足らずの人型機動兵器を操り日本の解放と再独立の為に戦ってたような気がするの、気のせいだろうか…？

そして、黒服の中の紅一点であるシャープな印象の女性が開いたりムジンのドアを潜り、ハードケース入りのギア太共々後部座席に乗り込むと…

「唯ちゃん、お疲れさま」

ライブハウスではかけていたサングラスを外し、美しく大きな…サファイアを思わせる碧眼を輝かせるワンピースの少女に、唯は満面の笑みで、

「えへへ〜　ありがと、”むぎちゃん”」

「ウフフ　いつも通りに凄い演奏だったわね」

と、実に嬉しそうナムギ…”「いんげん・こぼれ」琴吹紬”に、

「にはは…最後は、なんか榎本さんにノセられて大暴走しちゃったと、照れ笑いする唯だったが、

「それでこそ唯ちゃんよ　唯ちゃんは、それで…そのままがいいの」

紬の言葉に唯はきょとんとした表情で、

「ほえ？　うん…よくわからないけど、むぎちゃんがそう言うなら、きつとそうなんだろうね〜」

「そうそう　あつ、それよりあれだけ演奏したんだもん。唯ちゃん、お腹空いてるんじゃない？」

「うんっ…！」

大きく頷く唯。

紬はリムジンの後部座席に備え付けの冷蔵庫を開けると、いかにも高そうなケーキ皿を取り出し、

「ザッハ・トルテで良かったらだけど、食べる？」

すると唯は途端に瞳を輝かせ、

「うん 食べる食べる〜！」

「じゃあ、ちょっと待っててね」

と、唯は一口サイズにケーキを切り分け、その一つをフォークに刺すと、

「はい あ〜ん」

「あ〜ん」

何やら親鳥から餌を貰う雛鳥を連想させる仕草で、唯はケーキにパクついた。

そして、幸せという言葉をそのまま具象化したような表情で、

「おいひい〜」

そんな唯を見ている唯も、同じくらい幸せな顔をしていたと追記しておこう。

「唯ちゃん、もしかしてお眠？」

「ちょっとだけ…」

と、うつらうつらしながら小声で返す唯。

紬は、ぽんぽんと見るからに柔らかそうな自分の太ももを叩いた。

「むぎちゃん、いいの?」

「うん　私と唯ちゃんの仲でしょ?　遠慮なんてしないで。ね?」

「にへへ　じゃあ、むぎちゃんの膝枕Getだぜ」

と、体をそのまま横倒しにしてぼすんと紬の太ももに乗せる唯…

「ねえ、むぎちゃん…」

「なあに?」

「前から感じてた9べえの違和感…今日、全力全開で奏ってみて、やっと理由が分かったんだよ…」

「そっか…」

「”デイレイ”だった…9べえで他のエフェクトと一緒に使つと、わずかに音がもたつくんだよ。もしかしたら、処理が追いついてないのかも…」

「それを聞き分けるなんて、さすが唯ちゃんね」

唯の耳も感覚も、音には規格外に鋭敏だ。

ボケ〜としてても1音の半音の半音、そのまた更に半音…つまり1

ノ8音を聞き分け、集中している時なら16ビートで流れる曲の1ノ16音すらも簡単に判別できた。

オマケに、これまた常人離れた精度の”絶対音感”も標準装備だ。

唯は、譜面で曲を覚えない。

覚えるのはあくまでも耳と、そして目だ。

彼女は耳から聞いた音を理論ではなく感覚として理解し、そして知識でなくイメージで覚えた物は、決して忘れない。

唯は、未だに譜面を読めない。

なら、どうやって演奏できるようになったのか？

何のことはない。

何も”Slash”だけじゃあない。

古くはジミ・ヘンドリックスにジェフ・ベック、ジミー・ペイジやピート・タウンゼント。

ザック・ワイルドにポール・ギルバート、ジョー・サトリアーニにジョン・ペトルーシ、忘れちゃいけないスティーブ・ヴァイ。

加えるならエディ・ヴァン・ヘイレンにイングウェイ・マルムステイン、ランディ・ローズにフロイド・ローズ、カート・コバーンにゲイリー・ムーア…

挙げたら、それこそ有名どころだけでもきりないが、DVDやブルーレイなんかの映画記録媒体やインターネットに落ちてる動画に映る超絶テクと強烈な個性を誇るを彼ら”スーパー・ギタリスト”達の映像を、指捌きを見てギターを覚えたのだ。

唯の映像の見方は、ある種独特だ。

何しろ、いつも傍らにギー太が膝の上に乗っている。

そして、目は伝説のギター・ヒーロー達の姿を指捌きを追い、耳はその奏でられるギター・サウンドをほんの小さなノイズまで聞き分け、そしていつの間にか左手でコードを押さえ、右手でピックに握り、弦が弾かれ”彼らの音”をトレースするように音を…旋律を紡ぎ出す。

それが彼女の自慢の集中力が途切れるか、体力が尽きるか、あるいは愛すべき妹のマジック・スペル「お姉ちゃん、ごはんだよ」まで続く。

唯のギター・レッスンは、常に『こう弾いたら、こんな音が出るんだあ』と『こんな音を出したい時は、こんな風に弾くんだあ』の繰り返しだ。

「だから、デイレイのエフェクターを継ぎ足せば、何とかなると思うんだあ…憂のマネっこで、オーバードライブとディストーションを1ループに纏めて、ファズを前にずらして、空いたところに繋げれば…きつと…」

「唯ちゃん…もう、眠っちゃった方がいいわ…お家に着いたら起こしてあげるから。ね?」

「うん…そうする…きつと”本番”には間に…合わせるから…だって、むぎちゃん…と…の…」

多分、もう唯は意識は保ってない。

おそらくは、寝言にちかいものだろう。

でも、唯は確かにこう言ったのだった。

「約束だから……」

第04話 "ひみつきち!" (後書き)

皆様、ご愛読ありがとうございましたm(____)m

前半は唯とマキの友情物語で、後半は実は幼馴染みだった唯と紬の少し甘いお話でした。

特別ゲストは、”ぎあす”を知ってる方なら察しはつくかと(笑)

何か書いてる作者が言うのもなんだけど、ウチのムギは、色んな意味で唯が好きなんだなあ〜と(^ー^;))

さて、はたして唯と紬の”約束”とは何なのか？

大した仕掛けはありやしませんか、乞うご期待って事で(o^_^)

b

では、また次回お会いできる事を祈りつつ(____)

第05話 "しーゆー…" (前書き)

皆様、おはようございますm(____)m

変な時間に起き、眠れない時間を利用して小説書いてた暮灘です(苦笑)

さてさて、今回のエピソードは暮灘小説の中でも珍しい、”一人のキャラのモノローグと回想”のみで綴られる話となります。

語られる唯と紬の出会いと過去…

そして、二人の”約束”とは…?

それは、少し甘く切なくほろ苦い物語…

原作とは過去と人間関係がかなり異なる”すらっしゅ!”…その代表的なエピソード、お楽しみ戴けたら幸いです(____)

第05話 "じゅい…" ;

巡り会えた日々を忘れずにしよう

だから、今は青い空に両手を広げて、君を見送るよ

そつと涙を拭って、笑顔で

でも、いつかまた会えるよね？

懐かしい、その後ろ姿に…

紬 side .

唯ちゃんは、ずっと私の憧れだったんだよ？

初めて会った時から、ずっとずっと…

今にして思えば、私は随分と”不自由で不器用な子供”だったと思う。

日本人の父に、フィンランド人の母…

その両親の遺伝子を受け継いだ筈の私だけど、どういつ訳か容姿は母親の因子を強く継いでしまったみたい。

お気に入りの金色の髪と白い肌、それに蒼い瞳は、正に母譲りだっ
て思う。

父から受け継いだのは、東洋人特有のきめ細かい肌（これには感謝
です）と眉毛の形：それと性格かな？

生まれた家は、遡れば公家だったか華族だかに行き着く名門…

そして、時代の荒波に翻弄されて没落することなく、こうしてる今
も財産を増やし続けてる裕福な実業家…

客観的に言えば、私は恵まれた環境に生まれたと思う。

でも、客観的な幸福と主観的な幸福に隔たりがあるのは、世の常だ
と思わない？

家柄とか資産とか容姿とか…

そんな”世間の柵”^{しがらみ}は、幼い子供に理解できる訳はない。

”一般的な日本人の子供の通う幼稚園”に通う事になった私は、同
じ幼稚園に通う園児にとって、【いる筈のない異分子】だったって
いう変えようの無い事実…

でも、当時の私はやっぱり同じ幼稚園児で、それを理解できる訳なかった。

ただ、遠巻きに見てるだけで話しかけてくれない周りが悲しくて、寂しかった…

だから、いつの間にか周りとは無意識に壁を作っていたのかもしれない。

それが余計に人を遠ざけてしまうことも気付かないまま…

入園してからそんな独りぼっちの日が何日続いた…

（もしかしたら、ずっとこのままお友達が一人もできないかもしれない…）

子供心にそんな漠然とした恐怖感に怯えてた頃…

『かみ、きんいろでおひめさまみたいできれ〜　ねえ、いつしよにあそぼ？』

まるで、隣に要ることが当たり前のように…

まるで、私が【異分子】だって事を気にしないように…

いつの間にか隣にいた可愛らしい女の子は、子供にも分かる…いや、子供だから大人以上に直感的に感じる筈の容姿の違いとか、あるいは私が張っていた壁とかを軽々と飛び越えて、私に微笑んでくれた。

（それが唯ちゃんだった…）

どんなに私が嬉しかったか、想像かな？

その時の唯ちゃんは、例えるなら分厚い暗雲を割って差し込んだ、
一条の太陽の光…

きつと、私はあの時の唯ちゃん的笑顔を一生忘れないと思う！

それからの幼稚園は、私にとって楽園だった！

和ちゃんっていう新しいお友達ができた…

唯ちゃんの妹さんの憂ちゃんと仲良くできた…

四人で日が暮れるまで泥んこになって遊んだ…

生まれて初めてこねた土の感触は、今でも鮮明に覚えている。

（唯ちゃんは、私にとっていつもお日様の光で、暖かい春風だった…）

いつも明るく輝いて、誰にも何も縛られなくて…

今にして思えば、薄々自分の特異さに気が付き初めていた私にとって、唯ちゃんは憧れた”自由”その物だったのかもしれない。

自由奔放で天真爛漫…

そんな唯ちゃんのそばにいれることが…そばで見えていられる事が、何よりも嬉しかった…

卒園しても、私は唯ちゃん達と同じ小学校に通う事が許され、いつも気分はつきつきしてた。

ただ、唯ちゃんと一緒に過ごす毎日が楽しくて、

(そんな幸せな時間がずっと続くって、無邪気に信じてた…)

でも…

別れは、突然訪れた。

私は、物心がつく前からピアノを習っていた。
最初はステレオ・タイプの”お嬢様らしいたしなみや手習い”のもりで両親は始めさせたのかもしれないけど、幸か不幸か私にはそこそこの適正や才能みたいな物があったみたい。

腕は人並み以上にはあったらしいし、私自身もピアノを弾くのは好きだった。

特にお家に遊びに来てくれて唯ちゃんがニコニコしながら拍手と共に、

『むぎちゃんって、ぴあのおともきれ〜だね〜』

って誉めてくれてから、ますますピアノが好きになっただし練習に打ち込んだ。

私のピアノで笑顔になる唯ちゃんが嬉しかったし、唯ちゃんを笑顔にできる自分が誇らしかった。

でも、小学生3年生の時…

(コンクールに出たのが失敗だった…)

国内でも有数の大きなピアノ・コンクール…その10歳以下の部門で、私はあえなく優勝してしまった。

コンクールが終わったすぐ後は、会場に来ていてくれた唯ちゃんや和ちゃん、憂ちゃんとパーティーをやれて楽しかった…

そのすぐ後に来る別離も知らず、楽しんでいた…

『えっ!?!? ピアノ留学っ!?!?』

それはまさに晴天の霹靂^{へきれき}だった。

だけど、今にして思えば両親の判断は当然過ぎる結果だ。

琴吹家は音楽関連の事業で大きくなった家で、業界では名の知られた”音楽コングロマリット”だ。

そんな家直系の者の中に突然、”彗星の如く現れた天才ピアノ少女”がいればどうなるか…？

”最良の広告塔”に仕立てあげられるのは、寧ろ自明の理だろう。

広告塔なら派手でなければいけない。

なら、よりセンサーシヨナルな話題が必要なのは当然だ。

それにちょうど”琴吹グループ”が、色々な意味合いでアメリカに続いて欧州でコネクションを作ろうとしていた時期（だから、両親も欧州に行く事になってたの）と重なったのも、もしかしたら運が無かったのかもしれない。

音頭をとったのは、お父様の更の上…琴吹グループの会長、つまりお祖父様で、当時10歳にも満たなかった私にはただ驚き、そして…

（泣く事しかできなかったの…）

でもね、唯ちゃんは笑顔で見送ってくれたの…

お別れなのに、泣き顔を私に見せたくないからって…

空港まで見送りに来てくれて唯ちゃんは、泣いてるのに笑顔で…

『もつずっと会えないって訳じゃないよね…？ またきつと会えるよね？』

『うん…うん！』

『なら、またむぎちゃんが日本に帰ってきたら、また一緒の学校に通おう！ また一緒にお昼食べて、おやつ食べて、晩ごはんを食べよう！』

『クスクス 唯ちゃんたら食べてばかり』

無理におどけたけど、私…きつと上手く笑えてたよね？

『いいの！ むぎちゃん…約束しよ？』

『うん…約束…だよ？』

日本を飛び立つ飛行機の中で、私は確かに青い空に両手を広げ大きく手を振りながら、そつと涙を流す唯ちゃんを見た気がした。

（だから、私は決めたの…！）

巡り会えた唯ちゃんとの日々を決して忘れないって！

そして…

（遠くない未来、また唯ちゃんの後ろ姿を当たり前に見れる日を、きつと取り戻してみせるって！）

だから、私は必死で頑張った！

日本に戻る…唯ちゃんにまた会えるようになるには、お祖父様やお父様と張り合える”力”が必要だ。

そして、私に手に入る力は”実績”…

14歳の時、私は著名な音楽家の名を冠した国際的にも有名なピアノ・コンクールのジュニア部門で”入賞”を果たした。

一人しかいない優勝ではなくて、あくまで何人もいる入賞…それが、私のピアニストとしてのピークだった。

でも、満足だった。

私は全力が出せたし、広告塔の役割を最大限に果たした自負はあったから。

私は、その実績と共に日本に帰る事をお父様に了承させる事に成功した。

これで、大腕を降って唯ちゃんとまた同じ学校に通える…

(と、素直に思ってた時期が私にもありました)

しかし、流石に敵もさるもの!

琴吹グループ会長の肩書きは伊達ではなく、私が帰国した時には既にお祖父様が、【帰国子女を積極的に受け入れる名門お嬢様学校】への編入手続きを終えていた(泣)

『お祖父様、やってくれましたわね〜!!』

それが私の偽らざる感想だった。
確かに編入先の、

『おはようございます、お姉様』

『おはよう。あら? リボン・タイが曲がっていてよ?』

そんな百合の花が咲き乱れるような花園の空気は、嫌いじゃなかったけど…

(でも、それよりもずっとずっと唯ちゃんに会いたかった!)

そして、再び私は唯ちゃんと出会えた…

桜の散る頃に、まるで偶然のように…

『むぎ…ちゃん？』

『唯ちゃん…会いたかった…』

もう一度始まる…

いつだって戻る…

それが、私と唯ちゃんの”絆”だって、私は信じたい…

細かい描写は割愛させてもらっわね？
だって、気恥ずかしいし…

(私と唯ちゃん、二人だけの思い出だから)

私がない間にギー太と出会って、音楽っていう新しい翼を手に入
れて…

(唯ちゃんは、前より更に自由で、眩しくなってた…)

がいない間に唯ちゃんを一層輝かせたギー太には、ちょっぴり嫉妬

するけど…

『わたくしがギターを弾くようになったのは、きっとむぎちゃんの影響だよ』』

って言うてくれたので、よしとするしかないわよね？

そして、唯ちゃんは昔みたいに和ちゃんや憂ちゃんを連れて、勿論一人でも遊びに来てくれた。

昔と違うのは、唯ちゃんがいつもギターを背負ってる事と、泥んこ遊びがセッションやアンサンブルになってたってこと

それが嬉しくて、ついついキーボードを新調しちゃったり、それでも元ピアノリストとしては、ピアノ&エレピ（電子ピアノ）&オルガンの音が物足りなくて、鍵盤楽器専用の真っ赤な色がキュートな専用機を追加したり色々あったけど…
でも…

（確か、かつて欧州全土を戦乱に巻き込んだ独裁者の言葉だったかな？）

曰く、

”欲望は膨張する”

それは、りつちゃんや澁ちゃんが私達に合流して、私のピアノ・ルームでそれなりのバンド形式のジャム・セッションができるようになった頃…

(和ちゃんも澪ちゃんもりっちゃんも…いいなあ…)

三人共唯ちゃんと同じクラスで、同じ高校に行くつもりだった時、私は素直に三人が羨ましかった。

どうして私がそこにいないんだろうって、真剣に悩んだ…

唯ちゃんもう一度会えただけで満足だった筈の私は、気が付かないうちに酷く欲深くなってみたい。

ある日、自分を抑えきれなかった私は、唯ちゃんと二人きりの時、ついその事を打ち明けてしまった。

だけど、唯ちゃんは真剣な標準で、

『約束したもんね！ また一緒に学校でお昼食べようって』

嬉しかった…

ただ、嬉しかった…

私と同じくらい、唯ちゃんが約束を大切に思っていてくれた事が…

名門お嬢様学校のご多分に漏れず、私の通ってる学校は、小学校から大学までの一貫教育を売りにしていた。

しかも、入学に関しては家柄審査や資産調査まであるという学校だ。唯ちゃん達が簡単に入れる場所じゃない。

だから、私が外部進学するしか道は無かったんだけど…

『最低でも、お父様とお母様を説得しないと…』

『…それなら、きっと大丈夫だよ』

唯ちゃんが語ったのは、一見すると突拍子も無いアイデアだったけど…

「音楽は、人の心を揺り動かす力を持つてる”…か」

私は、太ももでスヤスヤと安らかに寝息をたてる唯ちゃんの少しクセのある柔らかい髪を、そっと撫でる…

「唯ちゃん…」

…

…

…

… 大好き

第05話 "しーゆー" (後書き)

皆様、ご愛読ありがとうございましたm(____)m

今回は、紬の一人語りという珍しい形式で話を作ってみました、
如何だったでしょうか？(^^)；

いや、それ以前にこんな紬はどうでしょう？(汗)

いや、過去が変わる事で現在のキャラが大幅に変わるという定義
でエピソードを構築してるので、原作ムギファンの皆様の反応が少
し心配です(^^ー^^)；

次回は、”平行世界ならHTTにいない筈のキャラクター”とかに
もスポットを当ててみたいなあ、とか画策してます(笑)

では、またお会いできる事を祈りつつ(____)

第06話 "がつしゅく!" (前書き)

皆様、こんばんわー

なんかここ数日、時間が取れない暮灘ですm () m

ただでさえ、執筆速度が落ちているというのに (泣)

さてさて、今回はサブタイ通りの展開で、原作と比較するなら1年前の合宿 (笑) の風景となります。

そして、後半にはまたしても”ロックな魔改造”を受けたキャラが
… (笑)

第06話 "がつしゅく!";

あのライブから数日後…

前にチラツと書いたが、琴吹家は大富豪で紬はそのお嬢様。それはこの物語における絶対的な真実だ。

だとするなら、琴吹家が国の内外を問わず所有する数々の別荘…その中の海辺にあるスタジオ付の1つを、紬が”自分名義で所有”していたとしても何の不思議があるのか？

そして今回のエピソードは、ここ…紬がみんなと過ごす為に勝ち取った”ひみつきち”から始まるのだった。

早朝…

昨日の夜に琴吹家で貸し切ったリムジン・バスで機材ごと移動してきた為、疲れてまだ誰も起きてこない筈の時間帯。

しかし、別荘に備え付けられたスタジオには、防音防犯処理がなさ

受けずに済んだ。

ちなみにギー太と出会ってからのというもの、何かと物入りになった唯が憂に泣き付いて、彼女が資金繰りの一元管理するようになっていたりする。

そうでなければ、唯はここまでのエフェクター・システムは揃えられなかったろう。

他にも憂は、欲しいものを安く買う為の情報収集（これはガネツ娘幼馴染みの存在も大きい）や、スイツチャーノパワーサプライ、エフェクターを壊れないように安全に持ち運ぶエフェクター・ケースや軽量ハード・ギターケース等の割引率が低く地味に高い物を誕生日やクリスマスでの両親への要求に組み込む事を提言したりと、まさに唯を生活や資金その他諸々を支える裏方として大活躍していた。

さて、生活面でのパートナー（？）が妹の憂だとするならば、音楽面でのパートナーは言うまでもなくギー太だ。

それにしても、こう朝日を全身に浴びてるギー太…公式には、ギブソン・カスタムショップ謹製

【Inspired By Slash” Appetite For Distraction” Les Paul VOS】
通称”AFDレスポール”は、アーティストがその名を冠して、”自分の相棒達”のレプリカである事を示す”シグネイチャー・モデル”のレスポールの中でも、飛び抜けて個性的なスタイルをしてい

るのがよくわかる。

ピックガードが外されてる為にボディ全面に浮き出てるのが見える
虎縞空目が見事なバタースコッチ（飴色）・フィニッシュのフィギ
ユアード・メイプル製のトップと、チエリーカラーに塗られたソリ
ッド・マホガニーのバックを組み合わせたボディ…

取り付けられるピックアップは、それ自体がシグネイチャー・ピッ
クアップとして販売されてる白と黒のシングル・ピックアップを張
り合わせて作ったようなゼブラ・カラーのセイモア・ダンカン社”
アルニコ2プロ・スラッシュ・シグネイチャー” ハムバッキング・
ピックアップ。

ついでにダイヤルは、メタルキャップ付きのトップハット・ノブだ。

1ピース構造のメイプル製ネックは、”スラッシュ・ネック・プロ
ファイル”と呼ばれる59年型レスポールより少し細く成型され、
それをディープ・ジョイントにしたロングテノン・ネックを採用し
ていた。

しかも、何となくだがギター・ヘッドの部分で弦を巻き付け引つ張
るペグ、弦の張りを保ちつつ支えるブリッジ（チューン・O・マチ
ック）、最後尾でしっかりと弦を固定するストップ・テイルピース
がオリジナルと違う気がする…

上手く言語化できないが、何となく形が違うというか…そう、一層
ロクク的な意味で迫力があるのだ。

ギターに詳しくない人には、お経か呪文にしか聞こえない単語の羅
列かもしれないが、簡単に言えばステージ衣装に身を包んだ唯並み

に個性の塊で、キャラ立ちまくりなレスポール…ってとこだろっか？

まあ、今の唯は完全に平常運転の部屋着モード、”欠陥電気”という謎のレタリング文字（笑）が入ったTシャツにペパーミント・グリーンの短パンを組み合わせたという、ラフというかテキトーな格好だった。

しかし、それでもギターを構えてバツチリ決まってしまう辺り、流石は出会ってから三年近くなる”コンビ”の成せる技か？

そして、おもむろに数々エフェクターが接続されたスイツチャーより伸びたシールドを、マーシャル社製のアンプ、JCM800シリーズの”2203KK”に繋いだ。

スタジオには、同じマーシャル社ならJVM410HやJCM900-4100、あるいは1959RR等と言った名機が所狭しと並んではいるが、センド&リターンでアンプで歪みを作るのではなく、自前のエフェクター・システムでデイストーションまで含めて音チエックし、セツティングを出したい唯としては、オーバードライブやクランチChが付いていない1chアンプの方が、今は何かと都合が良かった。

（そういえば”KK”って、ケリー・キングの略だったっけ…）

ケリー・キングが何者かと言えば、メタリカ、メガデス、アンストラクスと並び称される”BIG4”…”スラッシュメタル四天王”の一角”スレイヤー”のギタリストだ。

「そういえば…もうすぐSlashのシグネイチャー・アンプも売り出されるんだっけ？」

もつとも割引価格で販売されたとしても20万円近い値段がつく代物で、限定生産な事を考えれば、プレミア価格がついてもおかしくないなあ〜と考える唯であった。

（まあ、どっちにしてもわたしには関係ないけどね〜）

値段から考えれば、自分には縁のない話と割りきる唯である。

しかし、後にあながち縁がないどころじゃなくなるのだが…それはまあ別の話。

唯は思考を切り替えて…

”ジャラ〜ン”

軽くギター太を鳴らしてみる。

その瞬間、唯の顔から満面の笑みが溢れた。

2033KKの出力は100W。

やはり家で練習に使ってる手提げ金庫サイズの15Wアンプ、VOX社の”Night Train”^{ナイト・トレイン}とは迫力や音質が全く違う。

ちなみに、唯がこの英国系アンプを選んだのは、単純に名前が気に入ったから。

ナイト・トレインという名は、ガンズ・アンド・ローゼズの名曲のタイトルと同じなのだ。

唯はいつも自分の部屋では15Wアンプを、更に出力半分の7.5Wモードに出力を絞って使ってるので、余計にそれを感じるようだ。100Wとか15Wとか聞くと、読者の皆様は電球のワット数を思い浮かべて、つい大した出力を想像しないかもしれないが…

ぶっちゃけ、皆さんが初めてアンプにギターを繋いで鳴らした時、そのワット数からは考えられない音のでかさに驚嘆する事請け合いです（笑）

分かりやすく言えば、家で使う32インチぐらいの液晶テレビのスピーカー出力が左右合計で5W〜10W前後というのが一般的だ。しかもテレビなんかで使われているソリッドステート・アンプに比べて、ギター用アンプじゃメジャーな真空管アンプは、同じワット数なら圧倒的に音が大きい。

人によっては真空管アンプの5Wは、ソリッドステート・アンプの20Wに匹敵する音の大きさがあると言っぐらいだ。

それこそ防音なんかが大して考えられてない一戸建てで、100Wの真空管アンプでギターを鳴らそうもんなら、平沢姉妹が昔からお世話になってる隣のおばあちゃんが爆音にびっくりして跳び上がり、そのままぎっくり腰になるだろう。

そんな訳で、日本のウサギ小屋的住宅事情を考えれば、数十ワット超の真空管アンプを家で鳴らすというのは、かなり恵まれた状況が必要だろう。

だから、遠慮なく爆音を出せる環境というのは、貴重でして…

「」

最初は弦の感触を確かめるように、流すようなゆっくりとしたアウ
ト・サイドからオルタネイト・ピッキングのアルペジオ奏法で弾き
始めた。

” ジャカジャン キュキュチユイーン ”

やがて、ストリング・スキッピングを入れてペースアップ。

得意技の多彩なチョーキングにネック・スライドを用いたビブラー
ト、この二つをミックスさせたチョーキング・ビブラートで更にノ
リノリだ
そして、

「流派ピート・タウンゼント！ 腕グルグル円月さっぽおっ」

と、見かけの派手さなら幾多あるギターテクの中でもトップクラス
な、腕をグルグル回しながら弾く新技”ウィンド・ミル奏法”を披
露する唯であった（笑）
その時だ。

「いや、それ色々と混じってるから」

と、突然背後より声がかかった。

唯は幼稚園の頃から聞き慣れた声に振り返り、

「おはよ ” のどかちゃん ” 」

まなへ・のどか
真鍋和。

最優先情報としては、幼稚園の頃からの唯の幼馴染み兼保護者（笑）
ついでに仲間内では希少なガネっ娘キャラ

しかし、どこかしら…というか、かなり平行世界とは雰囲気が違う
に見える。

一説によれば和のアイデンティティの半分を占めると言われている赤いハーフ・フレームの眼鏡& a m p ;ショートヘアは同じだが、赤のショートパンツに黒のタンクトップを合わせた服装は、
何気にワイルドだ。

首からかかるドッグタグ・タイプのシルバーペンダントや両耳の燃えるような色合いの真っ赤なガーネットのピアス、腕飲料にぶら下げた二つの缶入り飲料が、余計にその雰囲気一拍車をかけてるのかもしれない。

ついでに言えば、シャワーでも浴びてきたのか少し濡れたような髪が妙に色っぽい…

「おはよ、唯。珍しく早いわね？」

「えへへ〜　　なんだか待ちきれなくて、目が覚めちゃった」

「ふ〜ん」

と、返しながら和はぶら下げていた缶の一つを唯に放る。

「わわっ!？」

緩い放物線を描いて飛んでくるオレンジ・ジュースを慌ててキャッチする唯を横目で見ながら、和はカシユツと明らかに輸入物っぽいデザインの缶のプルトップを親指で弾いて開けた。

「のどかちゃん、朝からビール？」

少し呆れたような唯に、

「ビールって言ったってノンアルコールの奴よ？　こんな物、ビール味がする炭酸入り麦茶じゃない」

苦笑するような表情をしてから、

「それに、薬でキメないとステージにも上がれないミュージシャンもいるんだから、それよりはマシでしょ？」

と、やや危ない台詞を平然と返した。

「そんな変なの好きで飲むなんて、和ちゃんって変わってるよぉ」

和は、芝居がかった驚愕の表情をすると溜め息混じりに、

「ハア…唯に変わり者呼ばわりされるなんて、この真鍋和も墮ちるところまで墮ちたものね…」

「さりげなく酷いよ、のどかちゃん!!」

もっとも、和にはそんな唯の抗議などどこ吹く風だ。

唯と同じように昨晚の内にスタジオに運びこんでいた、ギター・ケースより一回り大きなハード・ケースを開き、

「TBWU (To Be With You) ” ∴ 出番よ」

と小さな弦きと同時に取り出したのは、白木拵えのメイプルネックと白いピック・ガード、何よりアルダー製のボディを眼鏡やピアス、シヨートパンツと同じ系統の色 ∴ ” ラヴァ・レッド (熔岩の赤) ” と呼ばれる赤色で塗った4弦のベースだった!

第06話 "がつしゅく!" (後書き)

皆様、ご愛読ありがとうございましたm(____)m

つい出来心で” ロックな和たん(笑)” を出してみました(^
^ ;

しかも、分かる人にはベーシックになったアーティストが分かる
という小ネタ付き

キャラ的には暖かみのあるシニカル・キャラ(?)で、見かけはそ
うは見えないけど、微妙に口と素行の悪かったりして(笑)

でも…原作ファンの読者様に刺されないか心配です(^| ^ ;)

大体、原作キャラはかなり” ロックとは限らないカスタム(笑)”
されていますが、そんな作品でもよいというなら、これからもよ
しく願います(____)

しかし、こやつらが入学した時、さわちゃん先生がどんな反応する
ことやら(; ^ | ^ A

では、また次回お会いできる事を祈りつつ。

第07話 "がねっ!" (前書き)

皆様、こんばんわー

何とか出かける前に書き終えてホッとしてる暮灘です(^^ ;

さてさて、今回は…

全国600万人の和ファン(?)の皆様、お待たせしました(笑)

サブタイ通りにずっと和ちゃんのターンです

唯との出会いからベースを始めるまでを語っていますが…少々、カ
スタム(笑)が激しいのでファンの人に刺されないか心配です(^
| ^ ;)

何となく気があって、気が付いたら何となく暇な時はいつも一緒にいるっていうのが一昔前までの私と唯のスタンスだったわね。

オールデイズ・ナンバー風に言うなら、”二人の距離”って奴ね。とは言っても、特に印象深い思い出があるかって言えば…唯の引き起こした数限りないドジ（笑）は、確かにインパクト絶大だったけど、他にと聞かれると…特に無いわね。

まあ、小学生の中ぐらいは私も気まぐれ起こして知り合いの空手道場とかに顔を出してたし、これでもわりとすれ違いの日々もあったのよ？

えっ？

あっ、うん。そうね。

ちょうど紬がヨーロッパに行った頃ぐらいね。

あの後、唯は暫く腑抜けたみたいになって、前以上にボクッとする事が多くなって私も暇だった…

嘘よ。

紬がいなくなつた喪失感を自分なりに埋めようと足掻いただけよ。

気が付いたら唯と一緒に小学校を卒業してて、そのまま普通に公立の中学校に入つて…

でも、確か中学に入ったばかりの頃だったかしら？

多分、まだ桜が散りきる前だって覚えてるから、きつとそう。

その日、唯は（この表現ははっきり言って唯には似合わないけど）別人みたいに全身に覇気を巡らせて、双眸を爛々と輝く力をみなぎらせて、こう私に言ったのよ…

『のどかちゃん…』

『唯、どうしたの？』

『わたし…』からっぽ”じゃなくなっただよー！』

【とあるガネっ娘の回顧録】

より抜粋。一部改変

昨晚の内にスタジオに運びこんでいた、ギター・ケースより一回り大きなハード・ケースを和はバクンと開き、

「TBWU (To Be With You) ” ∴ 出番よ」

と小さな弦きと同時に取り出したのは、隠していたセミオートの軍用狙撃ライフル…ではなく、精悍な印象を漂わせるベースだった。

いや、何か和の雰囲気とか格好とか見てると、非合法的な代物が出てきてもおかしくない気がして（笑）

細かく言えば、白木拵えのメイプルネックと白いピック・ガード、眼鏡やピアス、ショートパンツと同じ系統の色…”ラヴァ・レッド（熔岩の赤）”と呼ばれる”赤色”で塗られたアルダー製のボディを持つ4弦のベースだ。

和 side -

Hi! ちえけらつちよい

ガネっ娘ヒロインの座は私が独占 の真鍋和よ。

って、なに突っ伏してるのよ…？（汗）

わ、私だっただまにはフザケ…もとい。弾けてみたいわ。察してよ、もう。

さて、私がいつも通りの時間…空手（正確には”琉球唐手”だけどね）をやった頃の朝練込みの生活パターンが染み込んでるから、人に言わせれば早い時間にベッドから抜け出て目覚ましにシャワーを浴び、朝の内に楽器と機材のチェックを済ませてみようとスタジオオに向かうと…

(唯…?)

そこには、ストリング・スキッピングを交えながらアルペジオ奏法でギー太を弾いてる唯がいた。

(本当に唯は変わったわね…)

昔から唯は一度集中さえしてしまえば、類い稀な集中度と持続時間を発揮して、何事も凄いとこまでいく。

(ただ、難点は中々集中しなかったのよねえ…)

でも、ギー太と出会ってからの唯は、ずっと集中力を維持してる気がするわ…

私は、冷蔵庫を開けながら少し過去を振り返る。

『わたし…”からっぽ”じゃなくなっただよー!!』

そう言い放った唯。

そして、この台詞には続きがあった。

『ギー太が教えてくれたんだ！ 答えは、ずっとわたしの中で眠ってたんだよっ!!』

そう興奮気味に、唯にしては早口で捲し立ててたっけ…

(唯が言っていた事の深い部分までは、今でも判らないけど…)

ギー太…AFDレスポールと出会って、唯が何かを見つけたのは確

かみたいね。

私は、冷蔵庫を漁ってオレンジ・ジュースとアルコールフリーのビールを頂戴した。

ちなみに選んだビールの銘柄は、ドイツの”ホルステン”。
さすが琴吹家、侮り難しというところかしら？

通好みのホルステンだけじゃなく、同じくドイツじゃ一番メジャーなノンアルコール・ビール”クラウスターラー”も一緒に冷えてる辺り、実によくわかってるわ。

ちなみに、私が家で飲むのはクラウスターラーが多いわね。

味付けの方向性が違うからどちらもテイストは甲乙付けがたいけど、価格がホルステンより僅かに安いっていうのと、何より入手しやすいのよ。

一度この味に慣れると、混ぜ物の雑味ばかりが目立つ国産ノンアルコール・ビールは飲めなくなるわよ？

とりあえず、身体の表面はシャワーでスッキリできるけど、眠ってる間に濁った気がする血液を押し流し、中から頭スッキリさせるには、ブラック・コーヒーよりドイツ産の泡が出る苦麦茶（笑）の方が遥かに効率的よね

オレンジ・ジュースを唯に差し入れた後、私は、トニー・ビー・ウイズ・ユー”TBWU”をケースから取り出してチェックを始める。

TBWU：正式には、YAMAHA”Attitude LTD 2/LR”。

あつ、LRはレフト&ライトの事じゃなくて”ラヴァ・レツド”の略、つまりカラーリングの事よ？

この子は、私がプレイイング・マイルストーン：演奏目標にしてる”最速のベース・ギタリスト”、”ビリー・シーン”のシグネイチヤー・モデルなの。

ビリー・シーン…或いは、”ビリー・シーハン”とも呼ばれてるわね？

彼は例えるなら、そうね…”神の子”かしら？

少なくとも、私は彼の演奏を初めて見たとき、ベースの常識を覆す速さ…人間の限界を超える指捌きの速さに、

(目を奪われたわ…)

ベースつて、あんなに速く弾けるんだ…ってね。

それに触発された私は、何度も動画を見るだけじゃ飽き足らずに、再結成したビリー・シーンのバンド”Mr. Big”の来日コンサートに行ったり、或いはYAMAHAの主催する”ベース・クリニック”にも参加したっけ…

今、名前を出したけどビリー・シーンの名を一躍有名にしたのが、80年代に結成されたロックバンド”Mr. Big”って訳よ。

ビリー・シーンはそのベーシスト…いえ、彼の言葉を尊重してこは”ベース・ギタリスト”と言っておきましょう。

確かに、ビリー・シーンのスーパーテクから繰り出される演奏は、一般的なベーシストの範疇から外れてるわ。

そして、私が”Attitude LTD2”に付けてるペットネーム(愛称)の”TBWU(To Be With You)”は、”Mr. Big”を一気にスターダムに押し上げたビッグヒット・ナンバーのタイトルなのよ。

”君と一緒にいたい”なんて、中々悪くないでしょ？

まあ、ビリー・シーンやMr. Bigの事は、またそのうちにね？

それとも、何故私がベースを始めたのかって興味無い？

結論から先に言えば、唯が理由よ。

既に察して貰えたかもしれないけど、正直に言えば”からっぽ”だった時代の唯とは、今ほど親密って訳じゃなかった気がするわ。

お互い居心地がいいから、何となくそばにいる…それこそ、” T O
B e W i t h Y o u ” とは対極の関係ね。

例えば、珍しくクラスが別になれば、それなりに疎遠にもなったし
ね。

でもね…

（唯は、変わった…）

ううん。

もしかしたら、今の唯こそが” 本来の唯 ” なんじゃないかって気が、
最近はするのよ…

そういえば唯は昔、ポツリと…

『何かしなくちゃいけない筈なのに、何をしてもいいか分からないん
だよ…わたしの中、何も無いから…』

って言ってた事があつたっけ…

（ギー太との出会いで探してた答え…やりたい事とやらなくちゃい
けない事が見つかったんでしようね…）

唯の内側でどんな変化や革命が起きたのかは知らないけど、少なく
とも唯は” いつも何もやらずにボツツとしてる女の子 ” から脱却し
た。

でも、私は…

(中学生になっても、特に何も変わらなかった…)

変わる事が常に良いとは限らないけど、

(唯が一人で走り始めた途端、)

おいてきぼりを食らった気分になって、一抹の寂しさを感じるなんて、ね…

笑いたければ、笑っていいわよ？

唯の保護者を気取ってた癖に、このザマなんて我ながら滑稽なもの。

(だからこそ、見てみたくなったのよね…)

唯が見つけた答え…唯を変えた”何か”を。

(でも、ギターは憂がもう唯と一緒に初めてたし)

それに同じ楽器じゃ、唯に並べないどころか憂の背中にも追い付けない気が、何故だかしたのよね。

(だから、私はベースを選んだ)

別にギターで並ぶ必要はない。

プレイヤーとして同じステージに立つことが出来れば、

(唯が見ている物が見える気がしたから…)

まっ、自分で言うのもなんだけど、単純な話よねえ。

そして、自分のお手本とすべきプレイスタイルを模索してる最中で見知ったのがMr. Bigであり、ビリー・シーンって訳よ。

私は、TBWUのチェックを終えると、荷物からエフェクターを取り出す。

Zoom社のベース用オール・イン・ワン型マルチ・エフェクター”B9・1ut”というモデルだ。

本当は唯みたいにデジアナのハイブリッド・エフェクター・システムを組みたいとこだけど、生憎と予算不足なのよ。

TBWU…というか、代々のYAMAHA”Attitude LTD”が引き継いできた特徴なんだけど、フロントとリアの二つあるピックアップから別々に出力できる仕組みになってて、出力ジャックがフロント用&リア用の二つある”ステレオ・アウト・ブット”になってるって訳。

ギターではたまに見かけるけど、少数とはいえ量産されてるベースでステレオ・アウト・ブットを採用しているのって、もしかしたらこ

のシリーズだけかもしれないわね？

まあ、だからTBWUの性能を引き出そうとすれば、アンプは2台あつた方がいいのよ。

そんな訳で、家にはAmp^{アンプ}社の”MicroVR”とHar^ハtk^{トキ}e社の”HA2500”が1台ずつと、それぞれのスピーカー・キャビネットがあるのよ。

アンプとハートキーのアンプが一番安いモデルでそれぞれ3万円もしなかつたけし、TBWUの本体も約半額の15万円にして貰つた(この辺りは、紬の実家が経営してる楽器店に感謝ね)けど、やっぱり痛い出費だつたわ…

なんせ、幼稚園の頃から脈々と貯めてきた貯金がスツカラカンになつたしね(泣)

そんな訳で、エフェクターに予算投入できるには、まだ時間がかかりそうよ。

まあ、工具とかスピーカー・キャビネットとかは親に出させちゃつたから、あんまり文句も言えないわね？

それに、私はB9・iutをかなり気に入っていた。
なにせ…

(色が良いのよ)

言うまでもないだろうけど、カラーリングはレッドよ

私は、自分の部屋にあるそれより遥かに上等なアンペグとハートキ
ーのアンプにそれぞれシールドを繋いだ。

シールドも勿論赤いのを使ってるわよ？

まあ、これは手頃な値段で満足いく音の赤いシールドが無かったか
ら、ベルデン社の”#8412”ってケーブルの赤を買ってきて自
作したけどね。

そして、私は楽しそうにギターを弾いてる唯に向いた。

頬が微妙に緩んでるって自覚は自分でもあるわ。

「ねえ、唯」

「あに？ のどかちゃん？」

「一勝負しない？」

第07話 "がねっ！" (後書き)

皆様、ご愛読ありがとうございましたm(____)m

とりあえず、こんな和になってしまいました。如何だったでしょう？(; ^ | ^ A

いや、実は作者的には魔改造済みの”ロックな和”はかなり気に入ってます、原作より確実に出番が多いかと(^ ^ ;

もし皆様にも気に入って貰えたら幸いです

それでは、また次回お会いできる事を祈りつつ(____)

第08話 "げきとっ！"（前書き）

皆様、おはようございますm(____)m

アイデアが暴発して眠気を押し流してしまい、勢い任せでつい書いてしまった暮灘です(^^)；

さて、今回は…

唯と和の”V S イベント（笑）”です。

二人のテクが、わりとガチに火花散らしたりして(；^|^A

そして、冒頭の和ちゃんの台詞の元ネタが分かる人が何人いるのか？（笑）

そして、残る初期メンバーも初登場！

それにしても、8話でようやくオリジナル・メンバーが揃うこの小説って一体…（汗）

漣はチラツとしか出ませんが、各キャラがどんな魔改造を受けたのか…それは、皆様の目で確かめて下さい

あっ、そうそう！

憂ちゃんの”相棒”も判明しますよ！

果たして、このギターを予想した人はいるのか？（^|^|^；）

では、何となく回り始めたような気がする” ツッコミ所だらけの物
語（笑）”をお楽しみ下さい（――）

第08話 "げきとじっ!"、

時は少し流れ…

細名義の別荘、その付属のスタジオにて

「唯、あなたに足りない物は優雅気品我慢根性根気慎重謙虚遠慮…でも、何より」

和は眼鏡の赤いハーフ・フレームの眉間部分を、”中指1本”で押し直し…

「速さが足りないわ」

キラリンっとレンズを輝かせる。

「おによれ〜！ ベーシストなのに、なんでそんなに速く弾けるのお〜っ!？」

驚愕の唯に、和は涼しい顔でピックではなく利き手の人差し指ノ中指ノ薬指の三本を平行に合わせるようにして弦を弾く奏法、十八番の高速演奏特化型ベース・スキル”スリー・フィンガー・ピッキング”に、ライトハンド奏法タッピングを織り混ぜるといふ高等技を披露し、

「唯、何度も言わせないで？ 私はベーシストじゃなくて”ベース・

ギタリスト”よ？ ある意味、あなたと同じ土俵に居るって訳」

「ふあ〜つく！」

「…中指は自重なさい」

「のどかちゃんには言われたくないよっ！」

真鍋和…

それは、然り気無い日常の仕草の中に、”中指を1本おっ立てるポーズ”を紛れ混ませる名手（笑）

「フフ…そんなことよりも、置いてくわよ？」

ノンアルコール・ビールをグビツと一気に呷あおった途端、それがまるでブースト燃料だったかのように、和のベースはペースアップ！

何か今にもスリー・フィンガーから”フォー・フィンガー・ピッキング”にクラスチェンジしそうな勢いだ。

「まっけるもんかあ〜っ！！」

それでもアルペジオ奏法からスウィープ奏法に瞬時に切り替え、逃がさず食らい付く唯も流石だろう。

「Hurry Hurry Hurry Hurry！
夜行列車ナイト・トレインは、待つては
くれないんじゃない？」

ますますムキになる唯を見ている和の顔は、言葉とは裏腹にとても優しげで…どこか母親を思わせた。

「おはよ〜…って、うおっ!?! これ、どんな状況だよ…?」

二人に遅れてスタジオに姿を現したカチューシャ未装備状態の田井中律が、突発的に始まってヒートアップしてたギターvsベースのバトルに素直に驚いた。

どうでもいいが、カチューシャ無しでも動ける所を見る限り、どうやら”律の本体は実はカチューシャで、体は操られているだけ”って噂はデマらしい。

「ポール・ギルバートvsビリー・シーン”ごっこ…?”」

同じく起きてきた黒髪の猫目美人、秋山澪あきやま・みおは不思議そうに小首をかしげる。

「じゃあ、”マキタの電動ドリル”持ってくる? 充電式のタイプが、確か物置にあったと思っただけ…」

そう言うのは、別荘のオーナーであることを台詞の端々に窺わせる細だ。

「いや、伝説のライブの再現はいいから。つか、火に油を注ぐなっつーの!」

と、律が当然と言えば当然過ぎるツツコミを入れる。

ポール・ギルバートとは何度も名が出てきたMr・Bigのギター
ストだ。

とりわけ、ライヴ・パフォーマンスで魅せたビリー・シーンとの”
悪フザケV S イベント（笑）”、Mr・Big名物【とりあえずマ
キタの電動ドリルでギター& amp ;ベースを弾いてみた】は、フ
アンにはあまりにも有名だったりする。
すると…

「バトル…楽しそうだなあ…」

ポツリと呟いたのは、短いポニーテールに髪を纏めた、唯の相似形
のような女の子だった。

「和ちゃんばかりズルい〜!」

なんて言いながら、彼女はてくてくと歩き出すと、やっぱり昨晚運
びこんでいたギターケースをバカンと開け、中から一本のギターを
引っっこ抜くように取り出した!

キルト・メイプルのアーチド・トップにバスウッド製アンダーを組
み合わせたボディに、2本のグラファイト・インナーロッドとステ
ンレス・スチール製22フレットを仕込んだクォーターズワン・メ
イプルのネックを組み合わせ、オマケにフロイドローズ・タイプの
トレモロ・ブリッジに仕込まれたダウン・チューニング・ディバイ
スの”D-TUNA”…

ここまで構造的特徴ありまくりのギターは、世界的に見てもそう多くは無いだろう。

外観も小ぶりなマッチヘッドに、ゼブラカラーの専用設計ハムバッキング・ピックアップ×2とかなり特徴はあるが…

このスペックを見て、ピンときた貴方はおそらくギター通

そう、後に”タッピング”と総称される”ライトハンド奏法”を世界に広めたスーパー・ギターヒーローの一人にして、ロックバンド【ヴァン・ヘイレン】を率いるボス、”エドワード（エディ）・ヴァン・ヘイレン”…

このポニテ娘のギターこそが、エドワード・ヴァン・ヘイレンのイニシャルを冠したプライベート・ブランド”EVH”が送りだす彼のシグネチャー・ギター”Wolfgang”だ！

それにしても、まるっこい…どちらかと言えば可愛いデザインのギターなのに、ウルフでギャングとは、これまたデンジャラスな名前だ。

しかし、実はエディの生まれ故郷のオランダでは、Wolfgangは”ヴォルフガング”というドイツ語的発音となり、人名としてはかなりメジャーなのだ。

実際、このギターの名は彼の息子で今はバンドのメンバーでもある”ヴォルフガング・ヴァン・ヘイレン（Wolfgang Van Halen）”から取られている。

蛇足ながら、平行世界の妹ちゃん（笑）の”相棒”とは、微妙にFender繋がりだったりするのだが…分かる人だけ笑ってください
やい

「お姉ちゃん、私も参戦するよ」

ギターvsベースの一騎討ちに、エフェクターやアンプに繋いだ準備万端のヴォルフガング片手に入って来たのは…

「うい〜」

そう、このヴォルフガング使いの少女こそが、度々名前が出てきた唯より1つ年下の妹で、ポニーテールがトレードマークの”平沢憂^{ひらさわ・うい}”である”

しかし、ピンクのキャミソールに、膝丈のジーンズという格好は、何となくフォークロア風で、純朴そうな憂には似合っていたのだが…

問題はギターと繋がれたシールド。正確に言うならその色だ。

憂のヴォルフガングは前述のように、形は可愛いのだが…どういう訳かカラーリングは、”Cherry Burst”だった。

チェリー・バーストと聞くと、”平行世界のギータ”カラーの”チェリー・サンバースト”というカラーを思い出す人がいるかもしれ

ない。

だが、あれは【サクラランボのような赤く塗ったギターが日焼けして色落ちした風合い】って意味だ。

対してヴォルフガングの”チェリー・バースト”は、チェリーはチェリーでも”ダークチェリー”色…ワインレッドを更に紫フドウよりにしたような色で、むしろ日本語的には【やや赤みがかった葡萄酒色】と表現した方がしっくりくる、全くの別の色だ。

しかも組み合わせられるシールドは、姉とお揃いのオヤイデ電気の製品なのだが、違うモデルで名前がなんと”G・SPOT”（汗）名からしてかなりセクハギリギリでアレだが、色も名前負けせずにメタル・パープルときたもんだ。

なんか、このギターとシールドを組み合わせると、ロックを通り越して「へびめたっ!!」とかってタイトル・コールを叫びたくなる。言うなれば、近い将来に唯達と深く関わりそうな女高校教師が、”黒歴史（笑）”時代に結成してたバンドでも違和感なくハマりそうな雰囲気のみなぎってる。

まさか、憂の本性が無意識に現れてる…とかは無いとは思って…

「ふん…面白いじゃない？ 姉妹まとめて叩き潰してあげるわ」

「言ったなあっつ!」

ムキィッッ！って感じの唯とは対照的に、憂は口の端だけで不敵に笑うと、

「和ちゃんこそ、精々私の”ハミングバード”で返り討ちに合わないように気を付けて」

ピックを親指と人差し指ではなく親指と中指に持ちかえ、弦に垂直に当てた。

”ハミングバード奏法”…

それは、ヴォルフガングのオリジナル・モデルの持ち主であるエドワード・ヴァン・ヘイレンが編み出したとされる、変則”高速トレモロ奏法”を意味するギターテクの名だった…

「なあなあ律りつう〜！ 私も和に加勢したい！ だってこのままじゃ、和が負けちゃうし…！」

と、クイクイツと袖を引つ張る見かけは6人の中じゃ一番の大人、中身は子供の幼馴染みに律は、

「あゝ、わかったわかった。好きなだけ逝ってこい」

「うん」

ニコリと微笑んだ澪は、

「和〜！ 私も助太刀するよ〜！」

準備を整えた愛用のジャズベ・タイプのベースと共に参戦。

「りっちゃん、私達は どうする？」

「正直、あたしゃ一刻も早く朝メシが食いたい」

無駄に熱いバトルを繰り広げるギター & amp・ベース組に呆れたような律の言葉に、紬はクスクス笑い、

「止める勇氣、ある？」

「ご冗談！ 下手に邪魔すりゃ、ロースト・チキンにされるのはコッチの方さ。だから…。」

律が荷物から取り出したのは、ブラウン・レザー製のゴツいデザインのガンベルトだ！

一番キツイ穴にしても、大分律のウエストより太いベルトは、右側に少し下がっていた。

それもその筈。

なんせベルトの右側には、これまた西武劇にでも出てきそうなデザインのリザー・ホルスターが吊るされているのだ。

ただし、突っ込まれているのはCOLTやS & amp・Wのリボルバーではなく、長短2種類2対4本のドラム・スティックだったけ

ど。

「適当に戦場煽って、手っ取り早く終わらせるとしようぜ？」

律はニヤリツと笑うと、何処からか取り出したカチューシャを、それこそガンスピンのように人差し指に引っ掛けクルクル回し、

「それが一番、建設的ってもんだろ？」

スチャ！とまるで擬音が立つようなアクションで髪に装着する。思わず細が、

「Wow! That a Stylish (意識:わあ!り
っちゃん、それカッコイイ)」

と感激したのも頷ける。

「どうやら”この世界の律”は、平行世界の彼女と違ってデコ露出にさほどコダワリは無いようだ。

いや、そもそも律がカチューシャを付け始めたのは、ドラムを叩き出してからの事らしい。

ドラムは、バンドで使う楽器の中で、最も激しい運動が要求される。だから当然のように大量に発汗する。

そしてドラムの練習中、長い前髪から滴り落ちた汗で文字通り”痛い目”を見た律は、ドラム・プレイ中はカチューシャを付けるようになっていた。

だが…

「さあ、いつちよ奏りますかあっ！」

パンツと合わせた掌と拳。

その瞳に宿るのは炎を連想させる覇気！

いつの頃からか、カチューシャは律にとってスイッチになっていた。

そう、”シャバに生きる少女”と”ドラマー”を切り換える為の。

「了解　りっちゃん隊長」

おどけた様子で敬礼する絢に、

「よせやい！　私は人を率いたり仕切るような器じゃないぜ？　そういうのは、和とかの担当だろ？」

と、律はペダル・ケース片手に苦笑した。

「…りっちゃんにも、人を引つ張る才覚、あると思うんだけどなあ…」

そう呟いた絢の台詞を、律は聞こえない事にしたようだ。

そして、律は普段は琴吹邸に間借りさせて貰ってる愛用のそれと、色まで含めて寸分違わぬスタジオ備え付けの”オレンジ色”のドラムセットの中に、絢はラックに二段重ねにした紅白のキーボードの前にそれぞれ陣取った。

そしてスタジオに、いつもなら放課後の風景が…
かつて絃が講師と二人でピアノ・レクソンに使っていた琴吹邸の彼女専用スタジオに唯達が集まり、自然発生的に始まる”ジャム・セッション”の風景がここにも広がっていた。

きっと、まだ彼女達はただのセッション・グループに過ぎず、とても”バンド”と呼べる代物じゃないかもしれない。

でもそれは、きっとここにいる6人にとっても大事な風景で…

それを”日常”にしたいからこそ、彼女達はここに集まっていたのだ。

そう、”みんなが当たり前と一緒に演奏”できる高校時代を手に入れる為に…！！

第08話 "げきとつっ!" (後書き)

皆様、ご愛読ありがとうございましたm(____)m

さてさて、魔改造済みの各キャラは、皆様の目にはどう映ったでしょうか？

一応、コンセプトは…

”ぶれない” 憂ちゃん

”可愛い” 澪

”カッコイイ” りっちゃん

って感じでしょうか？ (^ー^;))

ちなみに、ヴォルフガングが憂の相棒になった理由は…

憂は技巧派

フェンダー繋がり

構造的に精度が高い

AFDレスポールが発売された時期に発売されてる

などです。

実は、最後の最後までヴァイとアイバの”宝石”コンビと競っていたのは、ここだけの話(笑)

決め手は、やはりガンロゼが活躍してた時代と同時期に、ヴァン・ヘイレンが活躍してた事でしょうか？

憂は、姉の影響を強く受けてるでしょうし（o^_^）b

ガンロゼもヴァン・ヘイレンも、80年代のロックシーンを語る上では、欠かせませんし（;^| ^ A

それでは、また次回お会いできる事を祈りつつ（――）

第09話 "ゆるゆる!" (前書き)

皆様、こんにちはー

最近、自分が面白いと思う物と読者の皆様が面白いと思う物にかなりギャップがあるのでは…?と考えてしまつ暮灘です(^^; ;

さて、今回は珍しく音楽ネタが殆ど無く、一般的(?)ヲタネタが多数含まれてる、いわゆる日常シーン…である以上に、

ぬっらゆりぬらぬらゆりゆり ぬっらゆりゆ〜

と、この間終わった某百合アニメ的な展開といたしましょうか(^^
(^^)

とりあえず、りっちゃん&mp;澪ちゃんがメインのエピソードの筈ですが…

”イケメン”りっちゃん

”駄目っ娘”みおちゃん

この二つが受け付けない読者様はただちにターン・バックした方が
良いかもツス(汗)

”おバカな澪タソの方がむしろ萌える”とか、”りっちゃんは追
い込まれてる方が輝いてるよな〜”という方向けの展開となつと
りやす(;^^ | ^^A

ま、まあ、遷は原作よりよほど自分に正直に生きてるのは確実です
(^^^；

最後に…

律も遷も、周囲に触発や影響を受け、むしろ音楽的スペックは原作より高い筈なのに…

ど・う・し・て・こ・う・なっ・た・!!??

第09話 "ゆるゆりっ!"

それから約1時間後…

「なあ、教えてくれ…私達って、朝っぱらから一体何をやってるんだろうな…? ゼロは何も答えてくれないんだ…」

「さあ…? 黒チューリップ仮面からブリタニア皇帝になった人のことは、私にも…」

律の言葉に、漣は力の無い曖昧な笑みで答えた。

「いや、そっちのゼロじゃないし…フォーチュン・マウンテンじゃなくてグリーン・リバーが声演ってた方」

「ロックじゃなくてトランスの方があゝ」

漣は脱力しきった声で言ってるのは、どうやら主題歌のジャンルらしい。

あれから1時間弱…

唯と和の”Mr・Big名物ゴッコ(女子中学生版)”に引き摺ら

れる形で、全員が結局ジャム・セッションに参加。

ぶっ通しでプレイした結果…

「のどかちゃん…」

「なに？ 唯…」

「床、気持ちいいね…」

「同意するわ…」

体力精魂尽き果てた6人は、円を描くように床に転がっていた（笑）

どうやら、朝食も取らずに奏ったのが致命的だったらしい。

「朝ごはんの支度しないと…」

と、ヨロヨロな感じで立ち上がるうとする憂。

「ういゝ、もう少し休んでた方がいいよ…」

「そうよ。しばらくは誰も起き上がれそうにもないし」

と、大好きな姉と敬愛する姉御（笑）の言葉に、憂は思い止まり…

「なら、せめて飲み物ぐらいは持ってくるよ」

結局、動いた。

見た感じ、ダメージが一番少なそうに見えるし、憂は実は見た目以

上にタフなのかもしれない。

これ以上止めるのも野暮だと思ったのか、和は空になった缶を振り、

「クラウドスターラーの方をお願い」

「ふぁんたぁ」

と、続いてタレてるのかダレてるのか微妙な唯。

そして、「ありがとう」と言いながら紬がアイステイーを、「悪いね」と言いながら律 & amp; 澗がスポドリとカフェオレを次々とオーダーする。

それにしても…

和じゃないけど侮れないのは、琴吹家の冷蔵庫。

食材/食料品だけでなく6人の好む飲料が完璧に揃えられてる上、一定以上消費するといつの間にか(多分、セッション中とか遊びに出てる時に)補充されていたりするのだ。

「あちい〜!」

と、ついTシャツの首元を伸ばし、パタパタと手で扇いでるのは、床に胡座をかいてた律だ。

ギー太を弾いてる時は集中してるせいかな耐性あるが、基本的にクーラーが苦手な唯の為、スタジオの冷房はやや弱めにしかかかってない。

その上、冷風を直接吹き出すのではなく、壁や床を冷やす間接冷房

にしてある。

そのせいで1時間弱も全力セッションをすれば、当然のように汗が吹き出る訳で…

特に激しい動きが要求される律は、滝のような汗を流していた。

荷物の中に入れたタオルを律は鷲掴みで引き摺り出し、カチューシヤを外すとゴシゴシとノーメイクの顔と髪をを無造作に拭く。

と、ここまではワイルドなアクション。

ちなみに約一名が、その動きを寸分逃さずメモリーするようにガン見してる事に、律は気づいてない。

そして、首にタオルをかけると…

”ふあさ…”

少しくセのかかった髪を手櫛で整えるように、フワリと髪をかきあげた…

「わあ〜…りっちゃん、マヂ美少年…」

【前髪をおろしたりっちゃん、マヂ美少女】的なタイトルの動画が世にあるが、それは大いに肯定する。

さあ、皆でシャウトしようじゃないか…1・2・3・ハイッ!

『変じゃねーしっ!…!』

「どちらかと言えば、”シヨタツ娘”じゃない? 少年系ロリッ娘的な」

これも肯定だ。

そして、髪を下ろすと何故か【ぬこ目率】が上がる気がするのは、作者だけだろうか？

「いずれにせよ、退廃的耽美さのある風景よねえ」

コメントは上から順に、唯和紬なのは言うまでもない。

「もしも〜し。外野ウルサイっすよ〜。特に和！ 誰がロリっ娘だ
！」

田井中律：

6人の中でタツパも乳も最小キャラ（笑）

特に身長は一の位を四捨五入すると、この時点では未だ140cm…

「律以外にいないでしょ？ それよりも…」

和は顔に斜線が入りつつある澪を見つつ、

「そろそろ澪の”病気”が出る頃合いじゃない？」

”ぶちっ…！”

それは決して物理的に発生した音ではない。

ただ、澪の中で”人として大事な何か”が千切れ飛んだだけだ（笑）

「りったん萌え〜っ
」

”びょくん！”

「ぐえっ！？」

”どさっ！”

…今起きた事を、ありのままに言っぜ？

突然、体力が尽きて動けない筈の溼が、目からハイライト消しながら突然跳び上がり、ルパン・ダイブか縮地かって勢いでそのまま律に突っ込んでテイクダウン！

気が付くと、そのまま馬乗りマウント・ポジションをとってたのさ…

その時の正気の消えた溼の思い出すだけで、俺は…
俺は…

「りったんりったんりったんりったんりったんたんたん」

「ちよっと待てっ！ 誰が”りったん”だっ！？ 何か最後は更に変形してたしっ！…！」

「律の汗の匂い…律の汗に濡れた髪…律の汗ばんだうなじ…律の匂いが充満した脇の下あゝゝゝっ！…！」

「だあゝっ！ 聞いちゃいねえっ！」

「ハアハア…もう食べちゃって良いよね？ いいんだよね？ 答えは聞いてないけど」

「聞けよっ!!」

そんな二人のやり取りを生暖かく見ていた唯に、「いつもの事ね」
的な雰囲気な和。

そして、妙に嬉しそうな眉毛に特徴有りまくりなお嬢様は、実にイ
イ笑顔でサムズ・アップなどしつっ…

「りっちゃん！ 今こそ澪ちゃんのを受け入れる時よ」

澪はヘッドバンもかかやって感じのモーションで大きく頷き、

「そうだ！ 律、私と一緒に桃源郷を目指すんだ！ ムギだって祝
福してくれてるっ!!」

「お前らの趣味押し付けんじゃねーっ!!」

しかし、理性がリミット・ブレイク（笑）した澪や趣味堪能全開の
紬に、そんな怒声なぞ通じる訳もなく…

「じゃあ…（性的な意味で）いただきまあ〜す」

と手を合わせ、そのまま覆い被さろうとする澪！

ビデオカメラをいつの間にか用意してて、「ウフフ 今夜はお赤
飯ね」とか妖しげに呟く紬！

そして、止める気配さえ無い唯和（笑）

果たして、律の運命と貞操はっ!？

「姦らせん！ 姦らせはせんぞぉーっ！」

ガチで色々と大事な物（精神とか膜とか…）を食い散らかされそんな本能的危機姦…もとい。危機感を覚えた律は、古色ゆかしいジオニツクな雄叫びと共に右腰のホルスターからスティックを手早く引き抜き、

「ていつ！」

”べしっ！”

カウンターの要領で、見事に漕のデコにスティックを直撃させる！その技、まさに剣豪の居合いが如し！

「あつっ！？」

律の対漕用必殺護身技”カウンター・スティック・デコピン（笑）”のあまりの痛さに、思わず律から離れて床をゴロゴロ転げ回る漕タソである。

そして、上半身を起こして危機（主に百合的&下半身的な）が去った事に安堵の溜め息を突く律に、

「律：スティックはドラムを叩く物で、頭力チ割る道具じゃないと思うわよ？」

と、どこまでも冷静な和の言葉が突き刺さる。

「澪ちゃん、惜しかったわ！ あともう一步だったわよ ふぁいとぉっ！」

「みおちゃん、ねばーぎぶあっぷだよ」

痛みが引いた途端、「りちゆう〜」と涙目で呟きながら、床に”の”の字を書き始めた澪を慰める唯&amp;・紬。

「おまいらっ！ 私をレスキューするって発想は無いんでせうかっ！！？」

うがぁーっ！と上条さんチックに叫ぶ律に、唯和紬の三人は顔を見合わせ、

「何を今更…でしょ？」

「だって、りっちゃんはみおちゃんの嫁だし…」

「It's a "Ordinary World" (意識：日常風景だもの)」

なんか微妙に”Duran Duran”の往年の名バラード・タイトルが混じっていたような気もするが…

「ふんがぁぁーっ！！！」

世間の不条理さと仲間との認識と見解の相違に、思わずフランケンじみた怒りの絶叫のりったん隊長(笑)である。

飲み物を抱えた憂が帰ってきたのは、ちょうどその時だった。

そして、飯
まあ、干からびかけてた面々が復活したのは、漕が床をローリングした暫く後だったので、ランチに近い時間になってしまったようだ。

それでも昼を抜くという選択肢はこの面子にある訳もなく、簡単なおかず&mp・味噌汁でチャチャツと済ませ、昼を少し遅らせようって事で話は落ち着いたらしい。

「唯ちゃん、あ〜ん」

「あ〜ん」

細が箸で差し出した沢庵が、一切れであの日スーパーで見た特売沢庵なら1ダースは買える値段であることを、唯はまだ知らない…

「…なんだか、急に”めんま”が食べたくなった気がするわ…」

「和ちゃん？」

不思議そうな顔をする憂に、「なんでもないわ」と言いながら和は軽く頭を振り、

「憂は、唯の餌付けに参加しないでいいの？」

「餌付けって（汗） 私はいつも家でしてるし、こんな時ぐらい赤ちゃんが独占してもいいんじゃないかなあって」

テヘツ と悪戯っぽく笑う憂に、

（誰かが”憂”って名前は、”人”がそばに居るだけで”優”しくなれる…なんて中々上手い事を言ってたけど…）

「あながち、間違いじゃないみたいね」

「????？」

そう呟く和に、憂は小首をかしげた。

一方、同じテーブルに着いてる筈の澪律はと言えば…

「はい 律もアーン」

「一人で食えるわいつ！」

「ううっっ…律が冷たい…」

なんか今にもイジケてテーブルにまで”の”の字を書き出しそうな

漣の姿に、さしもの律も心が痛んだのか、

「あんな〜…そういうのは和にでもやってやれって。案外、簡単に受け入れてくれそうじゃん。なっ?」

「ちよつと…こっちに火の粉を飛ばさないでよね」

だが、仕返しとばかり和の抗議なぞ、蛙の面になんとやらな律だ。

ん?

今、『律の”黄金水(!?)”なら、我々の業界ではご褒美ですっ
!!』って言ったの…誰だ?

「それは出来ない相談だよ…」

と、哀しげな表情で首を左右に振る漣に、

「なんで?」

と、疑問形の表情をする律。

漣は、フンス!と何故か年齢の割には無駄に大きい胸をブルンと揺らしながら張り、

「和は憧れで、律は恋愛対象だから」

漣の言い切った台詞に意識を刈り取られかけた律が聞いたのは、残るメンバーのヤンヤヤンヤの拍手喝采だったと記録には残っている。

食事も終わり、アフター・ブランチ・ティータイムに突入した面々。ついでに軽いミーティングも始まったようだ。

「とりあえず、今回のライブの曲目は、どうすんだよ？」

なんか妙にアンニュイ（気だるい）な空気を出してる律がそう切り出した。

そして、その原因を作った漣が、律の美少年的美少女度に磨きをかけてる気だるい雰囲気を見て瞳を輝かせてるのだから、全く始末が悪い。

「とりあえず、最初はQueenの”We Will Rock You”にしようかってって思うんだ」

多分、クイーンという名前を知らなくても、曲のタイトルを知らなくても、誰もが一度は耳にし、聞けば一瞬で「あっ！この曲かあ〜！」と分かる曲：何度もCMやTV番組で使われてるロックの”永遠のスタンダード・ナンバー”の一つだ。

「また定番ね…」

と、呟いたのは和だ。

「でもさ、タイトルを直訳すると”お前を揺さぶってやる！”だよ
ね？ 本当に【これから何かが始まるぞっ！】って気分を盛り上げ
るにはピッタリの曲だと思うんだけどなあ〜」

「あたしや賛成！ なんせRock Youは、ある意味ドラムが
主役な曲だしな〜」

律の言葉に漣がコクコクと頷いた。

「私は唯ちゃんが選んだ曲ならなんでも〜」

「それに、ラストはギターの見せ場があるしね」

そして、ぶれない紬と憂。

「なら、オープニングはこの曲に決まりで良いわね？ じゃあ、次
は？ 定番なら同じQueenの”We Are The Cha
mpions”が続くんだけど…」

「定番じゃつまんないよ！ もっと、わたしたちらしい曲にしよう

」

果たしてどんな選曲をし、紬の両親に聴かせようというのか…？

長い長いプロローグは、ようやく一つの山場を迎えようとしていた

の
だ
っ
た
…

第09話 "ぬるゆりっ!" (後書き)

皆様、ご愛読ありがとうございましたm(____)m

サブタイの秘密は、

【汗でぬるぬるな律に、漣がゆりゆりに迫る】
って意味でしたあゝ
ってワイ!

と、とりあえず攻め漣に受け律が書きたくて、こんな話が生まれて
しまいました(;^_^A

皆様、こんな漣律はいかがでしょう?(汗)

でも、実は展開やネタ的にかなり細も輝いてる話でもあったりして
(笑)

ラストが何となく伏線ですが、次回からはまた音楽ネタ中心の予定
ッス(o^_^')b

ご意見ご感想はいつでも受け付けていますので、宜しく願いしま
すm(____)m

では、また次回お会いできる事を祈りつつ。

第10話 "きよくもく!" (前書き)

皆様、こんにちはー

活動報告の予告通りとはいかず、投稿が午後にずれ込んでしまった
暮灘です (^ ^ ;

今回はサブタイに偽り無しって感じの内容で”説得ミニライブ(笑)
”の曲目を話し合う的エピソードです。

前回とは正反対に再び音楽メインで、憂和紬の裏方的な活躍や隠し
技能(?)なんかも出てきたりする。

それにしても…

書いてる作者が言うのもアレですが、こやつらの趣味って渋すぎ(;

^ ^ ^ A

もしかすると、某女高校教師より渋いのでは無いんじゃないでしょ
うか? (^ ^ ;

第10話 " きよくもく!" ;

「でも、” Rock You ”で盛り上げるなら、次は勢い殺さずに派手なナンバーの方が良いんじゃないか？」

と、ただの” くるゆりっ! (笑) ”ではないことを伺わせる溇の提言に、

「そうね…なら、” Colorado Bulldog ”でも奏ってみる？」

「コロラド・ブルドッグ」

Mr. Bigと言えば初のヒットである” To Be With You ”や” Wild World ”のようなバラード・ナンバーの方が有名で実際に人気があるのだが、アルバムの最初は速いハード・ナンバーが指定席だ。

その中でも、犬の吠え声から始まる” Colorado Bulldog ”は、Mr. Bigの曲の中でも屈指のスピード・ナンバーだった。

「私やお姉ちゃん、和ちゃんと溇さんは音を振り分けられるからいいけど… 紬ちゃんと律さんはどう？ 速いし、難しいナンバーだよ？」

実際、ギター/ベース/ドラムが見事なユニゾンを魅せるこの曲は、何度か和からみが出てきてるベース・ギタリスト、ビリー・シーンにして「凄く難しい。レコーディングの時は、声をかけながら集中

して奏ったよ」と言わしめた程の曲だ。

「私はNo Problemよ　そうね…一つ言えるのは」

紬はニコリと微笑み、

「シーケンサーって便利よね」

「まあ、私もパット・トーパー（Mr. Biggのドラム）の完コピは無理だけどさ、ムギや和が作ったオリアレ版（オリジナル・アレンジ版）の方なら、何とかできるんじゃない？　何度かセッションでも奏ってるしさ」

「なら、そっちの方向で煮詰めていきましょう」

全員が頷く。

確かに、「コロラド・ブルドッグ」は、聴く人が聴けば速くて難しいだけに、逆にその技術の高度さが分かりやすい曲だ。

当たり前だが、バンドというのは何も全てが同じ人数という訳ではない…というか、レギュラー・メンバーが6人というのは、ロックバンドとしてはかなりの大所帯だ。

だからこのメンバーで奏る場合、曲の再編や再構成…つまり、「アレンジ」が必要になってくる。

どうやら、ここに集まる6人の音楽的才能は、幸運か不幸か見事にバラけているようだ。

例を挙げるなら、感覚と感性が最優先で、目と耳から曲を覚えるのが唯と、そして律だ。

この二人は、例えばリハやレコーディングの時に曲調に合わせ、”自分の演奏”に即興でアレンジを加えるのが抜群に上手い。だが、それを音譜に置換する力は無い。

例えば、唯は未だにスコアを読めない。

おそらく唯にとって音楽は、オタマジャクシや記号が五線譜に整列した物ではなく、あくまでイメージの中にある産物なのだった。

そして、既に作詞/作曲に独特の世界観の片鱗を魅せ始めてる漣は、器用貧乏に終わらなければシンガー・ソングライターに慣れるかもしれない。

だが、ことアレンジとなれば、憂と和そして細の持ち味が最大限に発揮されるのだ。

先ずは憂。

彼女は姉ほどの精度は無いが、やはり同じく絶対音感の才覚を持っている。

しかも、唯には有り得ない”記憶した音を譜面に書き記す”能力に恵まれていた。

また、後述する二人と同じく、パソコン：特に音楽系ソフトの使いこなしに平均以上の技量の持ち主だ。

だからこそ、憂の仕事は自然とセッションしたい曲を、ソフトを使い各楽器のパートごとに細分化すると同時に、絶対音感を生かしてコンピュータだけでは不十分な解析と再現（音の過不足など）を補完し、“原書”の譜面を完成させる事にある。いわゆる”譜面起こし”だ。

また、対象曲のギターがソロだった場合、この段階でリードとリズム（あるいは、メインとセカンド）にセクションを出し、ソロとバッキングの編成まで考えてアレンジ出しする事も多い。

次に和。

彼女ほどメンバーそれぞれの技量を、的確に把握してる人間はいない。

憂から添付ファイルで送られた”原書の譜面”を、パソコンを使い各プレイヤーの技量に合わせて修正していくのが彼女の役割だ。

和の感情を抜きにした客観的な判断が、最も必要であり発揮される場所でもある。

また、憂と同じく普通のバンドにはあまり見ない”ツイン・ベース”用の譜面を書き起こしも和の担当だ。

ラストは絢。

彼女の仕事はズバリ「いかに魅力的に”聴こえる”音楽に仕上げるか？」だ。

皆さんは、誰もが知ってる超メジャーなロックバンドのかなりの数が、東西を問わず実はクラシック音楽を代表とする古典音楽畑出身だという事を、ご存知だろうか？

そのメジャーになった理由の一つは、クラシックでしっかりと培われた技術：というのも否定しないが、一番の理由は”表現力”にあると思う。

クラシック音楽の奏者にとって、(譜面の現存する曲は)譜面通りに演奏するのは基礎の話で、それだけじゃコンクールやコンテストで入賞する事は有り得ない。

クラシック奏者に常に要求されるのは”曲の解釈”だ。

つまり、作曲家が何を思いその曲を作ったのか？

それをイメージする事を求められる。

実際、それをより正しくイメージする為に作曲家の生い立ちや生涯、その曲が作られた時の時代背景を調べるなど、クラシック奏者には普通の事だ。

勿論、そこで終わりじゃない。

その”自分で解釈した曲”を、”自分がどう演奏に反映させ、表現するのか？”が、演奏の骨子にあると言っていていいだろう。

多分に語弊はあるが、クラシック奏者で重要なのは、【いかに自分のイメージに近づけ、自分の持ち得る技術でそれを魅力的に再現か？】だ。

そのような土壌で鍛えあげられた紬は、【そのテクニクで表現できる最大限の魅力的な音】を知るエキスパートと言っている。少なくとも、紬の音楽的な素養や知識、努力と研鑽はそれが可能な力を紬に与えていた。

具体的な紬の作業を書くなら、和から送られたデータを元に【難易度を変えずに、より曲として魅力的に聴こえるようアレンジを行う】事に尽きる。

三人の作業を細かくかければキリが無いので割愛するが、まだ正式にはバンドを組んでいない…所詮”セッション・グループに過ぎない”筈の彼女達が、【ミニライブでの選曲に迷う程】のプレイ・レパートリーを誇るの、憂和 紬の黒幕…もとい。裏方的な活躍がある事だけは書いておきたい。

「さすがに二曲連続でハード系だとむぎちゃんのおじさんとおばさん疲れちゃうから、少しペースをおとしたいよねえ〜」

「なら、【ザ・フォー】の”ババ・オライリー”なんかどうかな？あのイントロを聞いているだけで、確実に落ち着けるんじゃないか？」

と、今度は澁からわりと通好みの曲目の提案だ。

「あつ、それ実は私も思った」

と、律も頷いた曲”ババ・オライリー”とは、【原作（TV版）】
つて名前の平行世界にも名が出てきたロックバンド”The Who”
の2ndアルバムに収録されてるナンバーで、非常に長いイントロが印象的だ。

しかも、そのイントロも長いだけでなく非常にユニークな作り方で、
”当時の人間がイメージする、いかにもシンセサイザーらしい電子音”
を出すモーグ・シンセサイザーの単調な自動演奏メロディから始まり、
それに先ずはピアノ、ドラム、ベースと次々に音が重なり、
”人工的で単純なメロディ”が”ロック”へと姿を変えていき、
イントロの終わらせるヴォーカルが加わる事により”ザ・フーの代表
曲の一つ”へと進化するのだ。
そして、最後に花を添えるのがギターという構成だった。

「ババ・オライリー奏るなら、ギターはういに任せてわたしはタン
バリン叩いてようかなあ」

「お姉ちゃん（汗）」

「ライライ」

イントロではなく曲全体で言うなら、ザ・フーの曲の中でベースス
トが輝く有数の曲であり、同時にギタリストの仕事が屈指に少ない
曲でもあった。

ちなみに唯の発言は、とあるババ・オライリーのライブ映像を見る
とよく意味がわかったりする（笑）

「次は？」

「あの〜」

いつの間にかと言うか毎度の事と言うか、司会進行役の和の言葉におずおずと手を上げる憂は、

「なら、次はギターが目立つ曲でいいかな？」

「構わないわよ〜　　というか、憂ちゃんのギターは私も凄く聴きたいしい〜」

と、ニコニコの袖に憂は少し照れ笑いしながら、

「てへへ〜　　ありがとう、紬ちゃん　　えっと…手前味噌だけど、
”ヴァン・ヘイレン”の”ランアラウンドRUNAROUND”奏りたいなあ〜って…」

ヴァン・ヘイレンというと、日本では名曲”JUMP”みたいなポップス調の曲の方が有名で、またリチャード・ギアが出演した同名の映画の主題歌だった”プリティ・ウーマン”のアレンジ・カバーがベストアルバムに入っていたりと、あまりハードなロックバンドの印象は無いかもしれない。

だが、本国アメリカではヴァン・ヘイレンはガチのロックバンドという評価が普通で、またギタリストにして総帥のエドワード・ヴァン・ヘイレンは、間違いなくギターヒーローの一人として認識されている。

そんなヴァン・ヘイレンのガチなロックナンバーの中の一曲が、
ランアラウンド”だ。

倍音を効かせた分厚いリフト、哀愁あるスイート・シャウトから始まるナンバーは、憂の中でも演奏できる全ての曲のベスト5に入るお気に入りだった。

特に気に入ってるのは歌詞で、例えばオープニング部分の一部を抜き出して意識すると…

そうさ

彼女は決まりきったものは好きじゃないんだ

スケジュールに何もかもを押し込めるのも好まない

そんな自由奔放、あるいは自由放埒ほうたいに生きる”彼女”を歌った唄だが、

「まるで、唯のことみたいね」

と、そのままズバリと指摘するのは、もちろん和だ。

まあ、歌に出てくる”彼女”が憂にとって誰なのかを考えれば、誰にも分かる事なのかもしれない（笑）

「じゃあ、そろそろラストナンバーを決めましょうか？」

和はあえて紬のリクエストを聞かない。

何故なら、今回のセッション（ミニ・ライブ）の主旨は、” 紬が外部の学校へ進学できるように両親を演奏で説得すること” だ。

言い方を変えるなら、” 自分達と一緒になら、紬の音は墮落せず、それどころかソリストでは到達できない場所へ至る” を証明する事が重要なのだ。

紬の演奏手腕を誰よりも知ってる筈の琴吹夫妻に、今更紬の腕前を披露する必要はない。

そうではなく、自分達がいかに紬に相応しい仲間なのか、そして紬が” バンドの一員” として如何に輝けるかがテーマ…それが、唯達全員が出した結論だった。

「という訳で唯、何が奏りたいんだ？」

と、唐突に視界を唯に向ける律。

「なしてわたしに振るのかなっ!？」

すると今度は和が呆れたように、

「いや、だって唯が言い出しっぺでしょ？」

「唯ちゃん」

「お姉ちゃん」

期待に満ちた紬と憂の視線に、コクコクと頷く澁。

「うーんとうーんと…」

腕を組み、彼女なりに必死に考えて出した結論は…

「もしかしたら、わたしらしくないって思うかもしれないけど…」

唯が5人の顔を見回しながら言ったのは…

「Don't Cry」、奏りたいなあ……」

”Don't Cry”…

それは、切なく哀しく歌い上げられるガンズ・アンド・ローゼズ屈指のバラード・ナンバーのタイトルだった…

第10話 " きよくもく!" (後書き)

皆様、ご愛読ありがとうございましたm()m

実は、唯の幼馴染み+妹の裏方的活躍や、メンバーの音楽的趣味が垣間見えるエピソードでしたが、如何だったでしょうか？

纏めると…

- (1) ウィー・ウィル・ロック・ユ一
- (2) コロラド・ブルドッグ
- (3) ババ・オライリー
- (4) ランアラウンド
- (5) ドント・クライ

というかなり変則的な演目ですが、コピバンでライブとか奏った事のある方でしたら、何となくライブ・コンセプトというか”流れ”みたいな物が見えたりして(; ^ | ^ A

多分、大半の皆様には聞き覚えのないタイトルばかりかもしれませんが、今はネットとかに普通に動画が落ちてる時代、興味を持って見たり聞いたりして貰えれば、作者としても嬉しい限りッス

では、また次回お会いしましょう(o^_^)(b

ご意見ご感想は、作者のモチベーションの源
いつでもお待ちしております(――)(

第11話 "ペーすっ!" (前書き)

皆様、こんばんわー

投稿が遅れてすみませんm(____)m

ようやく投稿できてホッとしてる暮灘です(^^;;

さてさて、今回のエピソードは...

基本的に日常エピソードっぽい合宿風景なんですが、タイトルの通り今回のヒロインはベースリストとベース・ギタリストの二人です

と、とりあえず、漣ちゃんのキャラが崩壊しまくってるような(汗)

それと、流流雨さんが書いてくださったレビューから引用させてもらうと、ベースの”チュートリアル的なエピソード”になっていきます(;;^_^A

m
こんな感じのエピソードですが、どうぞお楽しみくださいm(____)

第11話 "ペーすっ!" ;

さてさて、ミーティングも終わり、一同は再びスタジオへ。

なんせライブは五日後の合宿最終日午後。

残された時間は、あまりない。

それに何かと忙しい琴吹夫妻の時間的事情を考えると、やり直しのきかない一発勝負だ。

練習も自然に熱を帯びてくる。

余談ながら平行世界では”走り気味”と言われ続けた律のドラムだが、このメンバーだと実にしっくりハマる。

何故なら、彼女達が弾いてるのは純然たるロックだ。

ビート&リズムは速くて上等!

走り過ぎという言葉も、”ここ”では心地好い”疾走感”^{ドライブ}となる。

ロックやメタルは、それこそ疾ってナンボ!というのは、あながち間違いないだろう。

どうでもいいが、平行世界の黒猫(小)がこの光景を見たら、間違はなく自分の目と頭に異常がないか心配すること請け合いだろう。

笑)

「それにしてもさあ…」

「何？ 律」

繁々と和のベースをガン見していた律は、

「メガツさ赤いよなあ…」

「今更どうしたの？ 単に赤色が好きなだけよ」

第7話で少し触れたが、和はメガネやピアスに限らず愛用のベース【TBWU（YAMAHAの”Attitude LTD2”）】の色、ラヴァレッド（熔岩の赤）に始まり、色で選んだ疑いのあるZoom社のマルチエフェクターも当然のように赤、シールドに至っては手頃な値段で満足のいく性能の物がなく、わざわざベルデン社の#8412というケーブルの赤を買ってきて自作する始末だ。

なんかこう、趣味とか嗜好というより思想じみたコダワリを感じる。

さすがにアンプやキャビネ（スピーカー・キャビネット）迄は手を回していないが、その内『確かAshdown社から赤いヘッドアンプ出てたわよね…』とか、『キャビネぐらいだったら、材料揃えば自作できるかしら…？』とか思ってるのはここだけの話。

「もしかして、和って某”彗星”とか好きなのか？」

元々はファンクが出所の奏法で、諸説はあるがプレイヤーとしては”ラリー・グラハム”がオリジンと言われる場合が多い。少なくともスラップ奏法を有名にしたのは、彼だろう。

もつとも今は、ロックやメタルに限らず、様々なジャンルのベーシストが使うテクニクだ。

ラリー・グラハム以外に有名と言え、”ベースの神様”の一人、”マーカス・ミラー”が知られている。

蛇足ながらマーカス・ミラーの愛機は、フェンダー社の”ジャズ・ベース”が有名だ。

「えっ？ 和ってスラップもやるうとしてるのか？」

と、少し焦る滯に、

「まあ、そうね。更なるスピードの高みを目指すなら、習得しておいて損は無いテクだし……」

フツとどこかニヒルさを感じる笑みを浮かべ、

「そうね……さしずめ、目指せ”マーク・キング”ってどこかしら？」

マーク・キング

【レベル42】というバンドのリーダー&ベースリストで、

”マシンガン・スラップ”と俗称される超高速スラップ奏法が代名詞。

「あう…和がスラップを覚えたら、私の特徴って一体…？」

「あのね…私と溲じゃ全くプレイ・スタイルが違うでしょ？ レフティってだけで十分にプレイスタイル目立つし、それに…」

和は溲の手を見つつ、

「気が付いたら”ロータリー・サムピング”が自然に出来た溲も、私に言わせれば十分に変態だから」

ロータリー・サムピング

別名”ロータリー奏法”。

スラップ奏法のサム・ピッキング方法の一つで、上下に動かすのが基本の親指を、根本からグルグル回転させて弦を弾く方法。普通は自然に出来ないとかメリットノデメリット言う前に、演奏していると指の動きが凄く目立ちます（笑）

目標があるからか、はたまたそれぞれ奏りたい曲があるせいか、基本的に演奏に対して真摯な面々だが…そこはそれ。

さすがに1日中スタジオに籠りきりでは、さすがに精神的にも肉体的にもあまり宜しくはない。

しかも、目の前が海フライング・ビーチとなれば…

「海だぁーっ」

と、昼食後のリフレッシュ・タイム

真っ先に飛び出したのは、言うまでもなく唯&律。

平行世界なら黒猫（大：特に胸部パーツとか…）が文句を言うシーンだが、ここまで練習すれば流石に何も出ない筈…

「律の水着…律のビキニ…薄い布地の向こう側…生の律のちっこくて平たい肢体………ここは天国ですかぁーっ!？」

訂正。

それどころじゃなかったようだ（汗）

どうでもいいけど誰か鼻血止めてやれって…

一頻り水遊びも終え、ステージは真っ白な砂浜での日焼け休憩に移行したようだ。

「唯ちゃん」

紬は正座すると、ポンポンと自分のプニツとした太ももをタップ。

「ほえ？ いいの？ 重くない？」

「いいの　ここは唯ちゃんの指定席だし」

ニコニコ微笑む紬に、唯は「わーい」とコロんと転がり頭を乗っけて膝枕状態

そしてすぐにスウ〜っと小さな寝息をたて始めた。

「クスクス　唯ちゃんたらもう寝ちゃった」

そのあどけない寝顔を世にも幸せそうな顔で見る紬に、

「まったく。本当に相変わらず子供並の寝つきの良さね」

少し呆れ気味の和に、憂はクスリと笑って、

「それだけ紬ちゃんの膝枕が、お姉ちゃんにとって”安心できる場所”ってことなんだよ　きつとね」

「そうかな？」

紬はそつと唯の髪を撫でながら、

「だったら嬉しいな…」

と、小さく呟いた。

では一方、律溼はと言えば…

「りつうく サンオイル塗ってあげるよお」

標準より明らかに大きな手の平にヌラヌラと光るサンオイルをTAPPULEI滴らせ、ジリジリと律に迫る溼がいたりして（汗）

「ちょっと待って溼っ！ 手付きが妙に妖しく見えるのは、私の気のせいかつ！？」

「気のせい気のせい」

「嘘つけっ！！」

と叫びながらバツと飛び退くように溼から距離をとるりつたん隊長（笑）

「まんべんなく塗るから、できれば水着も脱いで欲しいな」

「絶対に断る！」

「大丈夫 ここはムギのプライベート・ビーチだから、私達以外に誰も見てないし」

「溼に見られる時点で、メチャクチャ身の危険を感じるんだけどっ！？」

「…雰囲気台無しね。色々と」

「うっ…確かに否定できないかも」

今にも溜め息突きそうな和と、誤魔化し笑い気味の憂。

「まあまあ」

対してむしろ上機嫌な紬だった。

リフレッシュも終わり、再び時は移って夕食準備の頃。

メニューは定番のテラスでバーベキューらしく、本人の「面白そう」
「という強い志願でバーベキュー・グリルで火起こし担当の唯と、

食器と飲み物の準備をしてる紬。

グリルの横に陣取り、姉が火傷しないか心配そうに素材の下準備をしてる憂と律の料理上手のツートップ。

そして、和と漣のコンビは…

「こ、こんなに大きさが…」

漣が愕然としてる理由はと言えば、握りあがったオニギリの大きさだ。

平たく言えば、オニギリのサイズの違いは、改めて思い知らされた手の大きさと言おうか（笑）

当然、大きいのは漣の握った方だ。

「いいじゃない。ギター弾きやベース弾きにとって、手が大きいのは直結で大きな武器よ？」

文学的表現をするなら、泣き濡れてジッと手を見ていた漣に和はそう声をかけた。

「むしろ、フィンガー・ピッキング（ピックを使わず指で直に弾く事）で奏る人間にとって、大きさに比例した財産って言っても間違いじゃないわ」

と、そつと漣の手の平を包み…

「本当、これだけの大きさがあれば、5弦ベースだろうと6弦ベースだろうと思うままよね」

「和……」

「まったく…いつか6弦ベースをフィンガー・ピッキングで弾きこなしたいからって、人が毎日必死でストレッチして少しでも指を伸ばそうとしてるっていうのに……」

「の、和さん…?」

和、目は笑ってない（笑）

ベースというのはギターに比べて全体的にかなり大きな楽器で、ネックも太い…というか幅広い。

基本の4弦ですらそうなのに、6弦ともなれば尚更だ。

そして、溼ほど明確な標準とのサイズ差がある訳じゃないが、和の手は標準より小さい。
というか、指がやや短い…

「ホント、羨ましいわね…!」

”ぎゅう〜っ!”

「痛い痛い! 和、潰れる潰れるう〜っ!」

真鍋和

得意技は、スリー・フィンガー・ピッキングを駆使したベースの速

弾きと琉球唐手。

彼女の握力は、kg換算にするなら自分の体重を軽々超える。ちなみにパンチ力は、体重の倍以上に達するらしい。

本日の教訓

” 隣の芝生は青い ”

” 価値観は人それぞれ ”

” 持たざる者は持つ者が妬ましい ”

の3本でお送りしました

夕飯も終わり、後は寝るまでひたすら選んだ曲のセッション&am
p・プラクティス。

「1・2!」

律の掛け声と同時に”コロラド・ブルドッグ”の演奏が始まる。

いかに第10話で触れた通り憂 和 絢のラインで演奏しやすいアレンジ・バージョンになつてるとはいえ、それでも速く難しい曲であることは変わらない。

実は、未だにバンドとして活動していない彼女達は、曲に応じてヴォーカルを変えるという事をしている。

基本は、その曲を選んだメンバーがメイン・ヴォーカルを担当するって具合だ。

例えば、今演奏している”コロラド・ブルドッグ”でメイン・ヴォーカルを務めてるのは、澪とポジションを入れ換え、唯と平行に並ぶ最前列に来てる和だ。

これだと律と絢は歌えないが、澪は律のリクエストと常に一致(?)するから今のところ問題ないし、キーボード2台を駆使し、更にシヨルキー(シヨルダー・キーボード:ギターやベースのように肩掛けで使うミニ・キーボード)も練習中なので、現在ははまだヴォーカルを辞退していた。

そんな理由で絢のリクエストは、唯が歌うのがお約束になっていた。

このような理由から、二人分のヴォーカルを担当する唯と澪が歌う機会が多い故に最前列、次列が時折ポジションを入れ替える和と憂、最後列が楽器の大きさから動けない絢と律...というのが定位置になっていた。

ついでに書いておくと、唯は原作（TV版）と呼ばれる平行世界の彼女より、かなり出せる声域が広い。

具体的に言えば誰もが知ってる唯の声から、いわゆる”あいなま声”…中の人的（笑）な豊崎愛生さんが”春風”や”Love Your Life”で魅せた【少し掠れたハスキーなウーマン・ボイス】まで出せるのだ。

だからこそアレンジを加えれば、大抵のロックには対応できるのだった。

そして、こんな日々が流れ…

6人の少女達の正念場がやってくる！！

第11話 "ベースっ!" (後書き)

皆様、ご愛読ありがとうございましたm()m

そして、投稿が遅れてしまいすみませんでした()

今回は、ベース二人がメインのお話で、本番迄の1クッションと後々HITになる下準備(笑)的な伏線が色々(;^_^A

さて、合宿編もいよいよ次回で最後。

果たして、唯達はどんな演奏を琴吹夫妻に魅せるのか?

それでは次回、またお会いしましょう()

ご意見ご感想は、作者の心の栄養ドリンク

いつでもお待ちしております()

第12話 "いもじっ!" (前書き)

皆様、こんにちわー

なんか最近、執筆ペースが減速気味で焦りを感じる暮灘です(^^;

今回は、サブタイから分かるように憂ちゃんメインの話です(;;^

|^A

というか原則、彼女のモノローグ形式で綴られています。

本当なら、この回で”説得ライブ”の予定だったんですが、ふと読み返してみると...

「あれ？ 憂ちゃんが思ったよりしゃべってない...?」

憂ちゃんは、和とならんで”本来のHTTにはいないキャラ”で、原作との差別化を司るキーパーソン...

こりゃいかん!

って事で急遽、唯との【割と物語の根幹に関わる過去話】を交えて、憂ちゃんメインのエピソードを1本書き下ろしてみました。

ただ、憂ちゃんて暮灘的にはキーパーソンであると同時に、”原作との変更点が最も少ないキャラ”の一人なもんで、書くのが難しい(^^;;)

ヒロインの一人として、あるいは一人のギタリストとして上手くキ
ヤラが立ってるか心配ですが、楽しんで戴けたら幸いですm(_____)

第12話 "いもじっ!"

えっ？

私にもお姉ちゃんとの思い出を聞くんですか？

ものすごく長くなっちゃいますよ？

私にとっては、甲乙なんか付けられない…

どれも大切な…大切な思い出ばかりですから

ならば、お姉ちゃんと私が音楽始めた切っ掛けを話せ、ですか？

ん…じゃあ、ギター”ヘレン”との出会いとかどうでしょう？

あつ、”ヘレン”っていうのは私が使ってるEVHのギター、
クチェリー色の”Wolf gang”ヴォルフガングのペットネームです

この子、私が参考にして目標の”エドワード・ヴァン・ヘイレン”
のシグネイチャー・モデルで、そしてヘイレンを英語読みすると”
ヘレン”って女の子の名前っぽくなるんです。
ペットネームは、そこから取りました

お姉ちゃんも可愛いって言ってくれたし

あつ、話がずれちゃいましたね？

実はですね…

ギー太もヘレンもある日、お父さんがお土産にくれたんですよ。

あれはお姉ちゃんが中学に入ったばかりで、ぶかぶかのセーラー服が可愛かったなあ〜 って頃だったかな？

何かお父さんがお友達から買い取った品々らしくて、ちょっとした大人の人生劇場”があったみたいですよ？

【とある妹シズコの思い出日記】

より抜粋。一部改編

憂 side -

「お姉ちゃん、ギー太のセッティング出し、終わったみたいだね？」
私がそう問い掛けると、お姉ちゃんは花が綻ぶみたいにフワツとした笑顔で、

「うん この間のマキちゃんとのライブの時に出したセッティングで、ピタッって決まったんだよ」

元々、ペグはお姉ちゃんは本格的に弾き出してすぐにシユパーゼル社の”トリムロック”に取り換えてたけど、ちよっと前にブリッジとストップ・テイルピースも、オリジナルのABR-1と亜鉛製のテイルピースからフリーダム社のチタン・サドルと組み合わせた”ロックابل・ブリッジ”とアルミ製テイルピース乗せ換えたんだ。

でも、ついこの間まで『これっ！』ってセッティングが決まっってなかったみたいだけど…

「また”自分の音”が見つかって良かったね お姉ちゃん」

「ありがとう、うい」

一見するとロックとは無縁に見えるふわふわした柔らかい雰囲気で、”のんびり妖精”なんてピッタリなあだ名で律さんに呼ばれてるお姉ちゃんだけど、実は驚くほど”音”には厳しくて、妥協しないんだよ？

例えば、お姉ちゃんのパートナーのギター、ギブソン・カスタムシヨップ謹製の【Inspired By Slash”Appetit For Distraction” Les Paul VOS (AFDレスポール)】って実は定価が無くて、お店ごととか個体ごとに値段がついてるって感じなの。

分かりやすい言葉で言えば…”時価”って事になるのかな？

それで、ギー太は安い時や所でも、50〜60万円ぐらい、高い物だと80万円以上するんだよ？

（でも、お姉ちゃんにとってそれはなんの意味も無くて…）

普通なら50万円もするギターを改造したりって、私達みたいな中学生どころか大人でも簡単には決断できない（特に売る事とか考えちゃうと）と思うんだ。
でも、

（お姉ちゃんは躊躇いなくやるんだよね）

きつとだけど、お姉ちゃんは”Slash”が大好きで、お手本にしているかもしれないけど…

（決して、Slashになりたい訳じゃない…）

もっと別の…

そう、自分とギー太で出せる”自分だけの音”パーソナル・サウンドを探してる気がするの。

少しだけ昔話に付き合っつて貰えるかな？

あのね、ギー太とヘレンに出会ってからすぐにこんな事があったんだよ。

『ねえ、のどかちゃん、うい』

『なに?』

『どうしたの?』

『ギー太って、どうやって音が出るんだろ...?』

って、いきなりギー太を分解しようとしたお姉ちゃんを、和ちゃんと慌てて止めたのも今となってはいい思い出です

その後、図書館でエレキギターやベース関係の本を借りてきたり、インターネットで調べたりして三人で一緒に勉強して…

(中古ギターやベースをネットオークションで買ったりもしたっけ…)

インターネットのオークションだと、『粗大ゴミで出すとお金かかるから、1円でも値段がついた方がマシ』って感じで出品されてるギターやベースはいっぱいあって、小学生や中学生のお小遣いでも無理なく買えるぐらいの値段しか付かない物も多くあるの。

大抵そういうのって、どこか壊れて音が出ない”ジャンク品”だったりするから、

(3本のギターの部品を組み合わせで、1本のギターを作ったりとかよくやったなあ…)

その頃、私達は色々と学んだんだと思う。

それこそ、ギターやベースの基本的な構造から始まって、部品の良し悪しや部品の組み合わせで変わる音の変化。
ハムバッカーとシングルのピックアップの性質や音の差違とか、色んなトレモロ・ブリッジを試したり…

（語りつくせないくらい思い出がいっぱいだなあ…）

中の配線で使うハンダやリード線、コンデンサを変えるだけでギターやベース音が変わる事に気付いたり、テスターの使い方覚えたり、三人でハンダゴテはホーザンと白光のどっちがいいか悩んで両方買って試してみたり、何故か和ちゃんが…

『回転系電動工具は”マキタ”の一択よ』

って猛烈プッシュして、私もお姉ちゃんも電動ドライバーが和ちゃんとお揃いになったり…

だから、お姉ちゃんや私、和ちゃんって自分達でギターやベースのメンテやチューニング、ある程度カスタムとかまでなら出来るんだよ

（我ながら、中学生の女の子の思い出としては、コア過ぎだと思っけど…）

でも、楽しかったなあ…
例えようのないくらい。

きつとそれは、三人であんなに一つの事に夢中になった事なんて、
今まで無かったからだと思っし、何より…

（お姉ちゃんが、あんなに生き生きしてたのって初めてだったのか
も…）

いつも優しいお姉ちゃん…

いつもふわふわで暖かいお姉ちゃん…

（私がこの小さな世界で一番大好きなお姉ちゃん…）

でも、時折『わたしは空っぽだから、いつもボクツとしてるんだよ』
って笑ってた。

いつもと同じ笑顔の筈なのに…

（私には、なんだかそれが寂しく見えて…）

私は、お姉ちゃんがお姉ちゃんできてくれるだけで十分に幸せだっ
ただ、

（お姉ちゃんは違ってたのかも…）

意味のないことだってわかってるけど、もしかしたら私はギー太に
嫉妬してるのかもしれない。

だって、空っぽだって自分で思ってたお姉ちゃんを満たしたのは、

(あるいは、空っぽじゃないって気付かせてくれたのって…)

ずっとそばにいた私でも和ちゃんでもなくて、

(間違いなくギター太だから…)

「ういは、相変わらずピッキング・ハーモニクスやタッチ・ハーモニクスが正確で綺麗だね」

へレンと軽く音出しをしてお姉ちゃんはニコニコしながら、私のオルタネイト・ピッキングのテクを誉めてくれた。

「そう？　ありがとう、お姉ちゃん」

あつ、ピッキング・ハーモニクスとタッチ・ハーモニクスって言うのはね、ピッキング・ハーモニクスが弾く時にピックを握る手の親指で軽く弦を触れて倍音を出すテクで、タッチ・ハーモニクスはピックを挟んでる指以外…例えば普通は中指、ハミングバード奏法の時なんかは人差し指で同じく弦に軽く触れ、倍音を出すテクなんだよ。

どっちもオルタネイト・ピッキングで倍音を出す方法だから、タッ

ピングから派生したテクニクって言えるかもしれないね？

私の弾き方は、ミュートさせないオルタネイト・ピッキングのアルペジオ奏法が基本で、速弾きの時もお姉ちゃんみたいにスウィープ奏法にシフトするんじゃないかって、ストリング・スキッピングを多用するいわゆる”高速アルペジオ”とハミングバード奏法を組み合わせで対応してるの。

私がスウィープ奏法があまり得意じゃないって事もあるんだけど、

(オルタネイト・ピッキングのアルペジオ奏法の方が、ずっとリズムキープしやすいから…)

お姉ちゃんがギター太に取られた…なんてバカな事を考えてた時期も私にもあった。

で、でもそれぐらいお姉ちゃんはギター太に首ったけだったんだよ？それは今も変わらないけどね。

(最初は、凄く寂しかったなあ…)

比喻とかじゃなくて、お姉ちゃんは寝ても覚めてもギター太一色で、

(新しい弾き方を覚えたりやエフェクターを繋いで、新しい音を発見する度にますますギター太にのめり込んで…)

もう、私の事を見てくれない、振り向いてもらえないかも…なんて悩んだり。

(でも、その時に思い出したんだよね)

私にもギターが…”ヘレン”がいるっていうことに。

だから、私はギターを始めたんだ。

お姉ちゃんともう一度同じ場所に立って、同じ目線で見てもらいたいから…

(でも、すぐに壁に当たっちゃったんだよね…)

そう、お姉ちゃんは凄い人だって事は前から知っていたつもりだけど、

(こと音楽に関しては、)

正真正銘の”天才”だって思い知らされた…

お姉ちゃんの本当の凄さをわかってる人って、私や和ちゃん、紬ちゃんを除けば殆どいないかもしれない。

私もお姉ちゃんと同じく”飲み込みが速い”って言われるし、『なんでもできて凄い』って言われるけど、決して”万能の天才”なんかじゃない。

要領が良いだけで、基本的には”器用貧乏”なだけだなあ〜って。
お姉ちゃんを見てると、特にそう思うんだ。

お姉ちゃんは一度集中さえしてしまえば、驚異の集中力と持続時間を発揮して何事もとんでもないところまでいくんだけど、音楽じゃあそれだけじゃない。

私にも絶対音感はあるけど、お姉ちゃんとはまるっきり精度が違うんだよ。

例えば、私がどんなに頑張っても聞き分けられるのは1/8音までだったりするし。

どちらかと言えば、ある程度の精度がある絶対拍やそれを譜面や記号、数字に置き換えられるっていう事に意味があるんじゃないかな？

でも、お姉ちゃんは根本から違う。

何かの映画の台詞じゃないけど、

『頭で考えるんじゃない、心で感じるんだ』

を、まさに地で行ってるって感じ。

そうだなあ…

猫ってゆっくり歩く時は左右の足を交互に出すけど、速く走るときは左右の足を揃え1セットにして前後の足を交互に動かしてスピードを出すよね？

お姉ちゃんがアルペジオ奏法からスウィープ奏法に切り替える時って、全く同じなんだよ。

一定のスピード以上の弾き方になると、無意識に切り替わってるみたい。

全ての音をイメージで心に焼き付けて、それを何度再生しても色褪せない…

だから、確かにお姉ちゃんは器用じゃないかもしれないけど、とことん応用が効くんだよ？

多彩なチョーキングなんて、その典型なの。

(同じ土俵で勝負できないから…)

ギタリストとして同じ方向になれないって分かったから、

(違う方向から登って同じ高さに行こうとしてるんだよ…！)

スピードはスウィープ奏法は潔く切り捨てて、アルペジオ奏法とストリング・スキッピング、ハミングバード奏法を磨いて稼ぐ。
後は…

(お姉ちゃんが出来ない事をやる！)

求めたのは、“プレイの精度”。
弾きの正確さだよ。

精密機械のように、電波時計のように正確に音を弦で刻む…

『窮屈なプレイ』って言われても構わない。

うっん、むしろそう言われるレベルまで自分の演奏を高めてみたい！
だって、

（それが私の決めたプレイスタイルだから…！）

同じステージで、同じ高さで正確に音を刻んで、お姉ちゃんにもっともっともっと輝いてもらう！

それが、私の今の目標なんだよ

それは、”説得ライブ”を翌日に控えた、仲の良い姉妹のほんの小
さなエピソード…

第12話 "いもつとつ!" (後書き)

皆様、ご愛読ありがとうございましたm(____)m

憂ちゃんがメイン・ヒロインで、唯憂和の三人が異常にギターやベースに詳しい理由がわかる過去エピソードを交えてみました、如何だったでしょうか?(;^|^A

お姉ちゃん至上主義(笑)なのは同じだけど、実はかなり原作と違う憂の少しシリアスな心理:~みたいな物が描けていたらと思います、が、正直、かなり心配です(^^^;

あと、唯の規格外なギター・モンスターっぷりとか(笑)

あとがきを読んで戴いてる読者様が少ない事を見越しつつ(笑)、少し裏話と先の展開を書いてしまうと、今の内にしか憂ちゃんを掘り下げる時間がないつてのが本音です(^|^;)

なんせ、原作とリンクする”高校編”では、少なくとも最初の1年間は合宿と”学祭以外のライヴ”でしか目立つ機会が無いかもしれないし、憂ちゃんが高校デビューで軽音部に正式参戦する時には、強力なライバル・キャラ(笑)がいるでしょうし(;^|^A

なにはともあれ、いよいよ合宿編はラスト・スパート

楽しみにしていただけたら嬉しいッス(o^_^)b

ご意見ご感想は物語の推進剤

いつでもお待ちしております(――)

第13話 "りはーさる!" (前書き)

皆様、こんにちはー

最近、投稿ペースが二日に一度に下がり、どうしたもんかと思ってる暮灘です(^^; ;

せめて、高校編スタートまではペースは落とさたくないんですが(泣)

またまた、前回の予告から外れて、サブタイ通りリハーサルの話：というか、ぶっちゃけてしまうと、今まで解説を先伸ばしにしてた律澪紬の”エモノ”もしくは”相棒”がメインのお話です。

いや、実はライブのシーンを書こうとしたら、律と紬のエモノをまだ本決めてない(澪は決まっていた)事を思い出し、その途端に音がイメージできなくなってしまって(汗)

読者の皆様にはどうでもいいことかもしれませんが、暮灘は不器用な書き手でして、例えば”すらっしゅ!”みたいな音楽物を書く場合、使う楽器とプレイヤーの特徴をきちんと明記しないと、書いてるうちに【この世界の彼女達の音】を見失ってしまうんですね(^^ ;)

実際、書きながら何度も複数の演奏動画やプロモ、デモ動画を見ながら書いていたりします(^^ ; ;

もしかすると楽器に興味の無い方には楽しめないエピソードかもしれませんが、これもまた”すらっしゅ！”だと思って貰えれば幸いです（――）

それにしても、書いてる内にどんどんりっちゃんが格好よくなったような…？（…ハ―ハ A

第13話 "りはーる!"、

そして、いよいよ本番…” 説得ライブ” の当日。

律は、今年の1月にお年玉全てはたいて買ったばかりのまだ真新しい念願のツインペダル、DW社の” 5002AD3” を入念にセッティングしていた。

もし、あなたがドラマーだったら「えっ!？」って思つかもしれない。

なんせ、DW5002AD3と言えば、標準小売価格¥78.500也とかなり高額なペダルで、中学生がお年玉かき集めてもおいそれと買える代物じゃない。

だが、そこはそれ。

” 情報屋真鍋（笑）” の活躍により、平行輸入品だが半額以下の¥32.800で売ってる店を発見、無事購入とあいなった。

それどころか最近、少し重さを感じていたビーター（実際にバスタラムを叩くパーツ）を同じDW社の” ハードコア・ビーター” に交換し、只でさえ速いツインペダルの更なるスピード・アップを試みていた。

ちなみに律はどうやら、DWユーザーの間では” 手強く難関（笑）

”とされてるハードケースの使用を諦め、軽いクッション入りのソフトケースに入れて携行してるようだ。

まさに円高万歳のエピソードだが、律の装備はステイックを除けば、そういう品が多い。

例えば、彼女が愛してやまないグラデーション・カラーの”オレンジスパークリング・フェイド”に塗られたドラムは、ドイツの名門SONOR社のメイプル製フルドラム・セット”FORCE3007ST1”だ。

定価は¥201・600だが、円高還元&amp;展示処分品を¥99・800で購入。

この値段、平行世界の彼女の愛機、YAMAHAの”Hip Gig”の中古価格よりずっと安い。

シンバルは、同じ^{ジルジャン}Zildjianの”ZHTロックセット”。

これも半額とは言わないまでも¥75・600 ¥42・800と、こちらもかなり割安で購入している。

実は律、中2の時にステイック購入のすぐ後、勢い任せで定期預金の解約+親からの借金(出世払い)で、上記のドラム・セットとシンバルを購入してしまった。

後先考えるよりまずは行動(そして勢い余ってオーバーラン)の律らしいエピソードなのだが、買ったは良いが置き場と何より練習場に困ってしまったのだ。

そんな時に声をかけてきたのが、唯達から紹介された紬だった。

そう、彼女は屋敷にある自分専用のスタジオを置き場 & amp; 練習場に提供すると言い出したのだ。

何気に放課後に6人が紬の屋敷に集まりセッションするようになった切っ掛けは、律のオーバーランだったりする（笑）

それにしても、妙に買い物運があるというのは、誰かを思い出さないだろうか？

そう、唯だ。

この二人が似ているのは、何も買い物運に限った話じゃない。

実は、音楽的センスや感性が最も近いのは唯と律かもしれないのだ。

二人共にフィーリング重視で、何よりも自分の感覚と感性を優先し、それを信じて演奏できる天才肌のプレイヤーだ。

そして、唯がそうであるように律もまた音に対して繊細だった。

前に律がベルトに吊るしたホルスターに長短2種類2対4本のステイックを入れてると書いた事を、皆さんは覚えているだろうか？

具体的に言うなら、短い方は Pearl社のヒッコーリー製でサイズが13 x 393（直径13mm、長さ393mm）の物で、サックスの神様”ソニー・ロリンス”等と共演し凄腕を披露しながらも、1999年に早すぎる死を迎えた日本のドラマー”日野元彦”が生

前に愛用してたタイプ（厳密にはシグネイチャー・モデルという訳ではない）。

もう1対は、ヒッコリーより重いバーチ材で作られた14・8×419のロングサイズのスティック、ジルジャンが出したる”マイク・マンジーニ”のシグネイチャー・モデルだ。

マイク・マンジーニの名を聞いてピンとくる人は少ないと思うが、かつて5つのドラム最速ワールド・レコードホルダー（世界記録保持者）で、かつてはギターの鬼才”スティーブ・ヴァイ”と共に活動し、今は神童”ジョン・ペトルーシ”率いる超絶技巧派集団”ドリーム・シアター”のドラマー…と書けば、マイク・マンジーニのモンスターっぷりは伝わるだろうか？

もっとも律がこの2種のスティックを選んだのは、使っていた（いる）プレイヤーが好きというより、純粹に自分の手にしっくりと馴染み、望む音が出たからであるのだが。

『長さで4cm弱、直径で2mm弱しか変わらない”木の棒”を2種類も持つ必要があるのか？』

この問いをドラマーにしたなら、おそらくこんな返事が返ってくるのではないだろうか？

曰く、

『別の【楽器】だよ、それはさ』

太さの違いはグリップとコントロールに関わり、長さの違いは遠心

力（同じ角速度なら長い方が先端のスピードは速くなる）や重心の違いによるアタックの差を生む。

素材が違えば更に重さや堅さが変わり、より音は質的な変化を起す。

語弊はあるが、一般的に短く細く軽いスティックは操作性が高い…つまり振り回しやすく、繊細で素早いコントロールが可能で、逆に長く太く重いスティックは力強さや音量を出したいパワープレイに向いている。

スティックの違いは、素人でもよく聞けば分かるぐらい、”明確な音の差”を作るのだ。

そして、律は当たり前のように曲によって長短の2種類を使い分ける。

ギターが二本の腕とピックで無限の音色を奏でると同じく、ドラムもまた、ペダルと対のスティックの組み合わせ極彩色のリズム&mp;ビートを打ち鳴らすのだ！

律の”エモノ”の話が出たついでに、残る漣と紬の楽器も簡単にではあるが記しておこう。

漣のベースは、第8話”げきとうっ！”において【ジャズベ（ジャズベースの略）・タイプ】と表記した事に気付かれただろうか？

こう書く以上は、Fender USA or Japanの製造する”純正”のジャズベじゃない。

形状や3TS（3トーン・サンバースト）のカラーリングこそ、平
行世界の彼女が使うフェンダー・ジャパン謹製ジャズベのレフティ・
モデル”JB62/LH”に酷似しているが…

その正体は、日本のフジゲン（富士弦）社が製造するジャズベ・レ
フティ・モデルのクローン”NCJB-10R/AL/LH”だ。

フジゲンという名は日本では知る人ぞ知るギター・ブランドだが、
海外では”FGN”ブランドとして、精度の高い製品を作るメジャ
ーなギター・メーカーとして知られている。

この時点で中々にマニアックな選択だが、更に溻のNCJB-10
Rは外見ではわかりにくいのが、ピックアップ/ブリッジ/内部の電
装品周り等が、レフティモデル設定のない上位モデルNCJB-2
0R準拠にアップグレードされていて、初心者が使うには中々贅沢
なモデルだった。

これはフジゲンが直営している”カスタムハウス”のアップグレー
ド・キットを組み込んだのだが…

当然、まだベースを初めて1年の溻がカスタムなんて方面に頭が向
かう筈もない。

その裏には、赤好きなガネっ娘がいかにも暗躍してそうだが…それ
はいつか幕間にでも語られるだろう。

多分だが。

そして、まだエフェクターがなんたるかわかってない溻に、今年の
正月に和が勧めたのは日本のRoland社がBOSSブランドで

出してる、とりあえず色々なエフェクトが簡単な操作で試せるギター用マルチエフェクター”ME50B”を使用。
ヘッドアンプは、とりあえず扱いやすく素直な特性で、ついでに円高還元セールで約半値になったフェンダーの”ランブル350ヘッド”を、シールドはかつては高いシールドの代名詞で最近はやい平行輸入品が出回り値段がこなれてきた”モンスター・ケーブル”をそれぞれ愛用してるようだ。

それにしても、シールドの選択とかを見てると、漣は割と堅実な演奏にトツポい音を組み合わせたベアシストになるのかもしれない(汗)

そしてラストを飾るは、今回はある意味お姫様のな立ち位置の絢だ。彼女の前にデンと置かれた二段構えのキーボードラックに陣取ってるのは、下段が妙に分厚さと迫力を醸し出す白いキーボードで、上段がビンテージ感溢れたスタイリッシュな赤いキーボードだ。

紅白のキーボードとは何ともおめでたさを感じる組み合わせだが、まさか”琴吹”読みが同じ”寿”に通じ、実はそれは中の人の名字と同じに引掛かけて…なんてことはないだろう…ないよね？

順を追って見ていけば、白いキーボードは日本のKORG社謹製73鍵盤キーボード”M3 Expanded-73(M3XP-73)”。

これにメモリーを追加し、同社のアナログ・シンセサイザー音源ユニットの”Radias-R”を”KKSマウンティング・アダプター”を介してキーボード上面に増設していた。

このヤケにダイヤルがついてRadias-Rを増設したせいで、外観がノーマルより遙かにいかつくなってしまった事は否めない（笑）

そして、赤いキーボードは、スウェーデンのストックホルムに本拠を置く^{クラビア}Clavia社の”Nord Electro3”。

実は、絃がElectro3を購入したのは、元ピアニストの彼女らしい理由があった。

メモリーを追加しRadias-Rを増設するというカスタムを施したM3XP-73であったが、絃にはどうにも不満があった。

彼女の”本職”とも言えるピアノをはじめ、電子ピアノ（エレピ）や電子ノ電気オルガンの音が、何というか…小綺麗過ぎるのだ。

小綺麗過ぎるからこそ何となくリアリティが希薄で、前のように一人で弾くソリストならともかく、今はみんなと一緒に…唯達の音から微妙に浮いてる気がしたのだ。

何か開発サイドの神経を逆撫するような話だが、実際に唯達がメインで奏る60〜90年代ロックで多用されるオルガン・サウンドで、それが特に顕著だった。

例えばその時代のオルガンの代表格とも言えるハモンド社の名機”

B3”は、家でオリジナルを保有し、尚且つ自分でも演奏した故に、どうにも荒々しい力強さが足りない気がした。例えるなら、野に咲く花と、それを原種に観用に品種改良した花の差だろうか？

それにピアノにしても、ただヴィンテージというだけじゃなく、もっと使い込まれたような…悪く言うなら、チープな音を欲した。

美しいこと綺麗なことが常に正しいとは限らない…だからこそ、ロックというジャンルの音楽が生まれたのだ。

そしてその結果として絢が当時発売されていたキーボードの中で行き着いたのが、”Electro3”だったという訳だ。

完全に蛇足な話だが、アナログ・シンセ・イミュレータのRadias-Rを増設したM3XP-73と、その音を補うElectro3という組み合わせは、キーボードをある程度知ってる方なら、絢が”どんな音を欲しがり、またどんな音楽を奏りたい”のかをかなり明確にわかっていただけのような気がする。

それぐらい、特徴に溢れた構成だった。

「それじゃあ、そろそろファイナルのリハ始めっぞお〜っ!」

一番後ろにいる律は、言い方を変えれば全員が一番見えるポジションにいる。

だからこそ、全員が音出しを含めた最終チェックを終えた事が真っ先にわかった。

ギー太を吊るしたまま両手で大きな丸を作る唯に、そんな姉を微笑ましげに見ながら可愛らしくお茶目な敬礼する憂、らじゃー とばかりに芝居がかった真面目な顔で敬礼する紬と、律をガン見しながら軽く頷く澪。

何より、”クラウスターラー”とドイツ語で書かれてる缶に少し残っていた中身を喉を鳴らしながら一気に飲み干し、それをグシャリと握り潰して屑籠に放り投げ、ホールインワンさせる和。

それを確認すると律は、カチューシャを取り出し装着。

一瞬、目を瞑り再び開く。

その瞳に宿るのは獰猛さを感じる程の、闘志に近い何か…

それは、中学生の少女から一人のドラマーへと移行する為の小さなイニシエーション…

律は、ペン回しの要領で両手のスティック、パワープレイを司るマ

イク・マンジーニのシグネイチャー・スティックを1回転させると
それを高らかに打ち鳴らし、

「1・2・3・4!!」

琴吹夫妻が到着したのは、唯達が最終リハーサルを終えた約2時間
後の事だった。

第13話 "りはーさる!" (後書き)

皆様、ご愛読ありがとうございましたm(____)m

実は前半の丸々半分が、今までクローズアップしなかったりっちゃんのエモノと”ドラマーとしてのりっちゃん”にスポットライトを当てたエピソードだったりします(^^);

ようやく、これで【本編(高校編)】に至る主要メンバーの初期装備を書き終えた訳でして(^| ^;)

もし、登場した楽器の音が想像できるなら、イメージしてみてくださいさい…

実は【真のフルメンバー】が揃う前のこの時点でも、十分にパワフルなバンドだったりします(笑)

そのうち、裏話とかも入れたキャラシートとかも作ってみたいなあ)

ラストに紬のおんとおかに言及する文がありました、次回こそ終わらせられればなあ(^ | ^ ;)

それでは、またお会いしましょう(o^_^)(b

ご意見ご感想は、作者の明日への勇気

いつでも歓迎万端でお待ちしております（――）

第14話 "けっせんっ!" (前書き)

皆様、こんにちわー

今回は、小説を書く事の難しさを殊更思い知った暮灘です(^^;

今回は、サブタイ通りに全編がライブのシーンです。

自分の頭の中には明確な音が有るのに、それを文章にするのは、なんと難しい事か(泣)

そして、前にもうつすら伏線を張りましたが、和が溼が憂が、そして唯が熱唱します

また、所々に訳詞が出てきますが、原則としてライナーノーツとかに書かれてる正規のそれではなく、暮灘が意識した物で、必ずしも正しい和訳ではないことをご了承ください(――)

ここからは作者のエゴイスティックなお願いです。

出来ればよろしいので、ご感想をください(――)

拙い文章なのは自覚しています。

半分とか1割とか贅沢は申しません。

例え1%でも読者の皆様の脳内で、彼女達の歌声が、想いが再現できたのか…どうしても聞いてみたくなりました。

どうぞよろしくお願いします () m

第14話 "けっせんっ！" ;

そのライブは、確かに奇妙と言えば奇妙だった。

まず場所は琴吹家…というより、書類上は絢が個人所有してる別荘。

観客はたった二人…

日本人の絢の父と、フィンランド人の絢の母。

もつとも父は、楽器店”10GIA”の胴元…”琴吹音楽産業グループ”の社長だ。

日本の音楽…いや、エンターテイメント産業全体でもトップクラスの権力と勢力を誇る男で、他の音楽会社と同盟を組み、天下り団体として組織され「お前の曲は俺の物」的ジャイアニズム丸出しの旧態依然老舗音楽著作権団体に対し、今にも全面戦争を起こそうと画策してるような人物だ。

おそらく他にも様々肩書きがあるだろう。

しかし、唯達の社会経験の少なさが、今回は良い方向に作用した。

そう、大人なら琴吹夫妻の色々な社会的地位や権勢を考え、身構えてしまうだろう。

しかし、唯達は問題を単純化する事に成功していたのだ。

目の前にいるのは、エンターテイメント産業の重鎮ではなく、ただ

の紬の両親。

自分達は紬と一緒に高校に通いたいと、だから紬の外部進学を許してくれと…

(歌で伝えればいいだけだよ)

唯の視線が、紬直属の”チーム藤堂”の一人、丸眼鏡がトレードマークの青年で今回はPA(音響)チーフを担当する”朝比奈”に向く。

朝比奈がイイ笑顔でサムズ・アップすると、

「1・2・3・4!!」

”ズンズンダンツ！ズンズンダンツ！”

単調だが腹に、内蔵全体に響くリズムと音量で律のバスドラムが打ち鳴らされる!!

【Queen】の”We Will Rock You”は、著しく単純な曲だ。

いや、ラストのギターが無ければドラムがヘヴィなスローリズムを鳴らすだけの、曲とすら呼べないかもしれない。

だが、複雑で高度な物が最高とは限らない!

せるとっ!!

ラストの唯の”ギターを啼かせる”ソロリフが終わると同時に和と
漣の位置が入れ替わり、和が唯と並ぶツー・フロントの最前列に出
た。

すると同時に合成された犬の吼え声が、絢の白いキーボードから流
れ…

間髪入れずに激しいビートを刻むドラムに、負けじと掻き鳴らされ
るリード& amp ;リズムギターに1st& amp ;2ndベース
!!
それは、あまりに激しい音の奔流…

しかし、この”Colorado Bulldog”のメイン・ヴ
ォーカルを務める和は、寧ろそれを快感…いや、悦楽に感じてるよ
うに、メスの本能を剥き身にするような目と声で歌い上げる。

Colorado Bulldog

The night has gone to my head

Colorado Bulldog

Throw a leash around my neck
and like Hell!

客観的に言って、この時の和は完全にハイなブレイク・ダウン（ぶつ壊れ）だったと思う。

元々、和は中学生離れした色気のある声の持ち主だが、この時は完全にリミッターが外れていたようだ。

激しく情熱的にハードロックを歌う声だけじゃない。
仕草が、レンズの奥の瞳が、彼女の全てが誘っていた…挑発していた。

それは、まるで今にもマイクを男の脚の間に生えてる物に例え、口と舌で愛撫しそうな妖艶さを放ち…

きつと、彼女は本来の歌詞をこう解釈し歌っていたに違いない。

コロラド・ブルドッグ

もっと私に酔いなさい

コロラド・ブルドッグ

首輪をはめられ

私の狗になれて嬉しいわよね？

寧ろその姿や歌声は、” Colorado Bulldog ”とい
うより” Colorado Bitch (ビッチ：メス犬、アバ
ズレの意味)” と呼びたくなる。

真鍋和：

どうやら、骨の髄を伝わり肢体からだの細胞の一片までロックが染み込
んでいるようだ。

” We Will Rock You ”で盛り上げられ、” Col
orado Bulldog ”でまるでレイプでもされるように情
欲を無理矢理掻き乱された夫妻に、ようやく落ち着ける時が訪れた。

そう、紬のキーボード：M3XP-73に増設された Radia s
- R から流れる連続したどこか懐かしい電子音：

前世紀の中盤に”世界の何処にも無い音”としてもはやされた”
モーグ・シンセサイザー”をイミュレートしたそのシンプルなメロ
ディは、【The Who】の名曲”Baba O'Riley”
ババ・オリイリー

の始まりを告げる。

自動演奏されるイミューテッド・モーグ・サウンドに重なるのは、
絃が直に手弾きする”Nord Electro3”の素朴だが力
強い…雑草を思わせるパワフルなピアノ・サウンド。
更に律のドラムが重なり、和と溼のベースが上積みされていく。

そして、溼のハスキーだが伸びやかな声が響いた。

「Out here in the fields . I fig
ht for meal(こんな所からはおさらばしようぜ。そし
て、食うために戦うのさ)」

その歌声は、尚もこう綴る。

生きる為に全力全開？
上等じゃないか

自分が正しいんだって示せばいい

それ以外に戦う必要なんてないのさ

許しを乞いながら生きるのなんてまっぴらだろ？

全てを読むなら決して明るい歌詞じゃないが、それを寧ろ潔く誇る
ように歌い上げるのが、ババ・オライリーの良さだと思つ。

そしてだからこそ、時代を超えた曲として今でも歌い継がれているのだろうから。

ババ・オライリーのラストのヴァイオリンが絢の操るM3XP-73から流れ始める頃、唯と憂は次の曲”ランアラウンドRunaround”に備えてポジションを入れ替える。

今度は憂と澁が最前列で並び、メイン・ヴォーカルへのスタンバイへと入る。

幸い、ババ・オライリーではギターは脇役。慌てる必要はなかった。

決めていた事だが、MCは一切入れてない。

”観客を楽しませる為のステージ”なら入れなければリラックスやペース・チェンジが出来ないで、自分達のみならずオーディエンスだって程なくへばってしまっただろう。

だが、今回は事情が違う。

音楽で音楽の専門家に自分達を認めさせ、説得するのだ。

既に宣戦布告は済ましてある。

つまり、これは…

(真剣勝負…！)

ルールは至って単純。

自分達の音楽が、音が琴吹夫妻の心に届き、揺さぶれるかだ！

平沢姉妹の驚嘆すべき点はいくつもあるが、その一つが二人ともリードだろうがセカンドだろうがリズムだろうが、ソロだろうがバッキングだろうが、姉はその全てが音楽向けに創られたとしか思えない感覚と応用力で、妹は驚異的な学習能力と先天的な器用さで、自在にこなすのだ。

憂の相棒、”ヘレン”ことEVHの”Wolf gang”は、構造的な意味からくるチューニングの精度の高さと狂いにくさ、何より響きと鳴りの美しさが売りのギターだ。

これが”精密機械のように正確な”憂の腕前が組み合わせる事により、互いを補う相乗効果が生まれる。

前に出過ぎず、しかし彼女の音が無いとバンド・サウンドが成り立たない…そんな華と厚みを合わせ持つのが、普段の”憂のリズム・ギター”だった。

だが、今は違う！

(この曲は、私がメインなんだ…！)

細と、みんなと同じ高校に通いたい…

(それが、お姉ちゃんの願いなら…)

優は足元に組みあげた姉に劣らない、だが明確に意図の違う構成のエフェクター・ボードをタップしながら、ギターのピックアップ・セレクターとボリューム&トーンを普段は使わない位置に合わせる！

(私はただ、全力で叶えるだけっ！！)

6本の弦からオルタネイト・ピッキングで爪弾かれるのは、倍音のたっぷり乗ったヘヴィで分厚い、だがバハ・カリフォルニアのように乾いたイメージのサウンド…

リード・ギターに相應しい、まさにロッカー”ヴァン・ヘイレンの音”だ！

「Wow！」

ショート・シャウトから始まり、憂はヘレンのパワーも勢いも緩める事なく一気に駆け上がる！

That's right

”そっだよ！”

She don't it When it's cut right
ht

”お姉ちゃんに、決まり決まった物なんて要らないんだ！”

（お姉ちゃんは、何にも縛られず、どこまでも自由でいるべきなんだ！ その為なら私はいつだって、どれだけだって…）

「Run-run-Runaround、Yah!」ぐるぐるグルグル走り回ってやるっ!」

憂が情熱的に歌いきったランアラウンドの後、再び唯と憂はポジションを入れ替える。

いわゆる定位置…最前列に唯と漣が並び、次列に憂と和。バックは紬と律。

唯は一瞬だけ紬を見る。

紬は小さく頷き、

（唯ちゃん、奏ろう!）

そして、ラスト・ナンバー…【Guns・N・Roses】の名ロック・バラード、”Don't Cry”が始まる…

それは、クォーター・ワウで微かに歪ませ、オーバードライブとデ
イストーションで優しく歪ませた、哀愁の漂う枯れた…でも、甘い
クリーン・サウンド…

それに律のドラムを皮切りに、憂のリズム・ギターに和と溼のベ
スが混じり、絢のキーボード…Electrosのオルガン・サウ
ンドが色を添えた。

そして、唯の甘い…甘いけど、慰めるような…
讚美歌で祈りを捧げるような声で詞が紡がれる。

Talk to softly
”話して。ゆっくりでいいから”

Theres something in your eyes
”あなたの瞳の奥に在る何かを”

「And please don't cry. I know
you feel inside（お願い。もう泣かないで…あな
たの胸の内側はわかってるから）」

（唯ちゃん…）

その時、絢は頬を濡らす暖かい感触に気付いた…

(これ…涙?)

でも、それを不思議には思わなかった。
だって、紬は気づいてしまったのだ。

(唯ちゃん…唯ちゃん…唯ちゃん唯ちゃん唯ちゃん唯ちゃん唯ちゃん…!)

どうして、唯が”Don't Cry”…”もう泣かないで”を選んだのかを…

”Don't Cry”の歌詞は、本来ならこんな感じで締め括られる。

I s t i l l L o v e y o u t o n i g h t
T h e a r s e s H e a v e n a b o v e y o u , b a
b y
A n d d o n ' t y o u c r y
B a b y m a y b e s o m e d a y
D o n ' t y o u c r y

今夜はまだ君を愛してる

ほら、君の上には天国が広がっているよ？

だから、もう泣かないで

いつか君も泣かないですむようになるから

例えるなら、こんな意味だ。

だが、唯は違う歌詞を選んだ。

唯が伝えたい言葉は、それじゃない。

唯が伝えたい想いは…

I s t i l l L o v e y o u a l l o f t i m e

” いつも、むぎちゃんを愛してるから ”

T h e a r s e ' s w e w i l l b e w i t h y o u ,
b a b y

” きつと、一緒にいられるようになるよ ”

A n d d o n ' t y o u c r y

” だから、泣かないで ”

B a b y s o m e d a y y o u r d r e a m w i l l c
o m e t r u e

” いつか、むぎちゃんの夢は叶うから ”

紬は泣きながらキーボードを弾いていた…

涙は次から次から溢れてくる…

だが、それは決して不快な訳がない。

その蒼い瞳から零れ頬を伝わる雫の源は、胸を締め付ける激しくも暖かい唯の友愛なのだから…

喜びの涙を、何故止める理由があるのだろうか？

(どうしよう…私…)

唯の甘い歌声が、この上なく紬の心を、魂を奥底から揺さぶる…

(ますます…どうしようもないくらい…)

その想いは、今にも破裂しそうな鮮烈な色で、紬の心を染めあげた。

(唯ちゃんのこと…好きになっちゃったよお…)

第14話 "けっせんっ!" (後書き)

皆様、ご愛読ありがとうございましたm(____)m

なんか、現在は燃え尽きた感じに支配されてる暮灘です(^^);

いや、本当にライブのシーンを描くのにパワーが必要でして(苦笑)

まさか、基本的にゆるゆり(笑)な彼女達を描くのに、こんな消耗する日がこようとは(;^_^A

気分は、これで最終回でもよくな?です(^_|^;))

あつ、一応まだ続きますよ?

少なくともトリック・スター(?)の黒仔猫が出てくる迄は構想あるし、続けていくつもりです。

皆様、合宿編の最後にして最大の山場である今回は楽しんでいただけましたでしょうか?(汗)

物語はこの後、合宿編のエピローグとちょっとしたエピソードを挟み、原作の時間軸へと合流予定です。

正直、今の勢いが何処まで続くか不明ですが、もし楽しみにしていただけにいるのなら幸いですm(____)m

第15話 "けつちやく!" (前書き)

皆様、こんにちわー

ようやくの物語一段落に、ホッと胸を撫で下ろしてる暮灘です (^ ^ ; ;

サブタイ通り、今回で合宿編はラストです

紬のパパママが出てきますが、設定は完全に捏造ですので、あしからず (笑)

個人的には、レギュラーメンバーに負けず劣らずこゆ〜いキャラを目指しましたが、果たして…?

それにしても、色々大変でしたが、書いてて楽しかったなあ〜

今回は、なんか妙に紬が可愛いと思ってしまったのはナイショです (^ ^ ; ;

あと少しエピソードを入れて中学編は終わり、いよいよ原作の時間軸に合流です (o ^ - ') b

前に少し伏線を入れましたが、幕間で和と澪のベースに纏わるミニ・エピソードとか考えてるんですが、どうでしょう? (; ^ ^ A

第15話 "けつちゃく!" ;

” Don't Cry Yui version ”の最後の1フレーズが、フェード・アウトしながら空気に飲み込まれてゆく…

今の自分達に出せる全力全開…

それを出しきった自覚はある。

唯は一度天を仰ぐと、微かな…でも満足そうに微笑んだ。

そして相棒のギー太に、

「ギー太、お疲れ様」

と声をかけてスタンドに置いた。

すると、その時を待っていたかのように…いや、待っていたのだろう。

「唯ちゃん!」

”どすん!”

心を魂を唯の”ラヴソング”に揺らされ、何もかもを抑えきれなくなっていた紬が飛び込んでくる。

まあ、漣律のような体格差は無いから、いつもの律のように勢い余った漣に半ば確信的にテイクダウンされ、素早くマウントポジションを奪われる…

みたいな醜態は晒さずに済んだが、

”Chu!!”

気がつくと、代わりに紬に唇を奪われていた。

しかし、普段のぼわぼわしたお嬢様な紬らしからぬ荒々しく乱暴で、それでいて奪うというより寧ろすぎるようなキスに、唯は驚くより先に心に暖かい物が込み上げてくる。

「大好き！　大好き！　大好きっ!!」

もはや紬の頭からは、ここが別荘であることも、周りにみんなが…何より両親が居ることさえも綺麗に忘れ去られていた。

だけど、唯はそんな高揚したままの紬をギュッと抱きしめ、

「よしよし」

と、紬の長い金髪に手櫛を通すように、そっと撫でるのだった…

「落ち着いた？」

「うん…ごめんね。無理矢理キスしちゃって…」

なんだか泣き出しそうな紬。

だけど、唯は首を左右に振ると、

「むぎちゃんなら、ゼーんぜんおっけーだよお」

と唯は笑い、そしてどこか懐かしそうに、

「そういえば、幼稚園の頃によくキスしたよね」
それに、”きす”って教えてくれたの、むぎちゃんだったし」

「そっかあ…えっ？　じゃあ、もしかして唯ちゃんの1stキスの相手って…」

「もちろん、むぎちゃんだよお」

元気一杯の朗らかな唯に言い切られ、紬は不意に照れ臭くなってしまふ。

「そのお陰で一時期、唯はキス魔だったけどね」

と、こちらも少し懐かしそうな和。

いつの間に来てきたのか（或いは最初から用意していたのか？）、手には当たり前のようにノンアルコール・ビール”ホルステン”の缶がホールドされていた。

祝いの一杯というより、一仕事終えた後の一杯だろう。

「あの癖が大人しくなっちゃったのは、少し残念かも…」

自分の唇…かつては日に何度も姉のそれと重ねた唇を人差し指でなぞる憂に、

「モーニング・キスだけでも十分でしょ？」

そんな唯のキス癖を力技（！？）で矯正した過去を持つ和は、缶をゴギユッと握り、中の圧力を使ってプルトップを開ける。
「いわゆる”ミサト開け（笑）”である。」

「のどかちゃん、飲み過ぎだよぉ〜」

「たかが炭酸麦茶に、一タツツコまないの」

実に旨そうに喉を鳴らしながら中身を飲み干すと、

「それより…お待ちかねみたいよ？」

と、和が視線で報せたのは、どうやら娘の行動に対するリアクションに困ってるらしい紬の両親だった。

「絶対にずっとずっとと唯ちゃんと一緒にいるっ！ もう離れ離れでいたくないもんっ！！」

錯乱した…とは言い過ぎにしても、滅多に我が侘を言わない娘が、

まるで歳端もいかない幼子のように激しく駄々を捏ねる姿に、琴吹夫妻は戸惑いながらもどこか嬉しげに、

「紬の主張はよくわかったから、とりあえず落ち着きなさい」

そう優しい声で問い掛けるのは、琴吹父こと”琴吹勇治郎”だ。

それにしても…

((紬は、99%母親似だな…))

とは、律と漣の1stインプレッション。

ちなみに幼稚園の頃から付き合いのある唯憂和の三人娘は思い切り面識があるので、特に違和感は無いようだ。

なので、律が後に語ったコメントを引用しよう。

『いや、ホントに眉毛しか共通点しかないんだよ。そりゃ、特徴の塊みたいなああの公家眉で、親子だつてのは判るんだけどさ…』

彼女は、紅茶を一口飲み喉を潤すと、

『ぶっちゃけ近代オフィスビルの社長室よりも、核戦争後の荒廃しまくった関東平野で、牛より象に近いデカさの馬に跨がってる方が似合っんじゃないか?』

”それ、どこの世紀末霸王だよっ!?”

と、思わず魂のツッコミ・シャウトをしたくなるコメントだが、まあ無理もない(汗)

琴吹勇治郎:

身の丈は軽く190cmを越え2m近く、肉体はまるで筋肉を幾重にも重ねた鎧を纏ったような筋骨隆々とした立派で頑丈そうな…日本人離れした体格の、文字通り天を突くような大男だ。

確かに今みたいにテーラーメイドのハリス・ツイード・スーツより、パンクな甲冑を着込んで『むそーてんせー!』とか殺ってた方が似合う気がする…

まさか、交渉術に肉体言語とか使ってないよね…?(汗)

「唯ちゃん…まずは、いつも…いや今でも紬と仲良くしてくれてありがとうがとう」

「うん だって、むぎちゃんはずっとお友達だし」

その無垢な笑みに思わず目を細めるパチもんラ ウ…もとい、琴吹父。

「勿論、和ちゃんも憂ちゃんも」

「いえいえ」

「はいっ」

軽く缶を持ち上げる和と、ニコリと微笑む憂。

どうでもいいが、和は肝が座り過ぎてると思うぞ（汗）

「本当に三人とも大きく、それに綺麗になった…」

勇治郎は、感慨深げにそう呟いた。

普段から忙しい琴吹夫妻は、帰国してからというものの唯達を遠目で見るのが精々で、まともにエンカウントする機会は今まで無かったのだった。

「エヘッ おじさんは昔とおんなじで、おつきいまんまだよね」

と、嬉しそうな唯に勇治郎は、

「それはそうさ。もっとも、もうオジサンは衰える一方だろうけどね」

と、衰えなど微塵も感じさせない肉体で豪快に、されど説得力という言葉を無視して笑う勇治郎氏である。

「じゃあ、もう肩車とかしてもらうのは、無理なのかなあ…」

「いや。」 4人いっぺん抱っこ”ぐらいなら、今の唯ちゃん達ぐらいならできるんじゃないか？」

勇治郎氏は、ゴツツイ外見に似合わず子供好きらしく、幼い頃よく屋敷に遊びに来ていた唯憂和の三人に紬を加えた四人を、左右の両

肩両腕にいつぺんに乗せ、よくノツシノツシと歩いてたらしい。

だが、今は…

「あなた」

いつの間にか背後に陣取っていた、眉毛以外は細そつくりの顔で、身長と胸を増量（特に胸はてんこ盛り）したような女性：ムギママこと”琴吹アグネツタ”は、

「娘以外に年頃の若い女の子三人も乗つけて、俺ってばウハウハではないか…って解釈して宜しいかしら？」

まるで冗談でも言うようなおしとやかな笑顔のアグネツタだ。ただし、目は笑ってなかったが…

「い、いや、そんな妖しげな願望は断じて無いぞ！ うむ」

「そう？ ならいいですけど」

琴吹勇治郎…

日本のエンターテイメント産業の暴れん坊將軍も、家庭内権力では羅王ともオウガとも程遠いようだった（笑）

「惹き付けられる、いい演奏だった…細かい事を言えば色々あるけ

ど、大事なのはまずそこだろうか？」

” ” わあっ！ ” ”

6人から明るい気配が溢れ、

「じゃあ、むぎちゃんは…」

「だが、琴吹家にも立場って物があるんだ…」

だが、勇治郎がそんな台詞を言った途端、紬は一層強く唯に抱きつき、

「フウウーッ！！」

「…紬、猫みたいな威嚇をする前に、最後まで話は聞きなさい」

明らかに落胆した空気を払拭するように勇治郎はコホンと咳払いすると、

「流石にどんな高校でも構わない…とは、少々言いづらい。だから、紬が外部進学するなら、選ぶ学校の最低ラインは決めさせて欲しいな？」

勇治郎は、ニコツと笑うと、

「 ” 桜高 ” …そこか、それ以上の ” 女子高 ” なら、紬の外部進学を全面的に認めようじゃないか」

インクを放つ和。
そして、

”ポキポキ”

自分の背後で鳴る指の音に、唯をしつかり抱き止め頭を撫でていた
勇治郎は気が付かない事にした…

どうやら、琴吹夫妻はかなり無理をして時間を作ったようだ。
本来なら、唯達と旧交を温め、また新たな仲間である律や澁と親睦
を深めたかったようだが、生憎とスケジュールがそれを許さなかつ
た。

社交辞令ではない、「いつか皆で会食でも」と約束し、トンボ返り
で企業戦士ならぬ企業将軍への仕事へと夫婦共々帰って行った。
余談ながら、

「あなた…帰ったら、オシオキです」

「…はい」

帰り際に、そんな会話があったとか無かったとか…

「それにしても、”桜高”ねえ…流石はおじ様だけあって、悪くない所を狙ってくるわ」

と、半ば関心するのは、2本目のビール（銘柄はクラウスターラーに変わっていたが）を、プシュッとミサト開けする和だ。

「のどかちゃん、桜高ってどんな学校なの？」

「悪くないわ。のんびりとした女子高よ？ 偏差値はそこそこ…そうね」

和はビールを流し込みながら全員を見回し、

「私や漑、紬の成績ならとりあえず問題なくて、唯や律だと…」

少し腕を組んで考えてから、

「少し…いえ、けっこう努力が必要ってどこかしら？」

「うえ〜っ！」って顔をする律だが、唯はフンスーと小さくガッツポーズを取り、

「のどかちゃん、わたし頑張るよっ！ せっかく、むぎちゃんと一緒に高校へ行けるチャンスだもん！」

「唯ちゃん…」

また瞳をウルウルさせる紬だったが、

「別にそこまで気負う必要は無いわよ？ 今までのスケジュールを

少しいじれば十分間に合うわ」

「ほえ？」

不思議そうな顔をする唯に、

「今まで通りに紬の家に放課後集まって、セッションは1時間、長くても2時間で切り上げ。残る時間を勉強会の集団学習に回して、帰宅した後はその日学習した事の復習：休みは、練習時間の半分を受験勉強に振り分ける」

和はニヤリツと笑うと、

「桜高ごとき、これで十分よ」

「ほ、ホントにそれぐらいでいいのっ！？ みんなで集まって、今までみたいに毎日演奏していいのっ！？」

和はグビリとクラウスターラーを飲み、

「試験だろうが受験だろうが、普段のスケジュールを極力変えないのが、私のポリシーよ。勉強と借金は、無理無く計画的に……ってね？」

やっぱり、和はウィンクがバツチリ決まる娘である

「そつえばち…」

全員で今後の大雑把なスケジュールを立ててる時、漣はふと何かを思い出したように、

「桜高つて言ったら、軽音部がかなり有名じゃなかったっけ？ 昔は、プロ目前まで行ったバンドがあるって聞いたことあるような…？」

「へえ」と、トリビア的な顔をする面々だが、唯だけは…

「それって、もしかして…”DEATH DEVIL”の事かな？」

それは、前に唯がとあるライブ・ハウスのマネージャーの女性から聞いた名だった。

第15話 "けつちやく!" (後書き)

皆様、ご愛読ありがとうございましたm(____)m

長かった合宿編もこれで打ち止め(ラスト・オーダー)です(^^);

今だから言える事ですが、合宿編の目的って、超お嬢様の紬が唯達と同じ高校に通う経緯の確立と、魔改造の施されたレギュラー・キヤラ達の”原作との差を明確化する”って事だったのですが…上手く伝えられたでしょうか?(^^)(^^)

原作の時間軸に合流すると言っても、この面子ですから、かなり展開が異なる話になりそうな…?

最後は、デスデビがフライングで名前出てきたし(苦笑)

それにしても、黒仔猫はフライング登場させようかな?

なんか、このまま行くと、紬の一人ガチ…いやいや、一人勝ちな気がしてきました(; ^ _ ^ A

m
こんな話ですが、これからもお付き合い頂ければ幸いですm(____)

ご意見ご感想は、物語のアクセル

いつでもお待ちしております
（ ）

まくあいつ！ 和と漣とベース探し (1) (前書き)

皆様、おはようございます

本日は予定が詰まりそうなので、朝のうちにアップしようとしてる
暮灘です (^ ^ ; ;

さてさて、今回のエピソードは…

”すらっしゅ！”の始まりが、原作開始の約半年前の中3の夏休み
からですが、更にその1年前…唯和と律漣が出会った直後の話とな
ります。

第15話の前書きに一応、伏線は入れておいたんですが…書いてる
時点で反応0だった(泣)ので、思わず見切り発車してしまいまし
た (^ | ^ ; ;)

いや、すらっしゅ！本編での漣は、かなりアレ(笑)なキャラです
が、実はその内面は複雑な…

…

…

…

…

…

うそぴょん。(杉田風)

本編の漕のベース説明でも、和の名前がチラツと出てきたりしてますが、なんとなくこの二人の組み合わせとか、漕のモノローグとか書いてみたくなりまして（；^ー^A

という訳で、タイトルに偽りなく和と漕の二人（+ベース）しか出てこないコメディですが、お楽しみいただけたら幸いです（o^ -
'
（ b

まくあいつ！ 和と漣とベース探し (1)

ハアイ

レアなガネっ娘ヒロインの和よ。
ちえけらっちよい

…って、なんでまた突っ伏してるのよ？

えっ？

ビール片手に棒読みで言われても萌えない？

いいでしょ。

それが私のキャラなんだし。

それ以前に、ノンアルコールのパチビールだって。

それで、今日は何の用？

はあ？

漣との思い出？

同じベーシストだから、何かあるんじゃないかって？

あのね…。

とりあえず、私はベーシストじゃなくて、”ベース・ギタリスト”。
ここ重要。テストにだすわよ？ (笑)

それにしても、漣との思い出ねえ…

特に無いわね（ドキッパリ！）

だから、なんでコケるのよ？

だって、あの娘は基本的に律にベツタリだし。

強いて言うなら、漣のベースは私が選んであげた…って事ぐらいかしら？

それで良いから話せって？

別にいいけど…

大して面白くない話になるわよ？

確かあれは…

中二病どころかモノホンの中2、その夏休み…の少し前ぐらいだったかしら？

マキが唯に（私にもだけど）誘いをかけたのが、中2の春ぐらいだから、多分その辺りね。

唯と私がギター & amp ; ベースを奏ってるって聞き付けてやって来た二組目の客だから、何気に記憶に残ってるわね。

スタートの約1年前

とある中学の教室にて…

和 side -

「へえ…あなたもベースなんだ」

「う、うん」

初めて会った時は律と一緒にだったから、妙に百合全壊にハツチャけた娘だな…って思ってたけど、二人きりで会う澁は、全く別人みただった。

なんかこう…

大きな体を必死に縮こませ、小動物チツクに震えてるイメージというか…

（それに、ヤケに緊張してない？）

極端な人見知りって事かしらね？

（まあ、性格は人各々だし…深く気にしても仕方ないわね）

「それで、私に話って何？」

「えっと…不躰だけど、私にベースのイロハを教えて欲しいなって…」

今にも消え入りそうな声の漣だけど、

（必死なのは判るけど…）

「うん。それ無理」

なんかこう、ナイフ片手に襲ってくるヒロインばりに、私はそうバツサリ切り捨てた。

「えっ…？」

キョトンとする顔がますます小動物チックだったけど…

（まあ、下手に期待持たすのもなんだしね）

「私のベース・プレイは明確に基本から外れてるから、参考にはならないわよ？ 漣が初心者なら、尚更変な癖が付くのがオチじゃないのかしら？」

私の理想とするのは、【師範】こと”ビリー・シーン（ビリー・シーハン）”よ。

彼はベーシストではなく”ベース・ギタリスト”。
普通のベーシストとは目指す先が違うわ。
当然、私もね。

「あつ、その…そういうプレイスタイルとかの話じゃなくて」

「？」

すると、漣は妙にモジモジすると、

「実は、まだベース買ってなくて…」

その答えは、正直予想の斜め上45度だったわ…

「つまり、漣は私にベース選びを手伝えと？」

「駄目…かな？」

別に意識した訳じゃないのは分かってるけど、同性に上目使いされてもねえ…

(それに、漣の方がタツパあるし)

前屈みになって目線合わせてくれるのは助かるけど、上目使いは明らかに視線が低い娘がするから、主に精神的な破壊力がある物なの

よ？

「別に良いけど？」

「ホントっ!？」

パアッと顔を輝かせる漣…

無邪気というか素直というか、

(もしかして、中身は唯より幼いんじゃないのかしら？ この娘って…)

まあ、唯を【幼い】なんてありきたりな言葉で表現できる訳ないんだけどね。

そんなこんなで、休日…

漣 side -

(真鍋さん、見た目よりずっと優しい人っぽくて良かった)

律がギターとベースを奏ってる娘がいるって噂を聞き付けて、本当かどうかも分からないのに、

『漣、これでまともに演奏できるかもしれないぞっ!』

って、私の手を引っ張って()、平沢さんと真鍋さんに襲撃をかけたのはほんの少し前の話。

(平沢さんは、ぼや〜んとしてて、可愛い感じの娘だったけど…)

まだギターの腕前は聴いてないから分からないけど、”モンスター”級って噂はあるみたい。

(流石に大袈裟だと思うけど…)

あの、ぼや〜んとのおんびりした可愛い女の子とモンスターって単語が、私の中で上手く噛み合わない。

(でも…)

本当の事を言うと、真鍋さんは少し怖かった。

頭の良さを隠そうともしない鋭い…ううん。迫力のある目付きに、『人見知り? ナニソレ? 何処の国の言葉?』って言いたげに初対面なのに堂々として…

(私、あの時は律としか話してない気がする…)

きっと、真鍋さんみたいに言いたい事をポンポン言えたら、もっと楽になれるのかな？

(そういえば、律以外の人と休日をごすのつて、いつ以来だろ…？)

引っ込み思案で人見知りの私は、正直に言えば友達を作るのは下手だ。

(律の時だつて…)

律に話しかけて貰えなければ、きっと友達にもそれ以上の関係にもなれなかったと思う。

実は、今回も背中を押してくれたのは律だ。

『ベースの事を色々知りたい？ なら、詳しい先輩に聞くのがスジつてもんじゃない？』

つて言ってくれた。

(いつもそうだ…)

律が私の手を引っ張って、律が私の背中を押してくれて、私は初めて前に進める。

(つくづく、私って駄目な子だなあ…)

きつと、多分、私は律がないと何もできないから…

(だから、これは最初の一步なんだ…！)

律以外の人と行動するっていう！

(それにしても…)

私は腕時計を確認する。

(まだ、待ち合わせ時間前だけど…)

ドタキャンって事は…ないよね？

「あら？ 遅、早いわね？ 待った？」

(来たっ！)

まだ聞き慣れてはいないけど聞き覚えのある、鼻にかかるような独特のクセがある艶っぽいハスキー・ボイス！

「うっん！ 私もいま来た…」

裏声になったのは気にしない。

私は振り返り、

「とっおおーっ!?!」

固まってしまった。

「ちょっと、溼…? なにフリーズしてるのよ?」

怪訝な顔をする真鍋さんだけど、

「そ、その格好は一体…?」

私は、そう言うのが精一杯だった…
だっただって!

(眼鏡以外、学校と共通点が無いっ!!)

ホントにトレードマークの赤いアンダー・ハーフフレームの眼鏡以外、全然別なんだってばっ!

まず足元は、オールドっぽい赤地に黄色いブーメランが踊るナイキのスニーカーと、片方を太ももの部分から力任せに千切ったみたいなパンキッシュなスカイ・ブルーのジーンズ!

剥き出しの片方の太ももには真っ赤なバンドナを巻いて、上は小さな十字架が不規則にプリントされた黒のTシャツに、幾つも缶バッジを付けたヴィンテージっぽく色褪せした赤いGジャン!

頭の上には赤と黒のギンガム・チェックのエンジニア・キャップを
乗せて…

(えっ！？ ピアスっ！？)

両耳には、大粒のガーネットっぽいピアスが光っていた。

「えっ？ ただの普段着だけど？」

「ふ、普段着…？」

これが真鍋さんの普段着っ！？
マニッシュにしてパンキッシュなこれがっ！？

(私、眼鏡なかったら絶対に真鍋さんだって気付かなかった自信あ
る…)

「ぴ、ピアスも…？」

すると、真鍋さんは妙に大人っぽい仕草で自分の耳たぶに触れて、

「ああ、これ？ 1年の時に空けたのよ。普段は透明チューブ入れ
て穴を誤魔化してるけどね」

よかった…

本当によかった…

校則違反って自覚は、とりあえずあったんだ…

「そんなことより漣、楽器屋に行くんでしょ？」 10GIA”？」

「うん、うん」

「そう。なら、さっさと行くわよ？ 時間が惜しいわ」

…やっぱり、ちよっぴり怖いかも（泣）

楽器店” 10GIA”にて

和 side -

「漣は、そのベースが気に入ったの？」

私は、YAMAHAの好みの色の6弦ベースをいじりながら、さっ

きからとあるベースをガン見してる溇に問いかけた。

残念ながら、その6弦をフィンガー・ピッキングで弾きこなそうとするなら、まだ指の長さが足りなかった…

「うん…元々、レフティ用のベースって選択肢無いし…」

なんて少し切なげに溇は笑うけど、私には最初からそのベース、3TS(3トーン・サンバースト)に塗られたフェンダー・ジャパン謹製の”JB62/LH”の一択に見えるんだけど？

形番で言われても分からないと思うから簡単に言うけど、フェンダー・ジャパンが製造してる【1962年式ジャズベースのレプリカ】、その左利き用モデルって意味よ。

JBがジャズベース、62が年式、LHがレフト・ハンドで左利き用って意味になるわね。

「ねえ、もしかして溇って…」マークス・ミラー”とか好き？」

ジャズベ(ジャズベースの略)と聞いたら、真っ先にマークス・ミラーを思い出したただけなんだけど…

”ぎくっ!”

(…:どうやら凶星だったみたいね)

ああっ、”マークス・ミラー”って言うのは、アメリカのベースストで、少なくともジャズやフォージョン奏ってる人間なら、まず知

らない人はいないって大御所よ？

特に独特のスラップ奏法やタツピング、ネック寄りのフィンガー弾きなんかは有名だわ。

20世紀有数のベースリストって呼ばれていて、21世紀有数のベースリストと呼ばれるのも、ほぼ確定してるようなプレイヤーね。

他にも”何でも屋”とか色々特徴はあるけど…

(そのミラーのトレード・マークって確か…)

本家フェンダーU・S・Aの77年製ジャズベースなのよね。

遷 side .

(ど、どうしてわかったんだろっ!?)

確かに私はマーカス・ミラーが好き。

ビリー・シーンもジョン・アントウィッスルもラリー・グラハムもジョン・ポール・ジョーンズもマーク・キングも凄いと思う。

(でも…)

奇をてらわず変化球に頼らず、基本と呼ばれるテクニクを磨きあげて昇華させたようなスーパード・ベーステクニクを誇り、”正統派ベースリストとして完成”したって言われるマークス・ミラーは、私の憧れだった。

(できれば、あんなベースリストになりたいなあ〜って…)

いや、今はそれどころじゃなくて…

でも、真鍋さんはじつと私を見て、

「ねえ、漣…あなたは、フェンジャパで作られたその子が欲しいの？」

えっ？

フェンジャパって、フェンダー・ジャパンのことだよな？

「どっついう意味？」

「もし、素人目には寸分変わらない外見で、似たような値段で、尚且つ品質のいい…例えば素材が1ランク上で、更に私が聴く限り、今のフェンジャパ・ジャズベよりオリジナルの77年製ジャズベに近いベースがあつたらどうするのかって聞いているの。勿論、レフティ・モデルで」

なにその理想ベース？

「そ、そりゃあそっちの方が欲しいかも…」

真鍋さんはニヤリッと笑うと、

「じゃあ、今から行くわよ？ 東京に」

「東京っ！？」

もしかして、これが噂の超展開！？

「少し心当たりがあるのよ」

ど、どんな心当たり！？

(せめて、合法的な物であって欲しい…)

そんな私の願いを知ってか知らずか、

「漣、一つ私の好きな言葉を教えてあげる」

真鍋さんはクツクツクツとまるで悪人笑いをするような表情でこう告げた…

「レブリカ マスターピース 鷹作が本物より劣ると、一体誰が決めたのかしら？」

ま、真鍋さんって本当に女子中学生っ！？

迫力ありすぎで、おしっこ漏らししそうなんだけどぉ〜(泣)

はてさて、果たしてどうなる？ 和と漣、凸凹コンビのベース探し

東京珍道中（笑）

とりあえず、今回はここで閉幕にございます。

m 需要とご要望があるのでしたら、続きはまたいつの日にか m (——)

まくあいつ！ 和と漣とベース探し (1) (後書き)

皆様、ご愛読ありがとうございましたm(____)m

という訳で、今回はプレ原作の更にプレという内容でした(^^;

しかし、この二人書いてて楽しい楽しい(笑)

ご要望と需要があるなら、またそのうち続きを書いてみようかなあ
〜とか考えてます。

いや、「すらっしゅ！」自体に需要ねーじゃん」って言われたら、
それまでなんです(苦笑)

とりあえず、現在までにプレイ・モデルが確定してるキャラは…

唯 Slash (他多数)

和 ビリー・シーン

憂 エドワード・ヴァン・ヘイレン

律 キース・ムーン(?)

漣 マーカス・ミラー

って感じ(^ _ ^)

次回からまた本編の予定ですが、改めてよろしくお願ひしますm
——) m

ご意見ご感想は、作者のモチベーション増幅剤
いつでもお待ちしております) ——)

第16話 "ふりっすっ!" (前書き)

皆様、こんばんはー

最近、もしかして”すらっしゅ!”は読者の皆様に飽きられたのでは…?と、つい心配になった暮灘です(^^; ;

さてさて、今回は15話までの合宿編の後、かなり時間が経ったエピソードになります。

具体的には、高校受験の後ぐらいからのスタートですね。

前半は、まさかの再登場のキャラが出てきたり、和と憂の………なんてシーンが入ってたりします。

ん? ”…”の部分はえっちなワードではないのであしからず(笑)

後半は、まあなんとというか…間違いなく、”この作品の唯”ですら、サブタイ通りにフリーズする事態に遭遇します(^^; ;)

何やら原作合流の高校編への始まりじみたエピソードですが、お楽しみ戴けたら幸いです(o^_^)(b

第16話 "ふりーず!"

とある年の冬と春の間…

「だから！ わたしっ！」

一緒にいくよ

どんな深い

闇の中にだって

あなたがいるなら

怖くはない

O u r
W a y

背中追いかけるより

横に並んでいたって

望むよ今

二人にFor the Future（未来を…）

Yui（笑） side -

やっほ

サングラス&シルクハット装着した”Yui the S
lash”モードで、半年ぶりぐらいにライブ・ハウス”PASS
ION”のステージに立ってる唯だよ

ちなみに、今回はツイン・ヴォーカルの一人なので、くわえ電子タバコはしてません。

ん、とりあえず近況を説明した方が良いよね？

まずはあの夏合宿の日からだね

わたし達は、のどかちゃんの立てた勉強計画通りに動いたんだよ。

放課後、みんなでむぎちゃんの家に来るのは変わらなかつたけど、スタジオで演奏するのは最初の1時間、長くても2時間後は勉強会ってスタイルだね

そうすると、帰りは10時くらいになることは珍しく無かつたから、いっつも仙波さん…むぎちゃん付きの”チーム藤堂”の一員で、いっつもむぎちゃん専用リムジンの運転手をやってるお爺さんに、車で送ってもらってたんだあ。

仙波さんは、むぎちゃんが実のお爺さんみたいにしたってるんだよあつ、もちろんわたしやのどかちゃん、ういもむぎちゃんとお友達になってから、本当の孫みたいに色々可愛がってもらったんだよ

(そして、ついこの間…)

長い長いながあゝい高校受験が、やっと終わったぞあゝい!!

それでね、そのタイミングを待ってたみたいにマキちゃん、クラスメートで友達の岡崎真輝ちゃんが、

「私の”ENNOZ”の”O”として奏るラスト・ライブにさ、唯達にも出てほしいなあゝって」

話を聞くと、前にライブでお世話になった榎本さん率いる”ENNOZ”の正ドラマーで、アメリカに武者修行に出てた岡島さんが戻ってくるんだって。

「前に話したかもしれないけど、これで私もお役御免って訳。そんなで晴れて自分のバンドを立ち上げるって事なんだけどさ…」

それで榎本さん達の計らいで、約二年間ドラマーを務めてくれたお礼も兼ねて、アンコール枠にソロの時間をとってくれたらしいんだけど…

「でも、ドラムのソロプレイってなんか寂しくない? メンバーも

まだ集めてないし」

うん。それはそうだね！

ってことで、わたしはおっけーしたんだよ

あと、マキちゃんのリクエストで、のどかちゃんとういも誘って

『すっげ…あの赤い眼鏡の姐さん、メチャクチャ速えーっ！！』

あつ、のどかちゃんのステージ衣装は、普段着だよ。

アディダスの80'sっぽい赤のハイカット・バツシュにローライズのダメージ・ジーンズ(のどかちゃん、何本も持つてるんだよね)、モノトーン・カモフラのタンクトップ…それに、

(真っ赤なライダース・レザー・ジャケットなんて、どこで売ってるんだろ?)

簡単に言えば、戦国BASARAの真田幸村がデフォで着てるやつが近いかな？

これに、ドッグタグ・タイプと十字架のペンダントと赤黒バッファロー・チエックのワーク・キャップを組み合わせてるの。

それで、さっきから”トウ・ヒト・ウイス・ユウTBWU”を、スリー・フィンガーでガンガンに弾いてるんだよ

『パーソナル・カラー通り3倍速え…あのメガネの姐さん』

『メガネの姐さん…メガ姐…赤いメガ姐だあ！ 色んな意味でえーっ！…！』

『メガ姐えーっ！』

のどかちゃん、さっそく大人気だよ〜

あれ？ あれれ？

のどかちゃんが、微妙に引きつってるような…？

それでういは、

『か、かわええ…』

『でも、凄えテク…』

『カワすげえ…』

えっへん

自慢の妹だもん

フンス！

ういの格好はねえ〜、ピラミッド・スタツズの入ったブルーデニムのミニ・スカートに、膝まであるチョコレート・ブラウンのブーツ。上は、フリフリのいっぱいついたレモン・イエローのキャミソールとホワイトのハンティング・ジャケット

もっちらろん、ポニーテールは健在で、大きなバーバリー・チエックのリボンで結んでるのさ

フォークロア+ちびっとロリパンクってコンセプトなんだよお。

”ヘレン”と一緒にだと、フォークロアとパンクが、ちょうど半々になるって感じかな？

あっ、ちなみにりっちゃんとみおちゃん、むぎちゃんがないのは…

「律はドラムで被るし、漣は律と1セットでしょーが」

マキちゃん、それ否定できない(汗)

「それに、琴吹さんって娘、私面識無いんだけど？」

ごもつともでした。

その後、ポソツと「…それに色々複雑な気分なのよ。フラレた方としては」って言ってたような気がするけど…

(どづいう意味だったんだろ?)

それはさておいて…

(もつすぐ、ラストの魅せ場…)

わたしは、のどかちゃんとういに視線で合図する。
二人が同じく視線で頷いて、

（いっくよお〜）

わたしのスウィープ、ういの高速アルペジオ、のどかちゃんのスリ
ー・フィンガー…

三人合わせた速度制限無しスピード・トリプル・リフ発動だよお
〜っ！！

「まさか、こんな短時間でアレンジ作ってくるとは思わなかったわ。
しかも、私のドラム・パートを変えないままでやるなんてね〜」

マキちゃん、なんだか半分呆れて半分感心するみたいな表情だなあ
〜。

「でも、アレンジやったのは、わたしじゃないよ。ういにのどかちゃん、むぎちゃんのお手柄だね」

「それを言うなら、歌詞考えたのは唯だけどね」

「うんうん」

にはは

なんか、フォローされちつたい

「なんだか最近、歌詞とか考えるの楽しくてさあ」

夏の合宿で、”Don't Cry”の歌詞を変えたっしょ？

あれから気が付くと、ちょこちょこってノートの隅っことかに書いてたりするんだよね

受験勉強のおかげかな？

(英語の歌詞の意味とか前より分かるようになってから、余計に楽しくなっちゃったんだよね)

「でも、どうしてあんな風に変えたのよ？」

「わたしがこの女の子だったら、ついていくよりも一緒に行きたい…背中を追い掛けるより、好きな人の横に並びたいなあって思っただけだよ？」

すると、マキちゃんは腕を組むと真剣な顔で、

「…やっぱり、あんたら”コツチ側”の住人じゃない。カタギの学校じゃ生きにくいよ？ きつとせ」

うん…

そうなのかな？

でも、それでも…

「わたしが決めた事だから」

あの後、榎本さんから「いいアレンジね！」って、誉められちゃったんだよ
そして、

『ENOZの曲、気に入ったんならいつ演奏してもいいよ。唯なりの”God Knows”作ってごらんよ』

そして、春休みのとある日…

事件事故…大雑把に纏めればアクシデントという物は、いつも唐突に起こり、その度に人は世の不条理さ理不尽さを痛感し、時には膝を折りそれを呪うものだが…

その日は、穏やかな春風がそよよく晴れた日だった…

平沢家に届いた手紙は、不条理さの象徴…かどつかは色んな意味で微妙だが、少なくともこの少女、平沢唯にとっては予期せぬアクシデントだった事は間違いない。

「あれ？ 桜高からだ…」

入学に関する手続関係の書類は既に届いていたし、唯は変だなくと思いつつ居間で手紙を開封した。

そして、その手紙を読んだ瞬間…

”びっし！”

見事にフリーズしていた（笑）

同日、琴吹邸専用スタジオ

全員の【私立桜ヶ丘女子高等学校】合格の後、紬の2台のキーボードと並び、未だペットネームが未登場のりっちゃんドラム（オレンジ・スパークル・フェイドのSONOR社”Force3007ST1”）が置いてあるせいもあり、6人は紬スタジオへと毎日のように入り浸っていた。

勿論、受験で十分に楽器をいじれなかった鬱憤を晴らす為にだ。

えっ？

溥のベース（フジゲン製NCJB-10R/AL/LHのカスタムのペットネーム？

普通に”エリザベス”ではないかと？

「勉強時間を気にせず演奏するのって、やっぱり良いわよね」

と、今日もみんなが集まり上機嫌の紬が、笑顔でそう言う。

存外、この沢庵眉のお嬢様は寂しがり屋…というか、名門のご令嬢にありがちだが、損得感情抜きに同じ目線で話せる友人に飢えてい

たのかもしれない。

家柄だの金だのは、必然的に俗世間の柵しがらみを呼び込む物だ。

特に容姿が美しくも日本人離れしていて、尚且つ国際的コンクールに入賞する程のピアノの腕前を誇るともなれば、”普通の友人”というのは尚更作りづらいただろう。

「完全に同意するわ」

と、唯と同じく紬の幼馴染みの和。

実はこの二人の距離感も中々興味深く、

『和ちゃんは唯ちゃんが一番のお友達で、憂ちゃんは大事な妹だけど、唯ちゃんのファン1号は私だから』

というのが、紬の決まり台詞だった。

「それにしても、唯と憂ちゃん遅くないか？」

と、”エリザベス”のチューニングしていた手を止め、壁にかかる電波時計を眺めながら遷が呟く。

「それもそうだな。唯だけならともかく、憂ちゃんが付いて遅刻っていうのも珍しいかもな」

基本的に夜遅くとか荷物が多いとかの理由が限り、琴吹家（という

か、仙波が運転する紬専用)のリムジンを使う事はない。律以外は、互いの相棒を持参して思い思いに紬のスタジオへとやって来るのが暗黙の決まりだ。

今は昼食とアフタヌーン・ティータイムの間の時間だ。

そして、平沢姉妹の愛用のメイン・エフェクター・システムや、去年のX・masに琴吹勇治郎氏より「素晴らしい演奏を聴かせてくれたお礼」としてプレゼントされた新アンプ、唯はギー太：ギブソン・カスタムショップ謹製【AFDレスポール】と対になるようなMarshall社の”Slash”シグネイチャー・アンプ【AFD100】、憂は”ヘレン(Wolfgang)”と同じEVH謹製でエドワード・ヴァン・ヘイレンのシグネイチャー・アンプでもある”5150III”も、それぞれスタジオに置きっぱなしになっている。

蛇足ながら、和はAshdown社の真つ赤なベース・ヘッドアンプ【AL-MK500(実はベースリスト、”マーク・キング”のシグネイチャー・アンプ)】、漣はHartke社の【HA3500】ヘッドアンプと、マルチ・ベース・プロセッサの【BOSS GT-10B】のセット、律は自宅でドラムの練習ができるようにコンパクト電子ドラム・キットのRoland【HD-1】の専用モニター・スピーカーやスローン、マットを含んだフルセットを、同じくクリスマスにそれぞれ勇治郎氏より贈られていた。

もっとも和に言わせれば、

『随分と露骨なコネ付けね？　ここまであからさまだと、いっそ清

々しいわ』

それを聞いていた唯は不思議そうに首をかしげ、憂が苦笑したのは言うまでもない。

それはさておき…

” がちゃり ”

防音ドアを開いて、いいタイミングで入ってくる平沢姉妹。
だが…

「お姉ちゃん、大丈夫…？」

何やら唯はまるで憂に抱えられるようだ。
オマケに顔色も悪い。

「唯ちゃんっ!？」

「風邪でも引いたの？」

思い切り心配の声をあげる絢に、心配を声音や表情に出さない和。
しかし、唯は震える声で、

「どうしよう…むぎちゃん…のどかちゃん…」

取り出したのは、桜ヶ丘の校長印が生々しく入った一枚の紙片…

「わたし…入試で一番とっちゃったよ…」

一瞬の沈黙…

そして、

「なんだってえええ〜〜つ！！！！？」

律と澪の絶叫が響き渡った！！

そう、唯の手の平から落ちた校章が透かし入だった紙片には、紛れもなくこう記してあった。

平成 年度

私立桜ヶ丘女子高等学校

首席入学者氏名

【平沢 唯】

と…

第16話 "ふりーずっ!" (後書き)

皆様、ご愛読ありがとうございましたm()m

なんとウチの唯、桜ヶ丘に首席で入ってしまいました(^^ ;

まさに、本人的には”ど・う・し・て・こ・う・なっ・た?”的な超展開(笑)ですが、その理由：律澁しか驚かない理由も含めて次回で語られると思いますよ〜

今回、”God Knows…”を改変した歌詞が出てきましたが、今後もなんか色々出てくると思います(^ | ^ ;)

なんか、ウチの唯は覚醒早いみたいですからね〜(笑)

それでは、また次回お会いできる事を祈りつつ()

第17話 ";わるだくみ!";(前書き)

皆様、こんにちわー

何とかこんにちわと言える時間帯にアップできて安心してる暮灘です(^^;;

今回のエピソードは…

前回16話で唯に届いた、ある意味”不幸の手紙(笑)”に対する対策(?)がメインです。

そして、サブタイの【悪巧み】とは…?

それは本編を読んでのお楽しみって事で(^^;;)

後半は、今まで姿を見せていないTV版を含む原作キャラが二人出てきます(o^_^)(b

一人はフライング出演で、もう一人は超フライング出演だったりして(笑)

これにて、中学編（プレ原作）の全てのエピソードは、全て終了となります。

原作にはない、100%が暮灘の妄想である完全オリジナルのストーリーを今まで読んで頂き、ありがとうございましたm（__）m

第17話 ";わるだくみ!";

昔から、事實は小説より奇なりとは言うが…

「どつしよつ…むぎちゃん…のどかちゃん…」

そう唯が震える声で取り出したのは、桜ヶ丘女子高等学校の校章の透かしと生々しい校長印が入った一枚の紙片。

そこには、紛れもなくこう記されていた…

平成 年度

私立桜ヶ丘女子高等学校

首席入学者氏名

【平沢 唯】

「わたし…入試で一番とつちやったよ…」

「「なんだつてえええ〜〜っ!!!?」」

律と澪の絶叫が、琴吹邸のスタジオに響き渡る!!

しかし…

「唯ちゃん、すごい　お祝いしなくちゃね」

紬はキャツキャツはしゃいでるし、

「ふーん…」

和に至つては驚くどころか、さして興味すら無さそうだった。

「ちよっ！？　お前らのそのリアクションはなんなんだあっ！？」

まあ、律が噛みつくのも無理ないだろう。

「だって、唯ちゃんだし」

とは天然お嬢様の弁。

「へっ…？」

その説明になつてない説明に首をかしげる漣。
だが和は、

「要約すれば、それで十分な理由説明になるわね」

ますます怪訝な顔をする律漣だったが、和は二人の顔を交互に見て、

「あら？ 二人とも唯の”超集中”状態、知らないんだっただかしら？」

「「はいつ？」」

初めて聞く単語にポカーンとする二人だったが、

「お姉ちゃんの音楽技能に並ぶ”特殊技能”ですよ」

と、フォローを入れるのは、半ば真っ白になりかけてる姉に付き添う憂。

「唯ちゃんが一度集中すると、何事もスゴいところまでいくって話
はしたことあったでしょ？」

憂の台詞を受け継ぐような紬。
そのバトンを受け継ぐのは、

「その正体よ。唯の集中がピークに達すると、半分トランス状態
みたいになるのよ。そうね……」

和は少し考えてから、

「ガンダム種に”SEED”って状態が出てきたでしょ？ 簡単に
言えば、アレみたいな感じね」

「なにその反則設定……」

思わずそう呟く律であるが、

「唯ちゃん、試験勉強の時、何度も超集中してたもんね。」

「入試の時に唯がSEEDを発動してたなら、桜高の首席ぐらいじゃ一々驚かないわ」

和はクスツと笑うと、

「私がイタズラで紛れ込ませたラサールや開成の入試問題、普通に解いてたし」

言うまでもなく、和のあげた名は全国区の超難関高だ。

「和…お前、受験勉強でなにやってんだよ…」

思い切り呆れる律に、

「単に興味本意で唯の潜在能力を測定してみたくなっただけよ？」

しれっと言い切る和であった（笑）

「も、問題はそういう事じゃないんだよお…」

と、唯は力の籠らぬ手から滑り落ちていた紙片を拾い上げ、ある一点を指した。

「なるほどね…」

それを見た和はアンダー・リムフレームの眼鏡をかけなおし、

「つまり、『アンタが1番じゃきい、新入生代表挨拶の一発でもかましてくれや ベイベー』って事よね？」

「いや、そこまでファンキーな文章じゃねーし。つか、何故に広島もしくは土佐弁？」

何か疲れたような顔をする律だったが、

「今日はりっちゃん、いつも以上にツッコミのキレが良いわね」

あくまで暢気に追い討ち（笑）をかける紬お嬢様。

「おまいらがツッコミ所しか無い会話するからだろっ！ 私だって好きでツッコミ入れてる訳じゃないやいっ！！」

「今日も律、輝いてる…私も律の色々なところに色々な物を突っ込みたい…」

漣もどつやら平常運転のようだった。

「何をどこにだよっ!?!」

「ナ・イ・シヨ」

「わあゝ 漣さんって、本当にいつもブレませんねえゝ」

「えっへん 律への思慕は永遠だ」

「憂ちゃん、そこ感心するところちゃう…最早、漣にはどこからッ
コんでいいのやら…」

すると、美人なのにあらゆる意味で残念な幼馴染みはモジモジしながら、

「り、律が突っ込む方がいって言うなら、私は受専でも…でも、最初は優しく慣れたら激しくして欲しいなって…」

「なんの話だよっ!?!」

「タテとネコの入替えの話ですよゝ」

スツゴくいい笑顔で言う紬を見ながら、

「ほえ? タテとネコって何?」

と、疑問系の唯。

「あの二人を観察してればそのうち分かるわよ。今のところ漣がガ

チタテで、律がネコ候補って感じかしら？」

なんて適当な事を言いながら、既にお馴染みのクラウスターラーの缶をプシュツとミサト開けして喉に流し込む和。

「えっ？ りっちゃん、ニヤンコなの？」

「律さんなら、強気なトラネコって感じだよ」

とは、いつの間にか戻ってきた憂。

「そこっ！ 妖しげなフォローすなっ！！」

さてさて、律溲の漫才も終わり…

「りっちゃんがトラネコなのは分かったけど…」

「唯、その認識は頼むから止めてくれ…無垢なお前に言われると、想像以上に堪える…」

何やら精神的な意味でレイプされたように見えるりっちゃん隊長であつた。

トドメ刺してるのは唯くさいが（笑）

「わ、わかった。それよりわたし、代表挨拶で何を言えればいいんだろっ！？」

「そんなのもつともらしい言葉並べて、口から出任せ& a m p ;ハツタリかませば、どうにかなるわよ」

とは、ノンアルコール・ビールをグビグビ呷る和。

「のどかちゃん、それわたしの芸風違っよお……」

「それもそうねえ……」

と、頬に手を当てて考えてしまうのは紬だ。

ブランクがあるとはいえ、付き合いの長い彼女でも弁舌に長け、熱弁を奮う唯というのは想像できない。というか……

「唯ちゃんは、その舌っ足らずな感じがまた可愛いんだし」

澁に負けず劣らず平常運転の紬である。

「あう……むぎちゃん、そう言って貰えるのは嬉しいけど……」

顔を微かに染めて「てへへっ」と少し困ったように照れ笑いをする唯。

ま、まあ確かに凶悪に可愛い……

思わずゴクリと生唾を飲み込む細 & a m p ; 憂に、ゴクリと旨そうにビールを飲む和（笑）

「でも、本当にどうしよう…わたし、ギターを弾く以外、音楽以外にできることなんて無いよお…」

「なら、そうすればいいんじゃない？」

そうストレートに言い切ったのは当然のように和だった。

「音で自分の気持ちを、思いを伝える…唯の得意技でしょ？」

「えっ？ でも…」

「細、あなたの入試席上は？」

突然の和の質問に、細は要領を得ない顔で、

「えっと…確か、5位だと思ったけど？」

和は小さく頷くと、

「都合が良いわね…私が次席なのよ」

「のどかちゃん、それがどうかしたの？」

「桜高の入学式は、入試成績上位5位までは舞台上に上がらせられるのよ。まあ、要するにその5人を目標に勉強に励めって発破かけの

つもりなんだろうけど…」

和は大して面白くなさそうに、

「要は晒し者よね」

「えっと…あつ！」

紬は何かに気付いたように、

「もしかして、和ちゃんの考えてる事って…」

和はニヤリツと笑い、

「どうせ晒し者になるなら、いつそ”魅世物”みせものになった方が、”観客”も喜ぶんじゃないかしら？って話よ」

「もしも〜し。和さん、今スツゲー悪党笑いしてるって自覚ある？」

律のツッコミは、今度は華麗にスルーされ、

「藤堂さん達のスキル&アビリティは？」

「任せて 護衛と音響以外にも、浸透破壊工作や潜入も得意分野よ」

なんでそんな人材が、琴吹グループにいるのか大いに謎である。

「えっと…むぎちゃん、のどかちゃん、わたしバカだから二人が言ってること、分からないんだけど…？」

「お姉ちゃんは何の心配もしないで、いつも通りギターを弾いてればいいって話じゃないかな？ きつとね」

「どうやら、憂も和と紬の悪巧み（！？）、そのアウトラインは見えてるらしい。」

「ま、そんなとこよ」

「うふふ　大丈夫よ、唯ちゃん　”舞台”は私たちが整えるから」

「????」

「なあ、漣……」

「なに?」

「私らって、完全に蚊帳の外っぽくね?」

「私は律がいればそれで……」

「って、お前はそればっかかいつ!!?」

「私の脳は、律とベースだけで容量と演算能力の90%は使いきってるぞ」

「むしろ残る10%を何に使っているか聞きたいところである（笑）」

夜、市内某所

おでん屋台”こいちゃん”

まだ夜になると冷えるこの時期。

おでん出汁の染みたはんぺんや大根をつつきながら飲む熱燗は、肌寒さも調味料になり、五臓六腑に染み込むようで本当に美味しい。

だから、旧友の「暇だったら久しぶりに朝まで飲まない？ 馴染みのいいおでん屋があるんだけどさあ〜」という誘いに乗り、ふらふらと出てきた桜ヶ丘女子高等学校女教諭”山中さわ子”を一体誰が責められるというのだろうか？

「でも、”紀美”^{のしづみ} どうしたの？ 突然呼び出すなんてさ？」

と、さわ子が視線を向けるのは、金髪にした髪をショートにしたい

かにも活発そうな女性だった。

紀美と呼ばれた女性、河口紀美はニヤツと笑い、

「いや、中々面白いネタ仕入れてさ。しかも、さわ子に関係ありそうなの」

実はこの山中さわ子と河口紀美、かつてその名を知らしめた桜高軽音楽部のOGだ。

いや、それどころか当時の軽音部員で「ヴィメタル・バンド」DEATH DEVIL”を結成し、キャサリン（さわ子）とクリステイーナ（紀美）は中でも”ツイン・リードギター”の二枚看板として活躍し、【桜高軽音部黄金期】を築いた立役者だった。

二人は毎日のようにギターの腕を競った良きライバルであり、同時に解散から8年経つ今でも杯を酌み交わす親友でもある。

「私に関わる面白いネタ？」

「今、”智香^{ともか}”がライブハウスのマネージャーやってるって知ってるっけか？」

「初耳よ！ そっか…智香、また音楽畑に帰って来たんだ」

と、少し感慨深げなさわ子。

智香とは、フルネームを川上智香といい、さわ子や紀美と同期の軽音部OGだ。

その頃は”ジャニス”という愛称を使っていたが、高校卒業後は短大へ進学、さわ子の知る情報では短大を出た後は輸入商社で普通にOLをやってた筈だ。

「なんか、勤めてた会社がギターの輸入を始めたらしくてね。それを触ってるうちに…だってさ」

「へえ〜っ」

「んで、智香のライブハウス…名前は忘れちゃったけどさ、そこで奏ってる娘で、とんでもないのがいるらしいのよ」

「とんでもない…?」

紀美はと杯を開けて、新しい一杯を手酌で注ぐと、

「ENONZってバンドの助っ人によく来てたらしいけど…人呼んで”Yui the Slash”!」

「”スラッシュ”? もしかして、元ガンロゼのギタリストの?」

「そっ! 弾きは、チョーキング系が上手いらしいから、あんまりSlashっぽくないらしいけど、グラスアンシルクハットでレスポをいい感じで鳴かせてるっつてさ」

「へえ〜っ…今時の娘にしては、ずいぶん渋いわね? でも、それと私がどう関係するのよ?」

「慌てなさんなって」

紀美はニヒヒツ　と笑うと、

「そのスラッシユちゃん、なんか桜高に合格したみたいなのよね」

「えっ！？　その娘って、中3だったの!？」

しかし、驚いた後にさわ子は落胆した表情で、

「でも、せつかく来てもらっても今の軽音部って…」

今年の軽音部は3年生しか部員がいなかった。

そして、彼女達が卒業してしまった今となっては…

「あんま心配いららないんじゃない？　なんか、その娘の友人が”赤いベースリスト”で、一緒に桜高に行くみたいだし。他にも、アテがあるみたいよ」

「じゃあ…」

紀美は上機嫌にさわ子に熱燗を注ぎ、

「今日誘ってのは、前祝いよ　我らが軽音部が”第二の黄金期”を迎えるね!」

「紀美…うん、そうね！　それ、いいわね!」

こうして、少女から大人になってしまった女達の夜はふけていくの
だった。

第17話 ";ゐるだくみ!";(後書き)

皆様、ご愛読ありがとうございましたm()m

これで無事にプレ原作時間軸の中学本編の全エピソードは終了となります。

途中色々と自信を無くしかけたが、ここまで来れたのは、本当に読んでくれる、感想をいただける皆様のお陰です

和と紬の悪巧みとは何なのか…?

それは、次回よりの高校編にて明らかになると思います(o^_^)(

b

それにしても、この時点でキャサリンとクリスティーナが出てくるとは、作者も予想外(笑)

それでは、更新はいつか不明ですが、次回よりの高校編でまたお会いしましょうm()m

第18話 "かんのっ!!" (前書き)

皆様、こんにちはー

最近、リアル世界で心の平穏が欲しい暮灘です(^^);

さてさて、今回のエピソードは…

いよいよ、”すらっしゅ!”も原作の時間軸と合流する【高校編】のスタートです(o^_^)(b

そして、17話での和と紬の悪巧みの正体も明らかに!

そして、講堂に響き渡るのは…

波乱万丈を生み出す(笑)高校舞台の”すらっしゅ!”、開幕です

第18話 "かんのっ!!";

その年、琴吹音楽産業から私立桜ヶ丘女子高等学校へ寄付と大量の扱いが簡単な類いの最新音響機材の寄贈があった。

特に放送室や体育館の機材が古く、たまに不具合を起こしたりしていたので、学校関係者は素直に喜んだようだったが…

「状況は全てクリアされたわね」

「紬…それ失敗フラグよ？」

「和ちゃんと私（琴吹音楽産業）が手を組めば、不可能は無い…でしょ？」

「はいはい」

そんな会話をしながら、和と紬は唯の元に向かった。

入学式当日

入試首席合格者”平沢唯”、同次席合格者”真鍋和”、同じく五位合格者”琴吹紬”の三名は、まだ早朝と呼ばれる時間帯に、今は人気の無い…しかし、数時間後には入学式で人が溢れる筈の私立桜ヶ丘女子高等学校の講堂へと来ていた。

唯が挨拶を披露する筈の壇上…その後ろには、

【平成 年度

桜ヶ丘女子高等学校

入学式】

と描かれた横断幕が付けられた緞帳じゆんちやうが下がっている。

簡単に言えば、よく校旗や国旗が貼り付けられてる舞台の一番後ろの幕だ。

そして、そこで怪しげな動きをする三人の少女…

「ねえ、のどかちゃん、むぎちゃん…今更だけど、こんなところにギ―太を隠しておいて平気かなあ…」

「問題ないわ。この緞帳、無駄に分厚いし一見ただけじゃギターやベースが隠してあるなんてちょっとやさつとじゃ分からないわよ」

とは同じく愛用の赤いベース、”TBWU”を隠す和である。

「そうそう だって”チーム藤堂”が念入りに下調べしてるもの

」

と、イタズラを仕掛ける子供のような顔して胸をはる紬。

彼女の藤堂達への信頼は、戦車の正面装甲並に厚いらしい。

絨が緞帳の後ろに隠してるのは、その名の通りギターやベースのよ
うに肩から吊るして使うタイプのコンパクトな白い”シヨルダー・
キーボード（略してシヨルキー）”、Roland社の【AX-S
ynth】だ。

しかし、皆さんは不思議には思わないだろうか？

いくら分厚い緞帳とはいえ、エフェクターはともかく、アンプやキ
ャビネを隠すには無理がある。

実際、ギータもTBWUもシヨルキーも、ケーブルの先にはアンプ
どころかエフェクターにさえ繋がっていない。

接続されてるのは、緞帳の後ろに隠しても目立つことはない、これ
見よがしにアンテナが付いたアンプ等と比べるなら小さな機械だ。

実はこれ、”トランスリミッター”と呼ばれる音響機材で、簡単に
言えばギターなどから出力された電気信号を電波に変換して送信す
る装置だ。

そして…

「ヘッドセット・マイクは確認しておきなさい。本番のスイッチO
n/Offは外部からやるから」

「わ、わかったよー！」

そして、彼女達三人は更に小型のトランスリミッターと、それに接続した折りたたみ式のヘッドセット・マイクを真新しい制服の内側に忍ばせているのだ。

「さしずめ”細工は流々仕上げを御覧じろ”ってとこね…」

(さあ、桜高…)

「唯の音を聴きなさい…!」

そう呟くレンズの奥で強い輝きを放つ和の瞳は愉しげで、同時にゾクツとするほど獰猛だったという…

他の生徒が登校してくる間、唯達三人娘は学校近くの24時間営業

のファミレスで軽い朝食を取りながら時間を潰す。

とはいえ思い出話に花が咲き、

「マルチ・アンプシミュレータの付いたエフェクターも試してみたいよね〜。ほら、ちょっと前に出たLINE6の新しいのとか」

「確かHDシリーズ…PODの新しい奴だっけ？」

「それぞれ」

「じゃあ、今度みんなでお店にいきましょうか」

欲しい機材や楽器の話になる頃には満開になり、危うくタイムアップしかけたのは「ご愛敬。」

そして、始まる入学式…

まあ、どこの学校でもそうだろうが、校長や来賓のありがたくも誰も聞いてない無駄な話はどうにかならない物だろうか？

たまには、「新入生の皆さん、入学おめでとう！ 以上」というシンプルかつ斬新な挨拶があってもバチは当たらないと思う。

そして、どうやら新三年生らしい生徒会長の生真面目な歓迎の挨拶が終わり…

「先生方、先輩方初めまして。わたしが今年、首席入学をした平沢唯といいまふ…痛っ！舌かんひゃっら…」

どうも使い慣れない言葉のせいで舌を噛む唯に、会場から軽く失笑が起きた。

この時点で当事者以外、まだ”隠し楽器”に気付いた者は皆無だ。

「正直に言えば、わたしみたいな者が、壇上に立って何かを喋るなど、場違いだと思っています。わたしは、先生方や先輩方に伝えられるほどの言葉を持ちません…」

ここまでで、唯の発言に疑問を持った者は、少なくとも桜高サイドにはいない。

何しろ、事前に提出された新入生挨拶の草稿は、和の手により完璧に作られたダミー。

だから、教職員はただ随分と謙遜の強い奥ゆかしい娘だと思ったただけだ。

唯の本質を知らぬまま…

「だから！」

唯は目を輝かせ、

「この喜びを音楽で伝えたいと思います！」

と叫ぶと、真後ろの緞帳へと走り出す！

「（紬、行くわよっ！）」

「（うん！）」

三位と四位をスルーして目線で合図を交わした次席と五位、和と紬は、教師が制止の言葉をかける前に走り出し、

「のどかちゃん！ むぎちゃん！」

「唯、悪くないタイミングよ」

「いよいよ本番ね」

三人は同時に、ヘッドセット・マイクを装着すると、それぞれギターをベースをシヨルキーを肩から下げ…

「Let's Play！」

頷き合うと再び、今度は三人で壇上へと駆け戻る！

「「「Now It's Show Time!」」」

三人の少女の声が、”講堂のスピーカー”から響く!

威勢の掛け声とは裏腹に、次にスピーカーから流れたのはチェロの独奏…

少しでもクラシック音楽に詳しい者なら、それがパツヘルベル作曲の”カノン”の最初の1フレーズだと、直ぐに気が付くだろう。

だが異変は2フレーズ目から…

明らかに電気で増幅された低く重いベース音が、主旋律に加わる。

3フレーズ目。

唯の雄大なゆったりとした甘いギター・サウンドが旋律を奏でだす…

ここまでなら、単にエレキ系楽器で、”カノン”のスコア(譜面)をなぞってるだけだ。

だが、4フレーズ目…

絃がシオルキーで”ドラム音を鍵盤で弾いた”瞬間!

「1・2!」

音が…弾けたっ!!

曲目なら、確かにカノンだろう。

しかし…

そのビートは!

そのリズムは!

魂を根底から揺さぶるエネルギーギツシユなサウンドは、紛れもなくハード・ロック!!

もう、お気付きの方もいらっしやるだろう。

唯和絢が【入学式ジャック】のゲリラ・ライブに選んだ曲は、ギター弾きでは知らぬ者はいない有名曲…

【カノンロック】

だっ!!

カノンロックとは?

JerryCという作曲家がパッヘルベルのカノンをネオ・クラシカル・メタル・アレンジした曲で、21世紀初頭にネットで公開さ

れるやいなや、その斬新かつきらびやかサウンドに、またオリジナル・アレンジの自由度高さに世界中のネット・ギタリストが飛び付き、自らの腕前を披露するように下は13才上は80才まで、老若男女を問わない様々なギタリストがネットで【自分のカノンロックを公開している。

特に有名なネット・プレイヤーは、4000万試聴以上を誇る”T w o F u n”や”L e a r z”、”M a t t R a c h”等だ。

そして唯が選んだカノンロックは、上記三名の中で最も華やかで、演奏してる姿が楽しげな”M a t t R a c h”アレンジのバージョンである。

勿論、このカノンロックも憂 和 絃のルートで、ギターソロ用のそれをトリオ・プレイ用に再アレンジされていた。

もし、カノンロックに興味を持たれたなら、”Y o u T u b e”などで下記のタイトルを調べてみると良いかもしれない。

【M a t t R a c h - C a n n o n R o c k F i n a l】

そして、アレンジの参考にした動画は、

【カノンロック うまい】

和のベース・プレイ・イメージは、

【C a n n o n R o c kをベースで弾いてみた】

だ。

どの動画も、決して見て損は無い珠玉の演奏を披露している。

スライド・ビブラートと多彩なチョーキング、その二つを組み合わせたチョーキング・ビブラート…

素早いタッピングに、アルペジオ奏法からスウィープ奏法への自然な変化…

唯のギターテクニクを余す事なく投入したプレイに、自称”ベース・ギタリスト”の面目躍如の和のリズミカル& a m p ;メロディアスなベースに、鍵盤で弾いて電子的に再現してるとは思えない細のビートとパンチの効いたドラム・イミューレート・サウンド…

実は律が加入する前は、絃がキーボードでドラムを弾いたり、シークンサーに打ち込んで自動演奏させていたのだ。そして、今まさにその経験が生きていた。

三人の奏でる個性溢れる、されど見事なまでのハーモニー（調和）を生み出すハードロックなパツヘルベル！！

そのスピーカーから流れる過去と現在が邂逅したサウンドが、最初は啞然としていた生徒を講堂ごと飲み込み、圧倒していた！

見るがいい！

既に生徒の一部は、今が入学式である事も忘れ、激しいが心地いいリズムに身を任せ、からだ肢体を、こころ魂を揺らし初めている！！

しかし、大人達…教諭達はそうも言ってもらえない。

新入生の父兄が見てる前で、こんな前代未聞の”新入生挨拶”を続けさせては、こけん沽券に関わる。

しかし同時に、父兄の見てる前で華奢な少女三人を捕縛するのはばかも憚られる。

いい大人が、衆人環視の中で女の子を数任せで押し倒したらどうなるか…？

結果は、火を見るより明らかだ。

なら、どうするか？

比較的冷静な一人が、カノンロックが流れているのは講堂のスピーカーだから、音響室を押さえて電源か回線を切れればいい事を思いつく。

そして、音響室の扉を開けると…

「す、春原先生っ!?!」

そこにいたのは、まだ歳の若い男性教諭だった。

だが、その春原と呼ばれた教諭もお手上げと言いたげな表情で、

「僕にも何がなんだか…」

そう、音響室にある機材…専門的に言うなら”ミキタク”は、春原の手によりとつくに電源が落とされていたのだった…

その頃、桜高の敷地外に停めてある1台の黒塗りの大型バンの中で
は…

「クッククツクツ…ざあーんねんでした」 そっからじゃなくて、

”ここ”から機材コントロールしてるんだよねえ」

ほっそりとした丸眼鏡の青年…紬専属の”チーム藤堂”の一員で、
PA（音響）ワークを最も得意とする朝比奈が、ケタケタと趣味の

あまりよろしくない笑い声を立てていた。

皆さんは、合宿ラストの”説得ライブ”で、裏方のPAを担当していた青年を覚えているだろうか？
そう、彼である。

「相変わらずいい性格してるな」

と、呆れるのはサブPA……つまり今回は助手役を務める、同じくチーム一員で野伏のような印象のト部だ。

「いいじゃないの、ト部さん　おっ、慌ててる慌ててるう」

そう、このバンは改造車で、運転席から後ろは音響機材遠隔操作用の”移動PAルーム”になっているのだ！

種を明かせばカラクリはシンプルで、唯和絃の楽器が繋がってるトランスリミッターから出た電波を講堂の音響室のミキタクが拾い、そのミキタクをバンから同じ原理で朝比奈とト部が無線操作していたのだった。

本来なら唯達がエフェクター・ボードでかけてるエフェクトも、バンからの操作でミキタクでかけている。

そして、タチが悪い事にバンから操作した場合、ミキタクは表向き正常動作に見えるよう細工されていた。

まさに琴吹の技術力と資本力の結晶のような代物である（汗）

こうして、誰にも邪魔される事なく、唯達の奏でるカノンロックは、生徒達の父兄達の心を揺さぶりながら広がってゆくのだった…！！

第18話 "かんのっ!!" (後書き)

皆様、ご愛読ありがとうございましたm(____)m

はい、いきなりやらかしましたこの三人(^ ^ ;

唯は壇上で真面目に喋るのは苦手ですが、ステージでの演奏は慣れてまっから(o ^ . ') b

和もステージ立ってるし、何気に肝っ玉が一番座ってそう(笑)で、
紬もコンクールとか出てますからね

それにしても、この三人のカノンロックは、イメージすると可愛い
可愛い

ちなみに、【けいおん！ カノンロック】で検索しても面白い動画
が見れますよ(o ^ . ') b

さて、今までのようなペースキープができるかわかりませんが、
【
高校編】もどろどろしくお願いしますm(____)m

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7950w/>

すらっしゅ! 【桜高うんたんRock'n GIRLS】

2011年10月13日13時51分発行